

本島ノ邦領ニ復スルヤ、先ツ、此ノ豊富ナル森林ノ概況ヲ調査スヘキ必要ヲ認メ、全島ヲ十調査區域ニ分チ、明治三十九年ヨリ之ニ着手シ、同四十一年ニ至リ、全部ヲ終了セリ。其ノ際假定シタル調査區域ハ左ノ如シ。

年次	番號	區域
三十九年	第一區	亞庭灣内
同	第二區	中里及豊原方面
同	第三區	落合及内淵方面
同	第四區	東海岸中知床岬ヨリ真縫迄
同	第五區	西海岸西能登呂岬ヨリ久春内迄
同	第六區	同 久春内ヨリ雄武沼迄
同	第七區	同 雄武沼ヨリ國境迄
同	第八區	東海岸真縫ヨリ内路迄
同	第九區	幌内川沿岸及内路ヨリ國境迄
同	第十區	幌内川流域以東敷香ヨリ北知床岬ヲ經テ國境迄

而シテ其ノ概査ノ成績ハ、次表ノ如シ。

調査年度	調査區域番號	針葉樹林面積	針葉樹林材積	闊葉樹林面積	闊葉樹林材積	針闊混生林面積	針闊混生林材積	未立木地	其他	面積	材積
三十九年	一	二六、三三六	一〇、三三三〇七	一、九三六	一、四八二	一、四八二	八、八六二	二、九七六	四、五七六	一、〇三二	一、〇三二
同	二	一三、六三三	六、七三二七	六、八三三	二、三、四七	三、〇、五二	四、五七六	一、〇三二	一、〇三二	一、〇三二	一、〇三二
同	三	三五、九九九	一五、〇三三	一、三〇三	九、〇三六	六、三、五三	七、三、七〇	七、三、七〇	七、三、七〇	七、三、七〇	七、三、七〇
同	四	一五、五九四	七、七九九〇	二、一〇四	六、九七四	一、九、〇七	一、三、五〇	一、〇三九	一、〇三九	一、〇三九	一、〇三九
同	五	一八、八〇九	七、二五三	二、四八七	三、八、三六	一、三、八六	一、〇三九	一、〇三九	一、〇三九	一、〇三九	一、〇三九
同	六	二六、〇九〇	一三、四七六	二、四八七	三、八、三六	一、三、八六	一、〇三九	一、〇三九	一、〇三九	一、〇三九	一、〇三九
同	七	一八、七七八	二、八三二	一、八七九	四、七、八五	二、二、二	二、二、二	二、二、二	二、二、二	二、二、二	二、二、二
同	八	三、八、五六	三、七、〇、四七	三、七、〇、四七	三、七、〇、四七	三、七、〇、四七	三、七、〇、四七	三、七、〇、四七	三、七、〇、四七	三、七、〇、四七	三、七、〇、四七
同	九	三、四、〇、六六	一、〇、三、八、八四	二、七、〇、八〇	三、五、〇、〇七	一、〇、八、〇〇	一、二、二、三	一、二、二、三	一、二、二、三	一、二、二、三	一、二、二、三
同	一〇	三、五、一、五九	一、〇、八、九、四、五七	二、二、一、〇、四	五、八、九、九四	二、六、七、七	二、六、七、七	二、六、七、七	二、六、七、七	二、六、七、七	二、六、七、七
計		二、一〇、四、四三	一、一、三、五、七、八六	四、三、七、七〇	八、九、三、三、五三	三、七、一、八、八六	九、四、八、三、五七	八、〇、九、五八	三、一、六、四四	三、三、五、三、七二	一、四、〇、六、三、三

第一區 ハ、亞庭灣内沿岸一帯ノ林地ヲ包含セルモノニシテ、多クハ海岸ヨリ直ニ針葉樹林トナル。

其ノ樹種ハ樺太落葉松、榎松、蝦夷松ノ三種類ナリ。樺太落葉松ハ平地ニ最も多ク、瀧内西岸赤川以南ニハ之ヲ生セス。一般ニ分水嶺ノ山腹以上ハ瀧葉樹林ナリ。大泊及荒栗地方ハ、露領時代ニ伐採セシ跡地少カラス。本區域中、最宏大ナルハ留多加川流域ノ森林ニシテ、其ノ延長數十里ニ互ル。多蘭内川、雨龍川、菱取川、泊尾川、大泊川、女麗川等ノ流域ニ於ケル森林モ、亦之ニ亞キテ良材ニ富ミ、且ツ瀧内水運ノ便アルヲ以テ、比較的速カニ之カ伐採ヲ見ルニ至ルヘシ。

第二區 ハ中里ヨリ豊原方面ニ互ル區域ニシテ、鈴谷平原亦此内ニ包含セララル。此ノ平原ニハ樺太落葉松最も多ク、頗ル良材ニ富メリ。又、山地ニハ、針葉樹瀧葉樹相混淆ス。露領時代ニハ、此ノ區域内ニ十數ノ小部落散在セシヲ以テ、其ノ附近ノ森林ニテ、已ニ伐採セラレシモノモ尠カラス。此ノ地方ヨリ産出スル木材ハ、鐵道或ハ鈴谷川ヲ利用シテ、亞庭灣沿岸ニ輸送スルコトヲ得ルノ便アリ。

第三區 ハ落合ヨリ内淵ニ至ル方面ナリ。柏濱及落合附近ノ森林ハ、數回祝融ノ難ニ罹リ、遠ク東方ニ延焼シテ鈴谷山脈ニ及ヒ、其ノ範圍、實ニ一萬四千町歩ニ達シ、僅ニ内淵川ノ岸ニ柳、山楡、やちだも、からふとかしは等ヲ殘存スルノミ。然レトモ燒跡地ニハ白樺、樺太落葉松ノ稚樹、簇々トシテ後生シツ、アルヲ以テ、漸次、林相ヲ恢復スル望ミナキニアラス。落合ヨリ西南數里ニシテ川南、川北等ノ部落アリ。此ノ附近及内淵川流域ノ森林ハ、本區域中、最も良好ナルモノニシテ、内淵川ノ兩岸山嶺ノ中半以下ハ榎松蝦夷松ノ針葉樹之ヲ占メ、其ノ上部ハ針葉混濁林ヲナス。此ノ森林ヨリ伐

採スル樹木ハ、内淵川ヲ利用シテ運搬スルヲ以テ最も便トス。

第四區 ハ眞縫ヨリ中知床岬ニ至ル、東海岸一帯ノ林地ヲ包含セル區域ニシテ、就中林相ノ優良ナルハ、眞縫、内淵間ノ榎松、蝦夷松林ナリトス。之ニ亞キテ良好ナルハ富内附近ノ榎松、蝦夷松及樺太落葉松ノ針葉樹林ニシテ、其他ハ主トシテ針葉混濁林ナリ。而シテ是等ノ森林ハ、何レモ海岸ニ近接セルヲ以テ、搬出頗ル利便ナリ。内淵河口ヨリ宗運ニ至ル海岸一帯ハ、古來幾度カ火災ニ罹リタル跡地ニシテ、殆ト柏濱附近マテ連續セル、大面積ノ未立木地ナリ。

第五區 ハ西能登呂岬ヨリ久春内ニ至ル西海岸一帯ノ地ニシテ、點々所々ニ榎松、蝦夷松ノ林立スルヲ見ルト雖、樺太落葉松ニ至ツテハ、絶エテ其ノ影ヲ認メス。而シテ西能登呂岬ヨリ眞岡ニ至ルマテハ、林相、頗ル粗惡ナル針葉混濁林ニシテ、此ノ地方ハ氣候比較的溫暖ナルヲ以テ、島内、他ノ地方ニ於テ更ニ見ル能ハサルやまざくら、ぶどう、こくは、しころ、はりぎり等ノ簇生スルヲ見ル。然レトモ、地勢海岸ニ直接シタル傾斜地ナルカ故ニ常ニ強烈ナル海風ヲ受ケ、從テ林木ノ生長一般ニ好良ナラス。眞岡附近ニハ、近來火災ニ罹リタル所多キモ、眞岡久春内間ハ、頗ル良好ナル森林ニ富ミ、就中富内岸、野田寒及追手等ノ森林ハ、本區域中最良ノ部分ニ屬ス。此ノ地方ニ於テハ、到ル處、河川ノ便アルヲ以テ、伐採搬出共ニ一般ニ容易ナリ。

第六區 ハ西海岸ノ久春内ヨリ雄武沼ニ至ル延長約三十七里ニ互リ、海岸ヨリ直チニ針葉樹ヲ生シ、

分水嶺ノ中腹ヨリ潤葉樹ヲ生ス。此ノ區域内ニ於テ、洞内川、惠須取川、雄武沼及惠須取地方ニハ、樺太落葉松ノ純林多シ。而シテ、海岸附近ヲ除キテハ、濫伐及火災ノ害、一般ニ僅少ニシテ、比較的良材ニ富ム。小茂白、惠比須、小田洲、珍内、來知志、古丹、惠須取等ノ諸川ハ、流域宏濶ニシテ運材上最モ便ナリ。

第七區 ハ雄武沼ヨリ國境マテ、延長凡ソ二十七里ノ間ニシテ、此ノ間、殆ト樹木密生シ、地勢最モ峻峻ニシテ、平地少シ。糸音、千緒、諸津、北名好、西柵丹、澤内、恩内、妻内、明石等ノ河川アレトモ、多クハ急流ニシテ而カモ水淺シ。唯北名好川ハ其ノ延長約十五里ニ及ヒ河口幅三十五間ニシテ、稍木材ノ搬出ニ便ナリ。本區域ハ、針葉樹ニ富ミ、潤葉樹林ハ、僅ニ河川沿岸ノ低地、又ハ山嶺ノ頂上ニ散生セルノミ。

第八區 ハ、東海岸眞縫ヨリ、内路ニ至ルマテ、其ノ延長凡ソ三十五里ニ互リ、森林ノ状態ハ第六區、第七區ト略同一ナリ。眞縫馬群潭間ニハ、面積約二萬町歩ニ互ル、大ナル燒跡地アリ。此ノ地、今、潤葉樹ノ幼木ヲ生セル所アルモ、其ノ大部分ハ全ク荒廢ニ歸シタルモノ、如シ。本區域内ニハ、馬群潭、樅保、東知取、新間、古丹岸、内路ノ諸川、西ヨリ東ニ流レテ、皆木材ノ運搬ニ便ヲ與フ。東海岸ハ西海岸ニ比スレハ、潤葉樹林、稍多ク、林木ノ生長、又、比較的良好ナレトモ、船舶、交通ノ便少キヲ以テ、從來森林ノ伐採セラレタルモノ、極メテ少シ。又、西海岸ニハ、鱈搾粕製造ニ多額ノ燃

料材ヲ使用スルモ、東海岸ニ在リテハ、多ク鱈、鮭ノ漁場ノミナルヲ以テ、林木ノ需要モ亦從ツテ少ナシ。

第九區 ハ、敷香ヨリ、國境ニ至ル、幌内川流域一帯ノ地ニシテ、邦領樺太ノ最北部ヲ占メ、特異ノ林相ヲ呈ス。即チ、幌内川本流沿岸地方ハ、曠漠タル「ツンドラ」地帯ニシテ、其ノ面積、約十五萬町歩ニ達シ、生長極メテ不良ナル樺太落葉松散生シ、川ノ兩岸、二三十間ノ幅員ハ、白楊、柳、白樺等簇生シ、僅ニ白楊ノ、稍注目ニ値スルニ過キス。之ニ反シテ西部山地帯ハ、蝦夷松、樅松ノ美林ニシテ、蝦夷松ノ比較的少量ナルヲ特異トス。殊ニ敷香川上流々域ハ、殆ント蝦夷松ノ純林ニ近ク、其ノ林相ノ優美ナル、其ノ蓄積ノ雄大ナル、正ニ本島第一ト稱セラル。現今、交通未タ不便ナル爲、其ノ利用セラル、モノ甚タ尠シト雖、敷香川、シヨツドイ川、ホイエ川、ケツトンガイ川等ノ諸流ハ、皆木材運搬上至大ノ利便ヲ有スルヲ以テ、本區ノ將來、期シテ待ツヘキモノアリ。

第十區 ハ、幌内川流域以東、敷香ヨリ北知床岬ヲ經テ、國境ニ至ル區域ナリ。其ノ南部ナル多來加湖沿岸ハ、幌内川流域ニ連續セル「ツンドラ」地帯ニシテ、面積約九萬町歩、劣等ナル樺太落葉松散生ス。北知床半島ハ、樅松、蝦夷松、樺太落葉松、白樺等生育スレトモ、一般ニ矮小ニシテ利用ノ價値ナシ。東部山地帯ニ入レハ、樅松、蝦夷松ヲ生シ、林相稍見ルヘキモノアリト雖、地勢、一般ニ峻峻ニシテ、海陸共ニ交通不便ヲ極ム。國境附近ニ至レハ、樺太落葉松ノ混生スル所ナキニ非サルモ、頗

不便ノ地域ナルヲ以テ、林木ノ利用大ニ困難ナル可シ。

上記ノ森林概査ニ基キ、其ノ比較的好良ニシテ且ツ運搬上便宜ナル箇所ヲ選定シ、更ニ細部調査ヲ開始シ、左ノ區域ハ既ニ之ヲ終了シ、其ノ他ハ尙逐次繼續中ニ係ル。

森林名	調査面積	蓄積	
		針葉樹	闊葉樹
留多加	一三、一二七	一、一二二、七五四	二二、五四八
豊原	五、九七八	一、七〇五、六一七	七二、七一三
野田	二二、九四四	一四、〇五八、二四四	一一三、〇二六
來知志	二〇、五八三	八、五四二、九七四	二〇、二〇〇
内淵	九〇、七九六	二二、三八〇、一一八	一、四九二、五〇三
富内	六、七四〇	三、六一七、二八八	五一、一二〇
落帆、女麗間	七八、二七一	一三、八六一、八一六	一、四四二、八四七
清川、喜美内間	四四、五四三	一〇、四五〇、七五七	一、一九四、四七四
計	二八二、九八二	七七、二三九、五六八	四、三一九、四三三

此ノ如ク、調査ヲ續行スルト同時ニ、更ニ、保安林并ニ各備林調査ニ着手シ、其ノ他大澤國有林内ニ林業試験林ヲ設ケ、大正元年度ヨリ各種天然更新法ノ試験、テレピン原油製造試験等ヲ開始セリ。

第三節 森林ノ利用

第一項 樹種及用途

本島ニ於ケル有用樹木ノ種類及分布等ヲ表示セハ次ノ如シ。

樹種	方言	科名	數量	主ナル用途	立地
色丹松	ぐいまつ	松科	少	建築、枕木、薪材	廣潤平坦地
落葉松	からまつ	同	少	同	同
蝦夷松	しんこ	同	多	建築、製紙原料、薪材	山麓斜地又ハ平坦地
檜松	とんど	同	極多	同	濕地ヲ除キ到ル所ニ生育ス
楠	おんこ	一位科	極少	建築、小細工	庇蔭地
なかはやなぎ		楊柳科	多	器具	河邊砂地
きぬやなぎ		同	多	箆筒、器具、箱	同
はつこやなぎ		同	多	下駄材、器具	同
とちやなぎ		同	多	器具	同
白楊	わたどろ	同	少	燐寸軸木	同
やまならし	あをどろ	同	極少	同	平地、緩斜地、稍乾燥セル陽地
山楡	やまはんのき	樺科	甚多	薪	河邊砂地、其他濕地
白樺	がらんび	同	多	薪、炭	乾燥陽地

春	楡	わかだも	楡科	多	建築器具	平坦地、稍湿地
おひやうにれ	おひやう	おひやう	同	少	器具、柄、薪	斜地、平坦地、適湿地
花	楸	な、かまと	薔薇科	多	器具	傾斜地、乾燥地
しうりざくら	しうり	しうり	同	同	小器具	緩斜適潤地
おほさんざし	さんちん	さんちん	同	同	小器具、柱	平坦地、陽燥地
いたやかへで	いたや	いたや	械樹科	少	同	平坦地、陽燥地
やちだも			木犀科	少	建築、家具	平坦濕地
はりざり	せ	せ	五加科	少	建築、家具	緩斜地
黄	し	し	芸香科	少	器具、藥用	山地

一五〇

以上ノ中、生長、繁殖共ニ旺盛ニシテ、單獨ニ森林ヲ形成スルモノハ、針葉樹ニ在リテハ、落葉松、蝦夷松、椴松ノ三種ニシテ、潤葉樹ニ在リテハ、白樺、山楡、春楡、柳類ノ數種トス。左ニ其ノ樹種ノ性質及用途ノ大要ヲ述ヘン。

一、落葉松、本島諸處ニ産スト雖、就中、亞庭灣沿岸ノ平坦地、鈴谷、内淵兩平原及富内地方ニ於テ、最良林ヲ見ル。多クハ單純林ヲ成スト雖、亦白樺、椴松、蝦夷松等ト混生スルコト少ナカラス。樹幹遍々高十餘間、直徑往々三尺ニ迫フモノアリト雖、普通一尺内外ノモノヲ多トス。枝極少ナク、材質稍堅ク、木理疎ナラス、材色帶黃褐色ニシテ、脂氣ニ富ミ、克ク水濕ニ耐ユ、加之光澤美ナルヲ以テ、柱、長押等ノ裝飾的建築及船艦ノ橋梁、電柱、枕木等ニ賞用セラル。又足場丸太、土工用材、堤防用材等トシテ貴重スヘシ。

二、蝦夷松、椴松、二種共ニ本島ニ於ケル主要材木ヲナシ、常ニ兩者相混生シテ到ル所其ノ美林ヲ見サルナシ。其ノ優ナルモノハ、高サ十八間、直徑三尺ニ達ス、材質稍軟ニシテ、木理亦多少疎ニ失スト雖、鉋削スレハ光澤頗ル美ナリ。又割裂シ易ク、工作ニ容易ナリ、即チ内地ノ杉、若ハ扁柏ニ代用スヘク、板、角材トシテ建築用、建具用、造船用トシ、其ノ他製紙原料、軸木等トシテ歡迎セラル、又朽腐ニ耐ユルヲ以テ、丸太材トシテ賞スヘシ。

三、白樺、山楡、春楡、柳類、薪炭原料トシテ無盡藏ナリ。其ノ他小器具用材トシテ缺クヘカラス。

第二項 林種區分

本島森林ハ、所謂萬古斧鉞ノ入ラサル原生林ニシテ、從來僅ニ舊部落近傍ニ於テ、一小部分ヲ伐採セラレシノミ。未タ計畫ヲ定メテ之ヲ利用セシコトナシ。仍テ前記調査ノ結果ニ從ヒ、其ノ森林ノ位置、狀況等ニ就テ、保安的、經濟的ノ關係ヲ稽ヘ、大要次ノ如キ林種ニ區分シ、以テ着々其ノ利用ノ途ヲ開カントス。

樺太國有林野區分豫定

國有林野總面積三百三十五萬町步

甲、國有林面積三百五萬町步

第一、經濟林面積二百五十萬町步

一、國家經濟林面積百二十四萬町步

二、地方經濟林面積八十五萬町步

(イ) 住民用備林面積六十萬町步

(ロ) 水産用備林面積十五萬町步

(ハ) 鑛業用備林面積十萬町步

三、ツンドラ地面積二十五萬町步

四、未立木地面積十六萬町步

第二、保安林面積四十三萬町步

一、禁伐保安林面積二十二萬町步

二、制限保安林面積二十一萬町步

第三、特種官林面積九萬町步

第四、除地面積三萬町步

乙、農牧豫定地面積三十萬町步

第三項 林木ノ賣拂

經濟林ニ關シテハ、諸般ノ調査ヲ進メ、又一面ニハ天然更新法ニヨリ更新ヲナスト共ニ、適量ノ林木伐採ヲ開始シ、本島領有以來經濟上ノ狀況ニ鑑ミ、之レカ賣拂ヲナシ、四十一、四十二年度ニ於テハ、更ニ進ンテ試驗的輸出等ヲ爲シ、大ニ利用ノ發展ヲ圖リシ結果、大ニ世ノ注目ヲ惹キ、漸次起業者ノ拂受希望者續出シ、爾後年々其ノ賣拂數量ヲ増加シ、島内到ル所、伐木丁々ノ聲ヲ聞カサルナキニ至レリ、依リテ四十四年十二月勅令第二百九十七號ヲ以テ、樺太國有森林原野產物特別處分令ヲ制定セラレ、重要製產品製造業者ノ爲、特ニ隨意契約ノ途ヲ開キ、且年期賣拂ノ便ヲ加ヘラレタリ。今本島領有以來、大正元年度ニ至ル賣拂成績ヲ舉クレハ、左ノ如シ。

年度	賣拂			無料伐採			計		
	用材	薪材	積材	用材	薪材	積材	用材	薪材	積材
三八	二、九五四	二、三三〇	一、一〇九				二、九五四	二、三三〇	一、一〇九
三九	四七、三三三	一五、三九〇	二、六四七				四七、三三三	一五、三九〇	二、六四七
四〇	一六〇、二二三	三九、六〇〇	五〇、四六五	二八、七三八	二四、八一四		一八八、九六〇	(一、二九)	六四、四四四
四一	五八、八三八	四六、八三三	三、二九六	九九、五七三	五〇、〇二六		一五八、四一一	(一、二九)	九六、〇〇九
四二	(四、五七)	三六、〇九一	一元、九四二	(一、三三七)	四七、三四四		(一、三三七)	(一、三三七)	八三、四三五
	(一九、八〇七)			七八、二八三			三三八、〇九〇		二九、九四二
	(二〇、七四七)			(三、〇一九)			(三、七七一)		

四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三
四八四、五五九 (一九七八六)	四二、三〇六	六四、三三三	五三、六九八 (三〇〇八〇)	四四、四三五	五三八、二五七 (二七、九四六)	八六、七四二	六四、三三三
四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四
八三、四九二 (六一、一五〇)	四九、七九二	九五、八七六	一〇〇、三二二 (二五、三四)	四七、〇五二	九二、八二三 (八七、四九二)	九六、八四二	九五、八七六
大正元	七四、七二一 (七三、九四三)	五三、九九〇	九九、五二四 (二六、一八〇)	八七、一三三 (二六、一八〇)	五二、一四	八〇、一八四 (〇〇、一三三)	一〇、一〇四
							九九、五二四

(材積欄内) (ハ)本敷ニテ材積ニ依ラス處分シタルモノナリ)

第四項 運搬、附、伐木及搬出費

本島ハ地勢一般ニ緩ナルヲ以テ、木材ノ搬出容易ナルノミナラス、河川多クシテ、管流ノ便アリ、殊ニ冬期中ハ河川ノ凍氷、陸地ノ積雪ヲ利用シテ、樋出ヲ爲スニ適セリ。又山中ヨリ海岸迄ノ距離、比較的短キカ故ニ、運材上ノ利便少ナカラス。其ノ他地勢緩ニ、水流ノ落差少キヲ以テ、貯木等ニハ至テ便ナリ。價格及勞銀ハ當今稍高キモ、作業ノ便利ナルカ故ニ、其ノ起業上ノ利益ニ於テハ、寧ロ内地、北海道ヨリ良好ナルヲ見ル。今參考ノ爲、現時ニ於ケル伐木、搬出費ノ一二例ヲ示セハ、左ノ如シ。

- 一、亞庭灣内、女麗川上流海岸ヲ湖ルコト、約二里ニ於テ、伐採丸太百石ニ付、海岸迄伐採搬出費
 - (イ) 伐木費 七・〇〇
 - (ロ) 搬出費 二四・五〇

(ハ) 道付費	二・〇〇
(ニ) 流送費	二五・〇〇
(ホ) 帳場費	六・〇〇
計	六四・五〇

二、西海岸野田寒川上流海岸ヲ湖ルコト約一里半ニ於テ伐採丸太百石ニ付、海岸迄伐採搬出費

(イ) 伐木費	七・〇〇
(ロ) 搬出費	一八・五〇
(ハ) 道付費	一・五〇
(ニ) 流送費	一五・〇〇
(ホ) 帳場費	六・〇〇
計	四八・〇〇

木材輸送ニ關シテハ、夏季ニ於テ最モ良好ニシテ、天候宜シク風浪ナキトキハ、一日ニ二千石位ヲ積取ルコト、決シテ困難ナラス。而シテ積取船ハ可及の大ナルヲ可トシ、二千噸以上ノ汽船ナラハ頗ル良キ結果ヲ奏スルナリ。

今大泊ヨリ東京迄、百石ニ付普通ノ輸送費ハ次ノ如シ。

(イ)	積込解賃	一三・〇〇
(ロ)	船内仲仕賃	六・五〇
(ハ)	本船運賃	一〇〇・〇〇
(ニ)	横濱東京間	一七・〇〇
(ホ)	雜費	一〇・〇〇
	計	一四六・五〇

第四節 林産工業

第一項 木材利用

如何ニシテ木材ノ精巧ナル利用方法ヲ得ヘキカトハ、本島ノ如キ森林地ニ於テ、必然起ルヘキ經營上ノ緊急問題タリ。殊ニ熟木、被害木、生長不良木等ノ廢朽ニ屬スヘキモノ、利用方法ニ至テハ、特ニ林政上一段ノ注意ヲ要スルモノニ屬ス。即チ實際ノ森林狀態ニ就テ之ヲ觀察スルニ、普通其ノ三割ハ是等ノ廢樹ニ屬スルノミナラス、假令壯盛期ニ至ルモノト雖、之ヲ伐採シ製材スルニ當リ、其ノ末梢ノ如キ枝葉ノ如キ、亦尠クトモ三分ノ一以上ヲ伐リ捨テサルヘカラサルノ狀況ナリ。乃チ此ノ時ニ當リテ之カ適當ナル利用方法ヲ講スルハ、國家經濟上、將タ森林經營上、極メテ緊要ナルコトニ屬ス。

而シテ從來木材ノ利用法トシテハ、主トシテ移住民ノ薪炭、建築用材若ハ沿岸漁業者ノ直接漁業ニ要スル建築、漁具及薪材トシテ需要ニ供セラル、外ナカリシカ、近來ハ年期賣拂ニ依リテ處分セラル、木材ニシテ、製紙原料、杭木、挽材又ハ角材等トシテ、内地及支那方面ヘ輸出セラレテ、茲ニ加工利用ノ一端ヲ開クニ至レリ。サレト是等ノ利用法ハ未タ工業トシテハ、何等ノ價值ヲ存セスト雖、目下年期拂受人二三計畫中ノ紙料會社ニ於テ紙料ノ製造ヲ爲スカ如キハ、最モ時勢ノ要求ニ適合シタル企圖ナルノミナラス、其數量并ニ品位ヨリ見テ本島材木ノ顯著ナル利用法ナリト謂ヘキナリ。

第二項 木材乾餾工業

本工業ハ木材ヲ乾餾シ、醋酸石灰、木精、木タール及ヒ木炭ヲ製造スル事業ナリ。現今樺太廳豊原乾餾工場ニ於テ使用セル装置ハ、獨逸マイエル會社ノ專賣ニ係ル、最新式ノ機械ニシテ、一日二十棚ノ木材ヲ乾餾シ得ヘシ。

原料タル資材ハ針葉樹、闊葉樹ノ孰レヲ問ハス、目下ハ主トシテ白樺ヲ用ユ、而シテ之レニ依リ産出セラル、製品ノ割合ハ、

白樺一棚(百八立方尺約三百貫)	ヨリ産出スル製品	
醋酸	石灰	十八貫 (八十%ノモノ)
木精		三十磅 (九十%ノモノ)

木 ターブル 二 斗
木 炭 六十 貫

是等ノ製品ハ、各種工業上ノ必需品ナレト、從來本邦ニ於ケル産出量甚タ少ク、之ヲ輸入ニ仰クノ状態ナルニ依テ見レハ其ノ製品ノ販路廣汎ナリト謂ヘキナリ。

製品ノ用途

一、醋酸石灰

食用、醫藥用ノ純醋酸ヲ製シ、又製藥、寫眞術、染料及無煙火藥ニ使用スル「アセトン」ノ原料タリ。且醋酸石灰ヨリ製造シタル酢ハ味極メテ美ニシテ、夾雜物少ク、腐敗ノ患ナキ特長ヲ有スルヲ以テ、罐詰類ノ味付ニハ最モ適當ス。

二、木精

「ラック」「ワニス」ノ溶劑トシ、或ハ工業用酒精ノ變性用并ニ消毒劑タル「ホーマリン」ノ原料タリ。又精製シタルモノハ無臭ナルヲ以テ、香料ノ溶劑トシテ賞用セラル。

三、木「タール」

工業用トシテ其ノ需要夥多ナリ、例ヘハ「クレオソート」、「イチオール」及「ビツチ」ノ原料ニ用セラレ、此ノ外白樺ハ樺油ヲ、針葉樹「タール」ハ「テレピン」油ヲ含有シ、其ノ用途極メテ廣シ。

第三項 バルブ工業

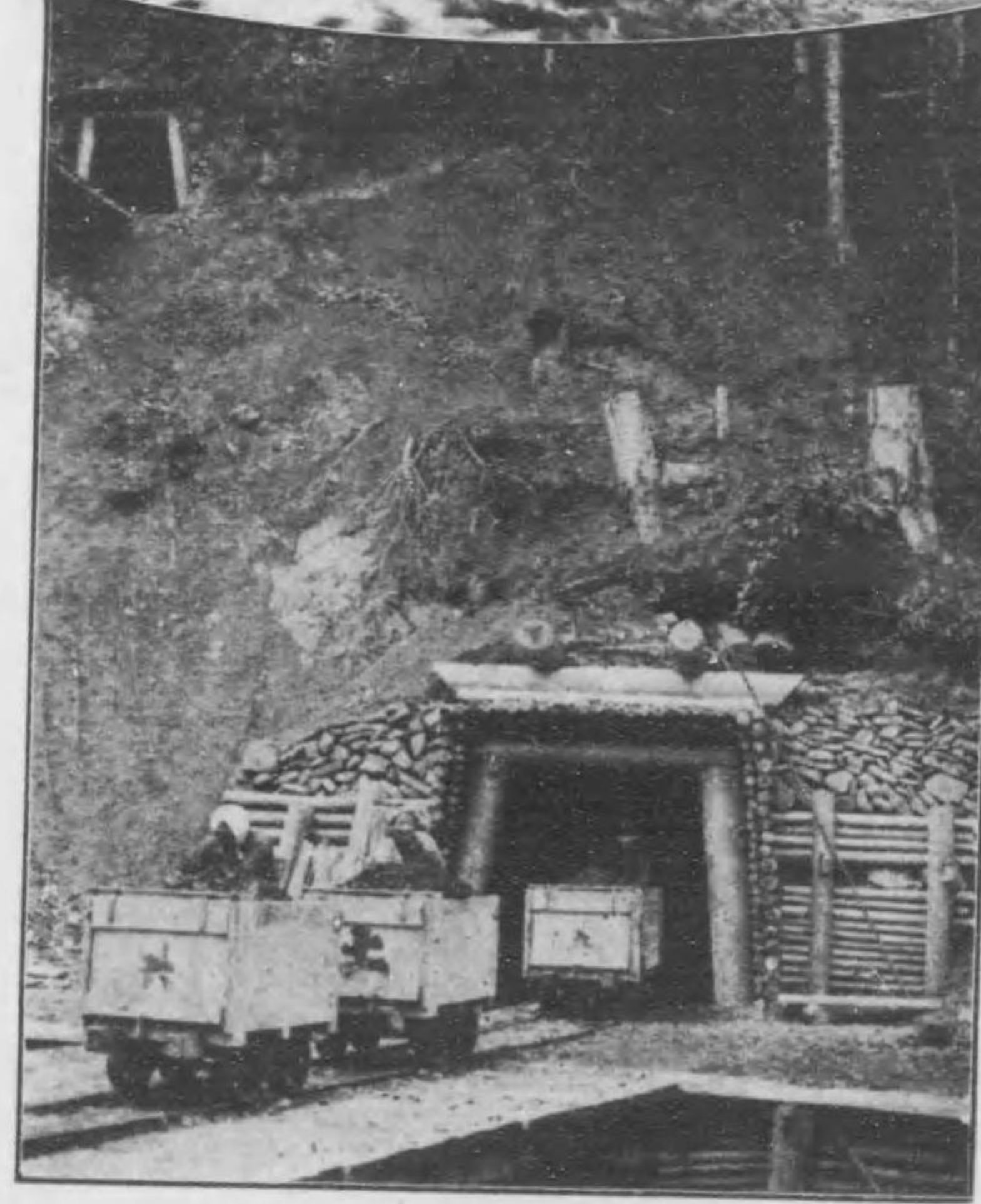
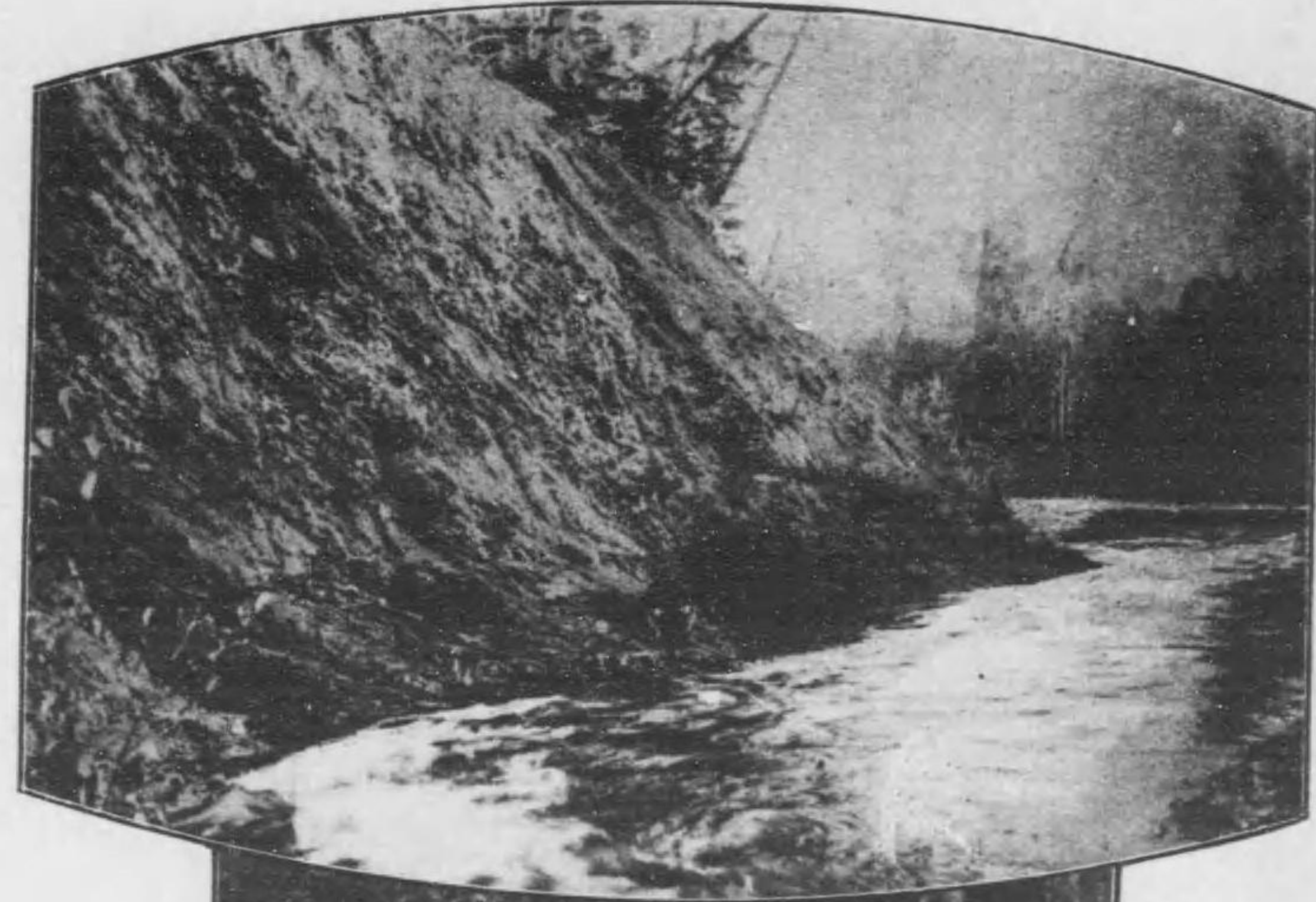
バルブ即チ製紙原料ノ製造會社ハ、目下一個所ハ大泊ニ於テ、三井物産株式會社ニ於テ工場建設中ニシテ、來ル大正四年春ニ至リ運轉ヲ開始スヘク、又一個所ハ泊居ニ於テ大川平三郎ノ發起ナル樺太工業株式會社ニ於テ施設中ナレハ、是亦同シク四年春期ニハ事業ヲ開始スヘシ。何レモ資本金百萬圓以上ナリ、其ノ他漸次勃興ノ兆アルヲ以テ、遠カラズ本島林産工業ノ熾盛期シテ俟ツヘキナリ。

第四項 製材業

目下木工場ハ四箇所アリ。豊原二、大泊一、富内岸一ニシテ、孰レモ洋式鋸ヲ据付ケ、蒸汽力ヲ以テ運轉スルノ装置ナリ。就中豊原ニ於テ經營セルモノハ、設備稍完全ニシテ、一ケ年ノ製材高約一萬五千石ニ及フト云フ。

三井物産會社ノ大泊製材工場ハ、本島ノ豊富ナル林木ヲ利用シ、之ヲ海外ニ輸出シテ、益々本島産木材ノ聲價ヲ揚ケツ、アリ、管ニ同會社ノ利益ニ止マラス、本島産業ノ發展上、大ニ喜フヘキ事ナリトス。

石炭ノ露頭



坑口ニ於ケル炭車

第七章 鑛産

第一節 總説

三十七八年戰役以前、五十度緯線以南ニ於テハ、猿津附近ニ於テ、炭層ノ露出若ハ流礫ヲ發見シ、之カ採掘ヲ試ミシ者アリタレトモ、其廢業後、本島ニ於ケル鑛業ハ、殆ト世人ノ腦裏ニ片影タモ止メサリシカ如シ、然ルニ我カ領有ニ歸シテ以來、地質及鑛産ノ調査ヲ開始シ、幾多有望ナル炭田及砂金其ノ他諸鑛物ノ存在ヲ實見シ、邦領樺太ニ於ケル鑛産ノ頗ル豊富ナルコトヲ確ムルニ至レリ、即チ石炭及砂金ハ其ノ主ナルモノニシテ、就中石炭最モ多ク、品質モ亦良好ニシテ、厚サ十尺ニ達シ、且分布モ頗ル廣ク、南端ハ西能登呂岬附近ヨリ、或ハ斷絶シ、或ハ連續シテ、北方國境ニ達セリ、又砂金ハ鈴谷山脈、中知床山脈及東北山脈ヨリ流レ出ツル河川ノ礫床ニ存在シ、其ノ他ノ金屬鑛物ハ、所々ノ火成岩地方ニ埋藏セララル、建築用及土木用ノ石材類ニハ、花崗岩、玄武岩、安山岩、流紋岩等ノ火成岩及粘板岩、硅岩、硬砂岩、凝灰岩、片岩類等ノ成層岩アリテ、多ク海岸ニ露出セルカ故ニ、採出、運搬共ニ頗ル便ナリ、又石灰ノ原料タル石灰岩ハ、中知床半島ノ海岸ニ露出シ、裝飾用材ナル結晶質石灰岩(大理石)モ亦其ノ附近花崗岩ニ接近スル處ニ在リ、其ノ他砥石材タル凝灰質頁岩ハ、處々ニ露出シ、流紋岩質凝灰岩ハ東白浦附近ニアリ、石油ハ露領ニ在テハ豊富ナリト稱セララル、カ、邦領ニ於

テモ亦含油層ノ露出ト原油ノ滲出トヲ見ル。

サレト此等ノ石炭、砂金其ノ他有用礦物并ニ石材等ハ、大局ノ調査ニ伴フ發見ニ係ルモノニシテ、本島ノ大部ハ、尙未タ精査ノ運ニ至ラス、殊ニ石油及金屬礦物ノ如キハ其ノ產出狀態明ナラサルモノアルヲ以テ、今後調査ノ進行ト共ニ、大ニ本島鑛業ノ進運ヲ促スヘキモノアルヘシト信ス。

第二節 地質

本島ヲ縦貫セル西部山地帯ハ、殆ト全ク白堊及第三紀層ノ岩類ヲ以テ構成セラレ、東部山地帯ハ主トシテ、結晶片岩類及古生層岩類ヨリ成リ、各岩層ハ概ネ子午線ト相一致セル走向ヲ有ス、中央凹地帯ハ種々ナル地質學上ノ現象ニ依リ、本島ヲ南北ニ通貫セル一大陷落地帯タルコトヲ推知スルニ難カラス。

斯クテ、東部山地帯ハ山嶽嵯峨トシテ相連リ、山頂多クハ鋸齒狀ヲ呈シ、地貌頗ル錯雜スト雖、西部山地帯ハ概ネ緩慢ナル傾斜ヲ有シ、蜿蜒起伏シテ、各峯整然南北ニ列レリ、又火成岩ニ於テモ、東部山地帯ニハ花崗岩ノ如キ深成岩多シト雖、西部山地帯ニハ、安山岩及流紋岩ノ如キ火山岩多ク、所ニ圓錐形火山ノ簇登スルヲ見ル。

本島中、邦領ヲ構成セル岩石ハ、北海道ノ岩石ニ酷似スト雖、結晶片岩類ノ比較的廣キ區域ヲ占メ、

火成岩ノ比較的少キハ、其ノ異レル點ナリトス。

東部山地帯ヲ構成セル火成岩類ハ、主トシテ結晶片岩系及古生界ニ屬スト雖、鈴谷山脈ト中知床山脈トノ間ニ於ケル富内低地及東北山脈ノ東南部ニハ、第三紀層及中生層アリ、中知床半島ニハ花崗岩ニ依リテ變質セラレタル「ホーンフェルス」、雲母板岩、結晶質石灰岩等ノ接觸變質岩類アリ、中央凹地帯ニ面スル所即チ西側部ハ、結晶片岩、或ハ古生層ヨリ成リ、直ニ第四紀層ヲ以テ蔽ハル、東部山地帯ノ北半ニ屬スル東北山脈ハ、國境附近ヨリ多來湖ノ北方及山脈ノ南端ニ至ルマテ、結晶片岩類及其ノ接觸變質岩類并ニ古生層ヨリ成リ、東南部ニ於ケル野頃河畔及北知床半島ヨリ東北海岸ニ至ル一帯ノ地ハ、第三紀層及中生層ヨリ成リ、南半ニ屬スル鈴谷山脈ハ全ク結晶岩類ヨリ成リ、此ノ地方ヲ流ル、河川ノ床ニハ、處々砂金ヲ藏ス、而シテ鈴谷山脈ノ南方楠溪高原ハ、厚層ノ凝灰岩及凝灰質集塊岩ニシテ、富内低地ハ第四紀層ニ屬ス、富内低地ノ處々ニ起伏スル丘陵性高地ニモ、亦第三紀層露出シ石炭ノ薄層ヲ有ス。

西能登呂半島ノ北部ハ、宗仁岬附近ヲ除キテハ、殆ント全ク中生層ヲ以テ構成シ、河床ニハ砂金ヲ有ス、半島ノ南部ハ堅硬燦美ナル花崗岩ヨリ成リ、遠ク海中ニ突出シ、斷崖絶壁ヲナシテ、西能登呂岬角ニ終ル。

能登呂半島ヲ除キタル西部山地帯ハ、全ク白堊紀及第三紀ノ岩層ニシテ、各層整然南北ニ駛走シ、

傾斜或ハ緩ニ或ハ急ニ、幾多ノ褶曲ヲ成シテ東西ニ反轉セリ、白堊紀層ハ、此ノ地帯ノ脊梁ニシテ、第三紀層ハ此ノ白堊紀層ヲ被覆シ、西部山脈ノ兩側ニ沿ヒテ延長シ、其ノ中ニ廣大ナル石炭層ヲ包含セリ、蓋シ樺太ニ於ケル第三紀層ハ、岩層上左ノ四層ニ區分スルヲ得ヘシ。

- 一、下部含炭層
- 二、下部第三紀層
- 三、上部含炭層
- 四、中部第三紀層(楠溪高原層)
- 五、上部第三紀層(野頃高原層)

下部含炭層ハ、黑色頁岩、燧岩等ヨリ成リ、幾多ノ厚層石炭ヲ夾有シ、白堊紀層ヲ蔽ヒ、植物化石ニ富ム、下部第三紀層ハ火山碎片質頁岩、砂岩、燧岩及集塊質凝灰岩ヨリ成リ、夾炭層ヲ蔽ヒ、貝殼化石ヲ藏シ、上部ニ含炭層アリ、中部第三紀層ハ主トシテ原層ノ灰色凝灰質頁岩及砂岩ヨリ成リ、薄層ノ石炭ヲ含有シ貝殼化石ニ富ム、上部第三紀層ハ軟弱質砂岩、粘土質頁岩及砂礫層ヨリ成リ、聖炭ノ厚層ヲ有シ、貝殼化石ニ富ミ、白堊紀層山脈ニ於テハ白堊紀層ヲ不整合的ニ蔽フモノ、如シ。

西部山地帯ノ兩側邊ニハ、火成岩ノ露出甚タ多ク、殊ニ西海岸ニ於テハ殆ント到ル處ニ之ヲ見サルハナシ、五十度緯線附近ニ於テ、閃綠岩様脈岩及輝石安山岩ハ比較的廣キ區域ヲ占メ、又鶉城灣頭ニ

ハ來知志、鶉城、古丹、等ノ圓錐火山簇聳シ、其ノ裾野ハ遠ク海中ニ突出シテ熔岩成ノ岬角ヲナシ、其ノ他西海岸ニ於ケル岬角ノ多クハ、安山岩及其ノ集塊岩ヨリ成レリ。東海岸ニ於テモ古丹岸附近及北遠古丹川以南輪荒ニ至ル一帶ノ山峯ハ、安山岩ヨリ成リ、東白浦ニ於テハ流紋岩ヨリ成レル山峯トナリ、其ノ山麓海中ニ突出シテ東白浦岬ヲ成セリ。海馬島モ亦安山岩及第三紀層ヨリ成リ、火山ノ舊跡ヲ存セリ、而シテ是等ノ火成岩中ニハ、處々ニ金屬鑛脈ノ包藏セラル、ヲ見ル。

北中央凹地帯ニ在リテハ、幌内川中流以北ノ河畔ニ點々露出セル安山岩ノ外、堅硬ナル岩層ヲ見ス、「ツンドラ」ヲ成セル地盤ハ、第四紀層ニ屬スル粘土ト、粘土ヲ以テ膠着セル砂礫トニシテ、厚層ノ泥炭ヲ蔽ヘリ、南中央凹地帯ニ至リテハ、粘土及砂礫ニシテ泥炭甚タ薄シ。

第三節 有用鑛物

第一項 石炭

邦領樺太ニ於ケル石炭ハ、炭質上(一)揮發分ノ比較的少クシテ光澤強ク稍脆弱ナルモノ(猿津炭田)ト(二)揮發分ノ比較的多クシテ光澤稍弱ク塊狀ヲ成セルモノ(中央炭田)ト(三)水分比較的多クシテ光澤ナク塊狀ヲ成セルモノ(南部炭田)トノ三種ニ別ツコトヲ得ヘシ。

猿津炭、中央炭ハ灰分硫黃分共ニ少ナク、前者ハ、炭製造ニ適シ、後者ハ瓦斯製造ニ適ス、何レモ

汽船汽車用トシテ良好ナリ、而シテ南部炭ハ前者ニ比シテ品質著シク劣レリト雖、是レ亦採暖用及工業用燃料ニ供スルニ足ルヘシ。

炭田中其主ナルモノヲ擧クレハ、南部炭田、中央炭田、猿津炭田、北部炭田等ニシテ何レモ廣濶ナル地域ニ互レリ。

一、南部炭田 南部炭田ハ更ニ(一)吐鯤保川方面(二)南名好川方面(三)雨龍川方面ニ分ツコトヲ得。第一方面ノ炭田ハ北ハ吐鯤保川口ヨリ四尺乃至二十尺ノ四炭層、海岸ニ并シテ南走シ、殆ト能登呂半島ノ南端ニ至ルモノニシテ、海岸ヲ距ル五六町乃至一里ナリ。然レトモ含炭層ハ比較的新期ノモノニ屬シ、炭質良好ナリト云フ能ハス。南名好川方面ノ炭田ニハ、良好ナル炭層ノ露出多ク、厚サ四尺乃至十五尺ノモノ五層アリテ、其ノ區域モ亦狭カラス。第三方面ノ炭田ハ、分水嶺ノ兩側ニ沿ヒ、北ハ雨龍川水源地方ヨリ、南ハ能登呂川水源ノ南方ニ至ル、約十里ノ間ニ敷延セルモノニシテ、厚サ四尺乃至十五尺、炭層數約五層ニシテ、下部含炭層ニ屬シ、炭質良好ナルモノアリ。

二、中央炭田 本炭田ハ内淵川ヲ溯ルコト約十里、本島西部山地帯ニ屬スル脊梁山脈ノ西側ニ於テ、傾斜緩ナル二十有餘層ノ炭層、數度ノ褶曲ヲ成シテ北西北ニ走リ、一ハ野田塞岳ノ北方ニ於テ、分水嶺ヲ越ヘ、泊居川方面ニ至リ、一ハ南西ニ走リテ川上川方面ニ至ル、本島有數ノ大炭田ナリ。含炭層ハ下部含炭層ニ屬シ、其ノ最モ厚層ナルハ約二十尺ニ達ス。炭質ハ光澤強ク、漆黒色ヲ呈シ、揮

發分ハ割合ニ多ク、硫黃分ハ百分中一以下ニシテ、良質ノ塊炭ナリ。

三、猿津炭田 北名好川ノ川口附近ヨリ北方一里餘、猿津川ノ北ニ至ル間ニ於テ、海岸ノ懸崖ニ幾多ノ炭層露頭ト、往時露人ノ採掘セシ舊坑口、木道等ノ廢頽セルモノアルヲ見ル。是レ即チビテイヤテインスキー炭坑ト稱シ、十餘年前マテ稼行シタルモノナリト謂フ。炭層ハ四尺以上ノモノ五層アリ、褶曲斷層甚タ多ク、安山岩脈及同岩磐ノ炭層ヲ貫通スルアリ、爲ニ燧石即チ「ハシリ」ヲ形成ス。炭質ハ光澤頗ル強ク、稍脆弱ニシテ、揮發分比較的少ク、又骸炭分非常ニ多ク、硫黃及灰分甚タ少キ良炭ナリ。

四、北部炭田 樺太山脈ノ東側、幌内川ノ西方ニ起伏スル丘陵性ノ山地ハ、下部含炭層ニシテ、厚層ノ石炭其ノ中ニ介在ス。其ノ區域ハ南敷香川附近ヨリ北、國境ニ連續シ、延長約二十里ニ達ス。炭層ハ敷香川河畔ニ於テ厚サ十尺ノモノ一層、ホイエ川河畔ニ於テ厚サ十六尺ニ及フモノ(一尺三寸ノ「挟ミ」一枚及一寸乃至五寸ノ「挟ミ」三枚)一層アリ。尙ホイエ河畔ニ於テ二尺以上ノモノ五炭層ヲ見ル。又國境附近ハハンダサ川河畔及其ノ南一里ノ河畔ニ於テモ亦、五尺以上十尺ニ至ル五炭層アリ、炭質ハ漆黒色ニシテ、縞狀模様ヲ呈シ、塊狀ヲ成シ、中央炭田ノ内淵炭ニ類ス。

以上四大炭田ノ外、小炭田ニ至リテハ其ノ數甚タ多シ。北登帆炭田ハ東海岸ニ在リ。炭質ハ北部炭田ノモノニ類ス。皆別炭田モ亦東海岸ニ在リ、西海岸ニハ荒鯉川流域、惠須取川流域、北名好川流域

等ニ各良好ナル石炭ノ露頭ヲ發見セリ。西柵丹及久内炭田ハ共ニ西海岸ニ在リ、炭質ハ猿津ニ類シ、現ニ稼行中ニ屬ス。

樺太産石炭分析表

産地	水分	灰分	灰色	固形炭素	揮發分	硫黄	比重
北部 炭田(敷)	二・二八〇	五・四〇〇	褐色	五二・三二五	三一・〇九五	〇・三三二	一・三二八〇
中央 炭田(内)	?	三・二〇〇	同	五二・七〇〇	四三・一〇〇	?	一・二四一八〇
泊居川	七・〇五〇	二・九〇〇	同	四八・二九〇	四一・七〇〇	〇・三三三	一・二五〇七〇
南部 海岸区域吐鯤保川	五・二二〇	三・九〇〇	淡褐色	四八・九〇〇	四二・二八〇	〇・二九〇	?
炭田(南)	一四・七五〇	四・八五〇	褐色	四四・八六五	三五・五〇〇	〇・五二〇	一・三〇九七〇
猿津 龍川	七・九六〇	四・三〇〇	黒色	四八・〇九〇	三九・七三〇	〇・七三三	一・二四四四六
皆別 炭田	四・四〇〇	四・〇〇〇	鼠色	四七・六二五	四〇・六七五	〇・六四二	一・二七六八〇
北登帆炭田	一三・五二五	三・〇三三	?	六八・四七七	二四・〇二六	〇・六三〇	?
	二・九七五	二・二〇〇	?	五〇・五六〇	三三・七一五	?	?
		六・九六二	?	五七・一四〇	三三・九三	〇・五七〇	?

第二項 石油

邦領樺太ニ於ケル含油層ハ、西海岸ニ接觸シテ駛リ、北ハ泊居ヨリ南ハ名好ニ達ス、而シテ真岡附近ハ真岡開灣中ニ沒ス。

含油層ノ露出ハ、西部山地帯ヨリ西ニ流下スル鳥舞、吐鯤保、南濱、椎内等ノ諸流域ニ於テ之ヲ見ル。是等ノ諸川ヲ貫キ、略ホ南北ニ平行スル三條ノ背斜軸アリ、軸ノ附近ニハ可燃瓦斯ノ發生、冷鑛泉ノ滲出又ハ湧出多シ。含油層ノ多クハ、稍堅硬ナル青色細粒砂岩ニシテ、厚二呎乃至十八呎、少量ノ原油ヲ含有シ、水中ニ投スレハ油彩ヲ浮游ス、而シテ層ハ凝灰性粘土質頁岩、凝灰質砂岩又ハ粘土質頁岩、砂質頁岩、凝灰質砂岩ノ互層ヲ爲ス、其ノ鳥舞川ニ在ルハ背斜ノ構造ヲ成シ、椎内川ニ於ケルモノハ背斜軸中ニ露出ス、岩質ハ横壓力ノ爲ニ堅實トナリ、傾斜ハ概ネ急峻而シテ空鞍層狀ヲ呈セルアリ。

原油ノ滲出ハ鉢子、亞牛ノ川澤ニ見ハル、亞牛川ハ真岡ヲ距ル北十四里ノ海岸ニ在ル小溪流ニシテ、滲出地ハ溪口ヲ湖ル、約五町第四紀層ノ薄被セル第三紀ノ粘土質細粒青色砂岩及砂質礫層ニ滲出ス、其ノ色ハ暗褐、比重ハ〇・九七、油質ハボトメ一五・七、滲出地ヨリ十町許ノ間ハ、油臭アル細粒青色砂岩ヲ處々ニ見ル、又硫化水素臭ヲ有スル冷鑛泉アリ、傾斜ハ緩ニシテ滲出岩、油臭岩ハ堅硬ナラサルモ此ノ地ニ近接シテ安山岩ノ出沒少カラズ、鉢子川ハ亞牛川ヲ距ル南二里、野田塞ノ北ニ在リ、源ヲ西部山地帯ニ發シ、西流シテ海ニ朝ス、河口ヲ湖ル二十町弱ニシテ、南北行ノ背斜軸ニ會ス、原油ハ其ノ兩翼ニ滲出ス、一ハ河口ヨリ上流約五町集塊岩ノ裂罅ヨリシ、其ノ色暗褐油臭甚タ強シ、一ハ此ノ處ヲ湖ル二十町強頁岩中ニ介在セル凝灰質粘土中ニ滲出ス、地層ハ頁岩砂岩ノ互層ニシテ、斜

ハ緩ニシテ岩質亦強硬ナラス。

一七〇

亞牛海上ニハ海岸ヲ距ル二百七十間許ノ沖ニ於テ、可燃瓦斯ノ發生ニ伴ヒ、豆粒大ノ原油浮出シ、平穩時ニハ油彩ノ游離搖曳スルヲ見ル、又樂磨川流域ニハ硫黃泉三、鹹泉二アリ、共ニ可燃瓦斯ヲ伴ヒ、之ニ點火スレハ青色焰ヲ發ス、石油ノ微候トシテ見ルヘキモ附近ハ岩盤ノ露出ニ乏シク、未タ含油量ヲ發見スルニ至ラス、此ノ他石油ノ微候ト見ルヲ得ヘキ冷礦泉ハ之ヲ北ニシテハ有部、桑間、野田寒千佛、之ヲ南ニシテハ廣地、阿幸、麻内、吐鯤保、椎内、南名好等ノ諸川及溪澤至ル所ニ湧出ス。

第三項 砂金及其ノ他ノ礦物

本島ニ於ケル砂金床ハ、其ノ產地ノ地質ニ依リ、之ヲ(一)結晶片岩地方ニ在ルモノ、(二)古生層地方ニ在ルモノ、及(三)第三紀層地方ニ在ルモノニ區別スルコトヲ得ヘシ。

結晶片岩地方ニ在ルモノ、主タルハ、鈴谷山脈ノ砂金床トス。一ハコタシベツ川ニ、一ハ南負咲川ニ在リ。共ニ鈴谷山脈ヨリ發源シテオホーツク海ニ注クトコロノ小流ニシテ、各富内ヲ距ル北方約六七里ノ點ニ位ス。前者ハ川口ヨリ約二里ノ上流ニ結晶片岩ノ露出セルヲ見、後者ハ數町ニシテ之ヲ見ル。共ニ石英片岩、綠泥片岩及石黒片岩ノ砂礫中ニ砂金ヲ發見スヘク、砂金粒ハ概シテ細小ナリ。

古生層地方ニ在ルモノハ、中知床山脈及東北山脈ノ砂金床ヲ主トス。保多川、札塔川、及白岩附近ノ溪流ハ、共ニ源ヲ中知床山脈ニ發スル小流ニシテ、何レモ花崗岩及珪岩等ノ砂礫中ヨリ、砂金ヲ發

見セリ。東北山脈ハ、國境附近ニ於テ特ニ砂金ヲ産スルコト多シ。四十三年夏本廳調査員ノ、國境附近ヲ踏査スルニ際シ、ミルクナイ川ニ於テ、始メテ砂金ヲ發見シテ以來、砂金採取ノ出願ハ頓ニ増加シ四十四年六月末現在ニ於テ、其許可件數五十有餘ノ多數ニ上レリ、以テ其ノ一斑ヲ窺フニ足ルヘシ。尙其ノ他多來加灣ニ面スル矢向内、此ノ輪間ノ小溪流等ニモ砂金ヲ産ス。

第三紀層地方ニ存スル砂金床ハ、西能登呂半島ノ東岸北部ニ在リ。大泊ヲ距ルコト約十八里、門瀬トヨシナイトノ間ニ位ス。第三紀層ノ上部ニ、酸化鐵ヲ以テ固結セル巒岩アリ。之ニ沿ヒテ砂金ヲ發見ス。海濱ニ砂鐵床アリテ、其内ニモ亦砂金ヲ混ス。約十貫目ノ砂礫中ニ、殆ト一匁ノ合金アリト云フ。

石炭及砂金以外ノ礦物トシテ著シキモノハ、宗仁岬及鴨居岬附近ノ硫化鐵鐵床ナリ。母岩ハ、安山岩及火山質片碎岩ニシテ、厚サ三尺以上ノモノ七脈以上アリ、純粹ノ硫化鐵ニシテ、銅其ノ他ノ金屬礦物ヲ含有セス。脈石ハ、少許ノ方解石及石英ニシテ、硫化鐵ノ晶洞ヲ充タスモノナリ。

第四節 石材及工業用材

建築用材トシテハ、花崗岩、流紋岩、安山岩、玄武岩、砂岩及硬砂岩等アリ。又建築及裝飾材料トシテハ、大理石アリ。工業用材料トシテハ、珪岩、石灰岩、頁岩及珪藻土等アリ。何レモ其ノ用途ニ

應シ、適當ニ之ヲ利用セハ、有望ナルコト多言ヲ要セス。左ニ其ノ主ナル産地ヲ記サン。

花崗岩ハ、中知床岬附近ニ産出ス。何レモ堅實緻密ナリ。

流紋岩ハ、眞縫附近ヨリ東白浦ニ至ル間ニ産出ス。砥石材トシテ適當ナルヘシ。

安山岩ハ、西海岸ニ在リテハ海馬島及自主岬、宗仁岬、野田寒附近、野田寒岳、鶴巢岬、鶴城岬附近、猿津附近、西棚丹附近以北。亞庭灣内ニ在リテハ、知志谷崎。東海岸ニ在リテハ、馬群潭ヨリ北登帆附近マテ、古丹岩附近、檜保附近ニ存在ス。就中海馬島ニ於ケルモノハ、所謂材木石ニシテ多ク角柱狀ヲナセリ。

砂岩ハ本島到ル處ニ産出ス。而シテ現時採掘シテ使用セルハ、眞岡市街ノ背後ノ連山ヲ構成セル火山質暗青岩ニシテ、俗ニ眞岡石ト稱ス。

硬砂岩ハ、中知床半島ノ處々ニ露出セリ。

大理石ヲ産スル處ハ、白岩岬附近ニ於テ三箇所アリ。

硅岩ハ、中知床半島到ル處ニアリト雖、最モ多キハ笑根ノ南方、ウヱリカン岬附近ナリ。

石灰岩ハ、中知床半島ニ七箇所ノ露出ヲ見ル。就中其ノ最大ナルハ、内音川ノ川口附近ノモノナリ。

頁岩ハ、西海岸到ル處ニ在リ。又皆別附近ニモ之ヲ見ル。砥石材トシテ適當ナルモノ少ナカラス。硅藻土ハ、鉢子附近二里ノ間ニ互リテ露出セリ。

第五節 採炭試験所

本所ハ四十二年六月樺太廳ノ開始ニ係リ、専ラ炭層ノ状態、炭量、炭質及採炭、搬出、船積、販路等ノ經濟關係ヲ調査シ、傍ラ島内需要ノ石炭ヲ供給セシムルコトヲ期セリ。

初メ地ヲ中央炭田ノ一部、泊居川流域ニトシ、事務所ヲ泊居川ノ川口ヨリ上流五哩ノ地點ニ設ケ、是ヨリ進ミテ元山坑、安藝川坑ノ二坑ヲ開掘セリ、採炭ノ方法ハ長壁法ヲ用ヒ、選炭ニハ乾式ノミヲ用ヒ、坑内ノ運炭ハ十二封度ノ軌條ニ依リ、手押ノ炭車ニヨリ山元貯炭場ニ搬出シ、坑外ノ運炭ハ山元貯炭場ヨリ選炭場ニ在ル間ハ「エンドレス、ロープ」ノ便ニ依リ、選炭場、海岸貯炭場間ハ蒸汽式輕便鐵道ニ依レリ。

然ルニ試験ノ結果、本炭田ノ大規模ノ經營ニ適セサルヲ認め、同時ニ豫期ノ調査ヲ終リタルヲ以テ四十四年九月以來其ノ規模ヲ縮小シ、最低ノ必要程度ニ於テ之ヲ經營シ、次テ經濟的操業ト民營工業創設ト相須ツノ要アルヨリ元年六月其ノ作業ヲ休止セルカ、後請負契約ニ依リテ起業スルコトニ決セリ。

本試験ノ成績ニ徴スレハ、西部山地帶西側ノ炭層ハ、比較的斷層ニ富メルモ、其ノ炭質ハ良好ニシテ最モ汽罐ノ燃料ニ適セリ、而シテ冬季ニ於テモ除雪ノ外稼行上困難ヲ認めス、坑内ノ排水ハ坑口ニ於テ、地下三尺ニ木樋ヲ埋ムレハ安全ニシテ、坑内瓦斯ノ發生稀薄ナル爲、通氣ハ自然ノ通氣ニテ充

分ナリ。殊ニ採炭經濟上最重要視セラル、坑木其ノ他ノ用材ハ、地域内隨處ニ之ヲ求メ得ヘキヲ以テ、採炭上内地ニ於テ見ルヘカラサルノ利便アリ、唯運搬ノ點ニ於テ適當ノ港灣ヲ缺クカ故ニ、五月乃至十月ノ間ヲ除キテハ、海運上殆ント不能ナルヲ憾トスルノミ。

一七四

第六節 鑛業制度

鑛業ニ關スル制度ハ總テ輓近ノ制度ニ係ル、今其ノ現行法規ヲ擧クレハ左ノ如シ。

- 一、鑛業法 三十八年法律第四五號但シ鑛業稅ニ關スル規定ヲ除ク
- 二、鑛業法施行細則 元年樺太廳令第二號
- 三、鑛業及砂鑛業ノ出願、申請及登錄ニ關スル手数料ノ件 元年樺太廳令第一九號
- 四、鑛業登錄令 三十八年勅令第一八三號
- 五、鑛業登錄令施行細則 元年樺太廳令第二二號
- 六、鑛業警察規則 二年樺太廳令第四一號
- 七、樺太ニ於ケル石炭採掘ニ關スル件 元年法律第二三號
- 八、法律第二三號ニ依ル石炭採掘ニ關スル件 元年勅令第一三七號
- 九、樺太ニ於ケル石炭採掘ニ付採掘料ヲ徵收スヘキ區域ノ件 元年勅令第二號

- 十、法律第二三號ニ依ル石炭採掘ニ關スル件 元年樺太廳令第二四號
 - 十一、石炭競争入札規則 元年樺太廳令第二〇號
 - 十二、砂鑛法 四十二年法律第一四號
 - 十三、砂鑛法施行細則 元年樺太廳令第三號
 - 十四、砂鑛業ノ登錄ニ關スル件 四十二年勅令第一六四號
 - 十五、砂鑛業ノ登錄ニ關スル細則 元年樺太廳令第二三號
 - 十六、鑛業及砂鑛採取ニ關スル鑛區稅及砂鑛區稅 四十四年勅令第五號
- 是等ノ制度中一、四、十二、十四ハ内地ノ鑛業制度ヲ本島ニ施行セラレタルモノニシテ、其ノ他ハ特ニ制定セラレタルモノナリ、今本島ノ鑛業制度ト内地ノ鑛業制度ト著シク異ナレル點ヲ擧クレハ、左ノ如シ。
- 一、内地ニ於テハ鑛業稅ニ於テハ、鑛區稅及鑛產稅アレトモ、本島ニ於テハ單ニ鑛區稅アルノミ、又内地ニ於ケル鑛業登錄稅ニ類スル鑛業登錄手数料ハアルモ、鑛業附加稅ニ關スル賦課規定ノ如キモノナシ。
 - 二、内地ニ於テハ鑛業及工場抵當ニ關スル法規ヲ別ニ設ケアルモ、本島ニ於テハ是等ニ關スル制度ナシ。

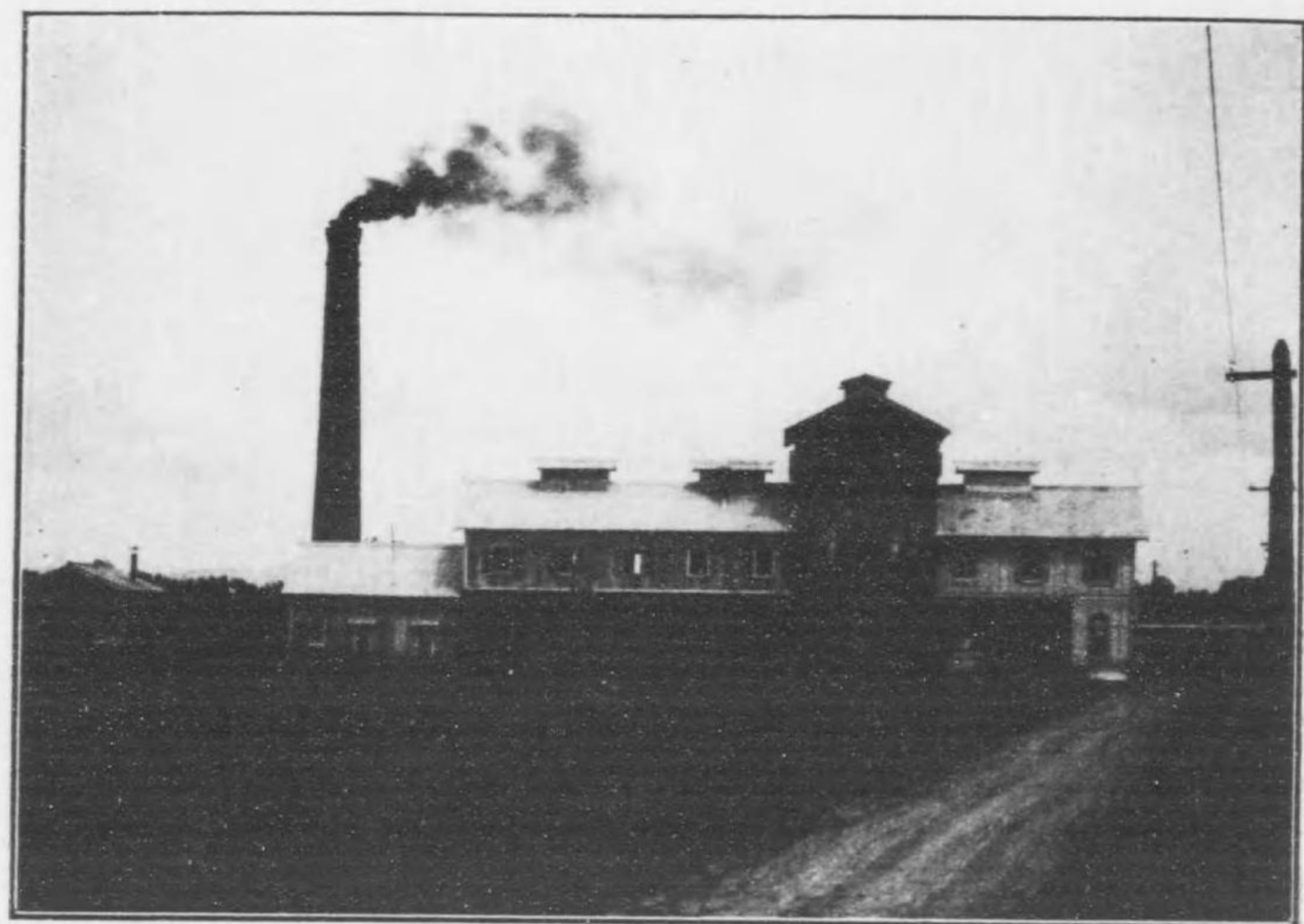


店支原豊太権行銀殖拓道海北



所造製瓦煉ルケ於ニ原豊

三、本島ニ於テハ或箇處ニ限り、石炭採掘料ヲ競争入札ニ附シ、其ノ採掘ヲ許可スルノ規定アレトモ、内地ニ於テハ此ノ制度ナシ。



樺太廳豊原乾留工場



豊原ニ於ケル製材所

第八章 商工業

第一節 總說

本島ニ於ケル商工業ハ、歳ヲ逐ウテ發達ニ嚮ヒツ、アルモ、未タ幼稚ナリト云フヲ免レス、是レ開發當初ノ殖民地ニ於ケル一般的ノ現象ニ外ナラサレトモ、抑モ亦商工業ノ發達ハ天然ノ形勢ニ俟ツモノ尠ナシトセサルニ、本島ノ如ク、地勢頗ル不利ニシテ、氣候亦極メテ寒冽ナル土地ニアリテハ、是等ノ缺點カ、アラユル企業ノ發達ヲ阻礙スルハ勢已ムヲ得サル所ナリ。即チ之ヲ露領時代三十年間ノ治績ニ徵スルニ、唯自然ノ成行ニ放任シテ、敢テ積極的經營ニ就カサリシモ、畢竟以上ノ如ク不利ナル天然ノ状態ニ抑制セラレタルカ爲ナラン、樺太開發ノ比較的ニ遅々タルノ觀アル亦止ムヲ得サルナリ。然レトモ我カ南樺太ノ地タルヤ、素ヨリ天然ノ寶庫ニシテ、饒多ナル海産物、脈々タル炭礦、鬱鬱タル森林、或ハ又肥沃ナル原野等、一トシテ利源ノ豊富ナルヲ示サ、ルハナシ。サレハ企畫經營ニシテ宜シキヲ得ンカ、諸般ノ産業亦自ラ振興セルニ至ランコト期シテ待ツヘシ。乃チ明治三十八年民政施行ト共ニ、本島ノ利源ハ漸ク開發ノ緒ニ就キ、官ニ於テ各種試驗場其ノ他ノ工場ヲ創設シ、延ヒテ以テ産業發達ノ先驅ヲナシ、或ハ民間ニ漁業組合ヲ組織シテ、集約的經營ノ下ニ、斯業ノ安固ト統一トヲ計ラシメ、或ハ亦近ク鐵道ノ延長、港灣ノ修築及ヒ道路ノ開鑿等、交通機關ハ漸次完成ニ近ツ

キツ、アルト共ニ、民業ノ勃興亦著シク、既ニ諸般ノ事業ニ互リ、實際着手ノ計畫ヲ整へ、或ハ又現ニ調査中ナルモノ尠カラス、若シ夫レ今後益々拓地殖民ノ實ヲ擧ケ、交通機關ノ完美ヲ計リ、以テ諸般ノ施設ヲ充實スルニ努メンカ、樺太商工業ノ振興、歲ト共ニ顯著ナルヘキヲ疑ハス。

第二節 商業

三十八年本島占領後、自由渡航ノ許サレシ當時ニ在リテハ、新領土ノ常弊トシテ、所謂一攫千金ヲ夢想シ、浮薄ナル商人ノ渡航スル者頗ル多ク、或ハ天幕ヲ張り、或ハ小屋掛ヲナシ、争ヒテ營業ズルノ有様ナリシカ、爾來幾多經濟界ニ於ケル變動ハ、漸次斯ノ如キ不健全分子ヲ驅逐シ、從テ着實ナル商人ハ、漸ク其ノ基礎ヲ確立シ、年々人口ノ増加スルト、追次海產業其ノ他ノ盛況ニ向フニ伴ヒ、本島商工業、幼稚ナカラモ亦次第ニ活氣ヲ帶フルニ至レリ、而シテ是等營業者ハ、主トシテ各支廳所在地ニ聚落スルトモ、就中、豊原、大泊、真岡ノ三市街地ヲ以テ、其ノ最タルモノトス。

豊原 三十九年市街地ノ測設セラレテヨリ、移住者年々増加シ、殊ニ附近ハ本島中、最モ廣大ナル殖民地ナルヲ以テ、此ニ聚來スル農民ノ數ト共ニ、物資ノ此ノ地ニ集マルモノ次第ニ加ハリ、四十一年樺太廳ノ移應以來ハ、商取引頓ニ頻繁トナリ、從來地形上、他ノ二市街大泊真岡ニ比シテ、遜色ナキヲ得サリシモノ、今ハ市況大泊ニ亞テ般盛ニ、大正元年末調査ニ係ル、本市街ノ營業者ノ數ハ、一

般人口四千六百七十五人ニ對シテ、本業兼業ヲ合セテ六百二十五人アリ。

大泊 三十八年民政署設置當時、既ニ渡來者ノ數二千人ニ及ヒ、商業從テ盛況ヲ呈シ、本島第一ノ繁榮地ナリシカ、四十一年樺太廳及ヒ守備隊ノ豊原ニ移轉セラレシヨリ、市況稍不振ノ色アリタレト、内外交通ノ要地ニシテ船舶ノ出入頻繁ナルト共ニ、移出入物資ノ聚散夥シク、殊ニ四十二年三月開港ト共ニ、函館稅關支署ヲ置キ、外國貿易ヲ行フニ至リシヨリ、面目ヲ一新シ大正二年ニ入リテハ埋立工事完成シ、バルブ工場、電氣事業、酒精製造所等續々企畫セラレ、近ク事業ノ開始ヲ見ントシ、繁盛本島ノ首位ヲ占ム、大正元年末調査ニ依レハ、本市街營業者ノ數ハ、一般人口六千四百四十七人ニ對シ、本業兼業ヲ合シテ九百八十九人ナリ。

真岡 本島唯一ノ不凍港ニシテ西海岸ニ於ケル最モ樞要ノ地ナルカ故ニ、三十八年民政支署開設ニ先チ、渡航スルモノ多カリシカ、三十九年五月、營業取締規則發布セラレテ以來、營業者ノ數又忽チニシテ増加セリ、加之、西海岸一帶ハ漁業頗ル盛ナルヲ以テ其ノ期節ハ特ニ商業繁榮ヲ極メ、且ツ大泊ト共ニ、本島移出入物資ノ大聚散地ナレハ、今後ノ發展、亦想見スルニ足ルヘシ、大正元年末調査ニ係ル、本市街營業者ノ數ハ、一般人口三千八百二十四人ニ對シテ、本業兼業ヲ合シテ八百六十四人ナリ。

其ノ他西海岸ニ於テハ泊居、野田寒、本斗、久春内、北名好、東海岸ニ於テハ元泊、敷香、榮濱等

ヲ數フヘシ。

市街地ノ狀況、略ホ斯ノ如ク般盛ナリト雖、之ヲ内地ニ比スルトキハ、甚シク遜色アルヲ免レス、然レトモ移民開始以來未タ十星霜ヲ經サル本島ニ在リテハ、富庶ノ業其ノ進境著シト謂フヘシ、彼ノ明治三十九年末ニハ一般人口一萬二千三百六十一人、營業者二千九百三十人ニ對シテ大正元年末ニハ、一般人口四萬二千二百十四人、營業者三千七百七十七人ニ達シタルニ徴シテ之ヲ知り得ヘキナリ。只本島ハ毎年十二月末ヨリ、翌年三月マテノ間ハ、沿岸結氷又ハ流水ノ爲、内地トノ交通、甚タ不便ナルヲ以テ、冬期間商業ノ不振ナルハ蓋シ已ムヲ得サル所トス。

又本島ニ於テ、一般物資ハ、其ノ一部ヲ除キ、他ハ悉ク北海道、其ノ他ノ地方ヨリ移入スルモノニシテ、之カ移入ニ多クノ日子ト費用トヲ要スルヲ以テ、其ノ價格モ亦概シテ不廉ナルヲ免レサレトモ、幸ニ必要ナル物資ノ缺乏ヲ告クルカ如キコトナキニ至レリ。而シテ諸會社營業ノ種類及員數、物價、勞銀等ヲ示セハ左ノ如シ。

第一會社 (大正元年末)

種別	大		真		計	
	資本額	總額	資本額	總額	資本額	總額
銀行	5,000,000	5,000,000	5,000,000	5,000,000	5,000,000	5,000,000
市場	7,300,000	7,300,000	7,300,000	7,300,000	7,300,000	7,300,000
及社別						
總額	12,300,000	12,300,000	12,300,000	12,300,000	12,300,000	12,300,000

種別	大		真		計	
	資本額	總額	資本額	總額	資本額	總額
物品販賣	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
馬車鐵道	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
馬車	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
同業	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
請負	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
酒類	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
印刷	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
牧畜	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
競馬	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
漁業	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
製紙	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
罐詰製造	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
海産物製造	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
製氷	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
製糖	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
電氣	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
鐵工	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000
木材	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000	11,500,000

種別	所在地														
	保	倉	運	請	印	寫	製	周	代	仲	仲	問	旅	下	料
	險	庫	送	負	刷	真	造	旋	理	立	買	屋	宿	宿	理
	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業
豐原															
大谷															
榮濱															
大泊															
加留多															
長濱															
宮内															
眞岡															
本斗															
野田															
泊居															
内久春															
敷香															
元泊															
名好															
鶴城															
計															

種別	所			
	銀	物	金	物
	行	品	錢	品
	業	貸	貸	販
	業	付	付	賣
豐原				
大谷				
榮濱				
大泊				
加留多				
長濱				
宮内				
眞岡				
本斗				
野田				
泊居				
内久春				
敷香				
元泊				
名好				
鶴城				
計				

備考 豊原ノ銀行一ハ北海道拓殖銀行支店、大泊ノ木材業株式一ハ三井物産會社出張所ニシテ孰
 モ本支店ノ總資本ヲ計上セリ。
 △ハ管轄ヲ異ニシタル所ニ支店ヲ有スルモノヲ擧ケ其資本ハ一方ニ計シタルヲ以テ他方ニ
 ハ之ヲ除ケリ。

第二諸營業 (大正元年末)

種別	合計			火	汚	寄
	計	合	株			
	計	名	式	災	掃	席及興行
	△	△	△	除	葬	合資一
豐原	一四	一	八			八,100
大谷	一四	一	八			八,100
榮濱	一四	一	八			
大泊	一四	一	八			
加留多	一四	一	八			
長濱	一四	一	八			
宮内	一四	一	八			
眞岡	一四	一	八			
本斗	一四	一	八			
野田	一四	一	八			
泊居	一四	一	八			
内久春	一四	一	八			
敷香	一四	一	八			
元泊	一四	一	八			
名好	一四	一	八			
鶴城	一四	一	八			
計	一四	一	八			八,100

第三節 金融

一九二

第一項 金融機關及金融狀況

一、金融機關 本島ニ於ケル金融機關ハ、軍政施行當時、コルサコフ(大泊)ニ株式會社北海道拓殖銀行派出所ヲ設ケテ、金庫事務ヲ取扱ハシメ、傍ラ一部ノ預金ヲ取扱ハシメタルニ過キサリシカ、四十年一月ヨリ、同派出所ヲ改メテ、樺太支店トナシ、預金業務ヲ取扱フコト、ナシタリ、然レトモ同行ハ、其性質一般銀行ト異ナルヨリ、定款ニ制セラレテ、一般ノ資金需要ニ應スルコト能ハサリシヲ以テ、同年十一月同行援護ノ下ニ、泰北銀行支店ヲ大泊及真岡ニ設ケ、始メテ普通銀行ノ業務ヲ取扱フニ至レリ。

一、金融狀況 由來本島ニ於ケル民業ハ漁業ヲ以テ主ト爲スカ故ニ、之レカ豊凶ノ一般經濟界ニ及ス影響ノ大ナルハ勿論ナリ、況シテ漁獲期タル四月以降ハ、内地トノ交通モ恢復シテ、商況頓ニ活氣ヲ呈スルノ時ナルト、引續キ海產物出廻リノ期節ニ向フヲ以テ、荷爲替取組、送金爲替、代金取立等幅輻頻繁ヲ極メ、九月以降十二月ニ掛ケテハ、所謂越年準備期ニシテ、越年用物資ノ仕入ニ要スル資金ノ需要頗ル多ク、金融亦頗ル緊縮ヲ告クルニ至ル、而シテ新春ニ入り、漸次銀行ニ回收セラレ、二月ノ交ニ至リ、小康ヲ來スヲ例トス。

近年ニ至リ、特ニ注目スヘキハ、小口當座預金ノ口數及金高ノ漸ク増加シツ、アルコトナリ、蓋シ木材業ノ漸次發達スルニ伴ヒ、労働者ノ收入亦餘裕ヲ生スルニ至レルト、海產物ノ價格騰貴等ノ爲メ雜漁者ノ收入遞増スルト共ニ、從來ニ比シ着實ナル生活ヲナスニ至リシカ爲ナラン。

第二項 最近ニ於ケル經濟概況

四十一年内地經濟界ノ非常ナル沈衰ハ、亦本島ニモ多大ノ影響ヲ及シ、當時恰モ樺太廳及守備隊ノ、大泊ヨリ豊原ニ移應セシ當時ナリシ故、大泊ノ慘狀ハ殊ニ甚シク、延ヒテ本島全般ノ經濟界ニ、一大打撃ヲ與ヘタリ。

四十二年ニ入りテ後モ、尙昨年來ノ衰況容易ニ挽回セラレス、銀行ハ只管擔保ノ整理ヲ主トシテ、回收ヲ謀リ、極メテ確實ナルモノ、外ハ一般的放資ニ躊躇シタルヲ以テ、金融ノ逼迫一層甚シク、加フルニ萬一ヲ期待シタリシ漁業ハ、不幸ニシテ意外ノ不結果ニ終リタレハ、人氣更ニ振ハス、市況ノ沈衰甚シク、全ク悲境ノ絶頂ニ達シタリ。然レトモ、四十三年ニ至テハ、漁業未曾有ノ豐漁ナリシヲ以テ、一般住民ノ收入増加シ、商業從テ活氣ヲ呈シテ、漸ク年來ノ苦痛ヲ除去シ、初メテ幾分ノ餘裕ヲ見ルニ至レリ。又曩日ノ苦キ經驗ハ、大ナル教訓ヲ與ヘタリシカ如ク、爾來商人ハ無謀ノ仕入ヲ慎ミ、多少ノ遊金ヲ生スルトキハ、必ス貯蓄シテ萬一ニ備フルノ美風ヲ生シタリ。從テ一時的爲替取引ノ減少ヲ見タルモ、是レ一方商人ノ着實ナル營業ヲ爲スニ至リタル反映ナルヘク、銀行預金モ亦漸次

増加ノ有様ヲ呈スルニ至レリ。

當時政廳ハ、銳意本島ノ拓殖ニカムルノ傍ラ、常ニ這般ノ狀況ニ留意シ、銀行モ亦適當ノ方法ニヨリテ、金融ノ調整ヲ謀リ、一般住民モ年來ノ苦難ニ鑑ミ、孰レモ相互ノ信用ヲ重ンスルノ傾向ヲ生ジ勤儉、貯蓄ヲ專ラトシテ、漸次鞏固ノ地盤ヲ作ルニ至レリ。而カモ一方ニハ當年相當ノ豐漁ナリシニモ拘ラス、到ル處依然トシテ、資金ノ缺乏ヲ告ケ、不景氣ノ歎聲ヲ絶タス、動モスレハ高利貸ノ跳梁ヲ見ントセシハ、同年ノ金融史上特ニ注意スヘキ現象ナリトス。想フニ此現象タルヤ、年來ノ創痍尙ホ癒エス、恐怖心未タ去ラスシテ、資金ノ放下ヲ樂觀スヘキ、新企業ヲ見ル能ハストノ觀念ヲ懷ク者、多カリシニ基因セスンハアラス。

然レトモ夏期ニ至リ、海産物ノ移出期ニ向ヒタルト、鐵道改築工事ノ進捗シタルト、其他海産物資金ノ爲替等ニ依リテ、金融漸ク順潮ヲ呈シ、銀行ノ取引モ亦其額ヲ増加スルニ至レリ。

而シテ秋期ニ入り、鐵道工事ノ完了スルニ從ヒ、資金ハ漸次回收サレタリト雖、時恰モ越年準備ノ爲、尠カラサル資金ヲ要セシ頃ナリシヲ以テ、一方ヨリ回收セシモノハ、直ニ他方ニ需用者ノ生スル有様ニテ、前越年期ニ比シ、銀行資金ヲ利用スルモノ漸ク多キヲ加ヘ、割引金額亦從テ増加シタリ。四十四年ニ至リテハ、春來漁業好況ニシテ、商業亦順境ニ向ヒ、資金ノ運轉適當ニ調和セラレタルヲ以テ、倉庫在品ハ漸次ニ引出サレ、貸出金モ亦從テ回收サレタルヲ以テ、一時金融ハ小康ナルヤノ

傾向ヲ呈セシモ、海産物ニ對スル荷爲替貸出ト共ニ、内地海産商ノ買入資金トシテ需用多ク、暫ク金櫃中ニ死藏サレタル資金ハ、更ニ再ヒ活動ヲ始ムルニ至レリ。

而シテ本年八月以降、北海道拓殖銀行支店ハ、一般銀行業務ヲ開始スルコト、ナリシモ、本島拓殖ノ現状ハ、北海道ノ夫ノ如ク、未タ充分不動産ニ對シテ、貸付ヲ爲シ得ルノ程度ニ達シ居ラサルハ、甚タ遺憾トスル所ナレトモ、而モ農産物擔保ニ對スル貸出ノ開始及農耕地ト市街地トノ附與賣拂ニ伴フ結果トシテ、一般金融上尠カラサル利便ヲ得ルニ至レリ。

尙拓殖銀行ハ明治四十四年定款ヲ改正シ、新ニ漁業資金放出ノ途ヲ開キタレト、各漁業者ハ尙其ノ資本ヲ北海道其ノ他ヨリ仰キツ、アルモノ多シ。然レトモ一面投資ノ方法ニ改善ヲ加ヘ之レカ需用ニ應スルノ途ヲ講究スルト同時ニ各漁業者ハ自ら從來ノ關係ト習慣トヲ打破シテ本島内ニ資金ヲ需ムルヲ見ルニ至ラハ、本島ノ金融界ヲ潤澤スルコト蓋シ鮮少ナラサルナリ。

銀行預金 (其一) (大正元年)

名稱	種別	預				計
		高	上	中	下	
拓殖	當座預金	九三三				九三三
殖	特別當座預金	六三三				六三三
銀	定期預金	一三〇八	一三〇八	一〇一	一八七	三〇九六
行	別段預金			九一〇	一三〇	一〇四〇
				二八七〇	六九〇	三五六〇
						三〇九六

銀行預金 (其二) (大正元年)

名稱	種別	拂		計	戻		預	年	末	現	在	額		
		上	下		計	入							出	
拓殖銀行	太支店	計	明治四十三年		八七九七	六三九五	一三〇〇八二	一六〇七九〇	八	一四九二	一〇一七六	四二六		
			當座預金	三三〇七									四三〇五	五七一二
			特別當座預金	七九五									二四六	一〇〇一
			定期預金	三三九									一八三	五二二
北支店	計	明治四十三年		四八三九	四三三九	一四三三	一三〇〇八二	八	一四九二	一〇一七六	四二六			
		當座預金	五三〇									四七三	一〇〇三	
		特別當座預金	二九九									一四三	一五三	
		定期預金	四四一									一七九	二六二	
北支店	計	明治四十三年		一八九七	一三三〇	一三三〇	一三〇〇八二	八	一四九二	一〇一七六	四二六			
		當座預金	一九七									一〇二	一〇〇	
		特別當座預金	一〇二									一〇二	一〇二	
		定期預金	九八									一二六	二二四	
北支店	計	明治四十三年		二七二八	九三〇	一三三〇	一三〇〇八二	八	一四九二	一〇一七六	四二六			
		當座預金	二七二									一〇八	一六四	
		特別當座預金	九三〇									一〇	九四〇	
		定期預金	一〇									一〇	二〇	
北支店	計	明治四十三年		二七二八	九三〇	一三三〇	一三〇〇八二	八	一四九二	一〇一七六	四二六			
		當座預金	二七二									一〇八	一六四	
		特別當座預金	九三〇									一〇	九四〇	
		定期預金	一〇									一〇	二〇	
合	計	明治四十三年		二七二八	九三〇	一三三〇	一三〇〇八二	八	一四九二	一〇一七六	四二六			
		當座預金	二七二									一〇八	一六四	
		特別當座預金	九三〇									一〇	九四〇	
		定期預金	一〇									一〇	二〇	
合	計	明治四十三年		二七二八	九三〇	一三三〇	一三〇〇八二	八	一四九二	一〇一七六	四二六			
		當座預金	二七二									一〇八	一六四	
		特別當座預金	九三〇									一〇	九四〇	
		定期預金	一〇									一〇	二〇	

名稱	種別	拂		計	戻		預	年	末	現	在	額		
		上	下		計	入							出	
拓殖銀行	太支店	計	明治四十三年		八七九七	六三九五	一三〇〇八二	一六〇七九〇	八	一四九二	一〇一七六	四二六		
			當座預金	三三〇七									四三〇五	五七一二
			特別當座預金	七九五									二四六	一〇〇一
			定期預金	三三九									一八三	五二二
北支店	計	明治四十三年		四八三九	四三三九	一四三三	一三〇〇八二	八	一四九二	一〇一七六	四二六			
		當座預金	五三〇									四七三	一〇〇三	
		特別當座預金	二九九									一四三	一五三	
		定期預金	四四一									一七九	二六二	
北支店	計	明治四十三年		一八九七	一三三〇	一三三〇	一三〇〇八二	八	一四九二	一〇一七六	四二六			
		當座預金	一九七									一〇二	一〇〇	
		特別當座預金	一〇二									一〇二	一〇二	
		定期預金	九八									一二六	二二四	
北支店	計	明治四十三年		二七二八	九三〇	一三三〇	一三〇〇八二	八	一四九二	一〇一七六	四二六			
		當座預金	二七二									一〇八	一六四	
		特別當座預金	九三〇									一〇	九四〇	
		定期預金	一〇									一〇	二〇	
北支店	計	明治四十三年		二七二八	九三〇	一三三〇	一三〇〇八二	八	一四九二	一〇一七六	四二六			
		當座預金	二七二									一〇八	一六四	
		特別當座預金	九三〇									一〇	九四〇	
		定期預金	一〇									一〇	二〇	
合	計	明治四十三年		二七二八	九三〇	一三三〇	一三〇〇八二	八	一四九二	一〇一七六	四二六			
		當座預金	二七二									一〇八	一六四	
		特別當座預金	九三〇									一〇	九四〇	
		定期預金	一〇									一〇	二〇	
合	計	明治四十三年		二七二八	九三〇	一三三〇	一三〇〇八二	八	一四九二	一〇一七六	四二六			
		當座預金	二七二									一〇八	一六四	
		特別當座預金	九三〇									一〇	九四〇	
		定期預金	一〇									一〇	二〇	

銀行貸付金 (大正元年)

名稱	種別	越		出		返		計	年末現在
		高	上	計	計	上	下		
拓殖銀行	當座預金								
銀行	當座預金								
樺太支店	計								
泰北支店	計								
銀行	當座預金								
大泊支店	計								
泰北支店	當座預金								
銀行	當座預金								
合	計								
明治四十三年	計								
拓殖銀行	當座預金	2,200	0	0	0	0	0	2,200	0
銀行	當座預金	0	0	0	0	0	0	0	0
樺太支店	計	2,200	0	0	0	0	0	2,200	0
泰北支店	計	0	0	0	0	0	0	0	0
銀行	當座預金	0	0	0	0	0	0	0	0
大泊支店	計	0	0	0	0	0	0	0	0
泰北支店	當座預金	0	0	0	0	0	0	0	0
銀行	當座預金	0	0	0	0	0	0	0	0
合	計	2,200	0	0	0	0	0	2,200	0
明治四十三年	計	2,200	0	0	0	0	0	2,200	0

銀行爲替 (大正元年)

名稱	種別	仕		向		計	被		計	差
		上	下	上	下		上	下		
拓殖銀行	口數									
銀行	口數									
泰北銀行	口數									
大泊支店	口數									
泰北銀行	口數									
銀行	口數									
合	口數									
明治四十三年	口數									
拓殖銀行	口數	36,177	8,499	44,676	1,333	46,009	5,099	40,910	7,099	38,811
銀行	口數	9,333	5,999	15,332	3,333	18,665	3,333	15,332	3,333	12,000
泰北銀行	口數	26,777	4,777	31,554	1,111	32,665	1,111	31,554	1,111	30,443
大泊支店	口數	1,111	1,111	2,222	1,111	3,333	1,111	2,222	1,111	1,111
泰北銀行	口數	25,666	3,666	29,332	2,222	31,554	2,222	29,332	2,222	27,110
銀行	口數	8,222	4,666	12,888	2,222	15,110	2,222	12,888	2,222	10,666
合	口數	71,000	22,666	93,666	8,666	102,332	13,333	89,000	29,333	60,000
明治四十三年	口數	71,000	22,666	93,666	8,666	102,332	13,333	89,000	29,333	60,000

荷爲替 (大正元年)

1100

名稱	種別	仕向		計高	被仕		計高	差額
		上半期	下半期		上半期	下半期		
拓殖銀行樺太支店	口數	14	14	14	14	14	14	0
明治四十四年	金額							
泰北銀行大泊支店	口數	104,626	246,081	350,707	84,533	355,133	319,611	30,096
明治四十四年	金額	4,845,444	4,951,691	9,797,135	1,766,619	10,063,754	2,798,135	2,065,619
明治四十三三年	口數	110	53	163	26	137	189	26
明治四十三三年	金額	11	53	64	26	80	106	42
泰北銀行真岡支店	口數	1,945	2,969	4,914	556	2,938	1,758	3,160
明治四十三三年	金額	16,589	21,351	37,940	8,121	30,199	28,773	9,167
明治四十一一年	口數	1,673	3,980	5,653	1,741	1,683	3,424	2,229
明治四十一一年	金額	16,733	39,800	56,533	17,411	16,833	34,244	22,299
計	口數	28,373	45,780	74,153	18,924	35,827	54,751	19,376
明治四十三三年	金額	179,004	1,559,011	1,738,015	257,736	1,300,279	1,558,015	179,236
明治四十一一年	金額	28,843	75,306	104,149	46,084	39,983	86,067	18,082

手形割引 (大正元年)

名稱	種別	當		所		他		計
		上半期	下半期	計	計	上半期	下半期	
拓殖銀行	約束手形	1,110,515	1,072,586	2,183,101	1,183,101	11,000	11,000	1,194,101
樺太支店	爲替手形	1,110,515	1,072,586	2,183,101	1,183,101	11,000	11,000	1,194,101
計	約束手形	1,110,515	1,072,586	2,183,101	1,183,101	11,000	11,000	1,194,101
明治四十四年	金額	1,110,515	1,072,586	2,183,101	1,183,101	11,000	11,000	1,194,101
泰北銀行	約束手形	1,007,734	842,248	1,850,000	1,930,000	10,000	10,000	1,860,000
大泊支店	爲替手形	1,007,734	842,248	1,850,000	1,930,000	10,000	10,000	1,860,000
計	約束手形	1,007,734	842,248	1,850,000	1,930,000	10,000	10,000	1,860,000
明治四十四年	金額	1,007,734	842,248	1,850,000	1,930,000	10,000	10,000	1,860,000
明治四十三三年	口數	26,525	25,596	52,121	51,721	7,300	7,300	59,421
明治四十三三年	金額	265,250	255,960	521,210	517,210	73,000	73,000	594,210
明治四十一一年	口數	7,656	8,400	16,056	15,900	1,000	1,000	17,056
明治四十一一年	金額	76,560	84,000	160,560	159,000	10,000	10,000	170,560
計	約束手形	7,656	8,400	16,056	15,900	1,000	1,000	17,056
泰北銀行	約束手形	285,630	261,856	547,486	532,900	11,000	11,000	548,486
真岡支店	爲替手形	285,630	261,856	547,486	532,900	11,000	11,000	548,486
計	約束手形	285,630	261,856	547,486	532,900	11,000	11,000	548,486
明治四十三三年	金額	285,630	261,856	547,486	532,900	11,000	11,000	548,486

第八章 商工業

1101

名稱	種別	當		所		他		所	
		上半期	下半期	計	上半期	下半期	計		
泰北銀行 大泊支店	爲替手形 約束手形 諸證書	金枚額數	六六九	二六六	二八三	二二二	四四一	一五九	五九〇
		計	六六九	二六六	二八三	二二二	四四一	一五九	五九〇
明治四十三年	爲替手形	金枚額數	一八九二	八二七	一〇〇九	一〇一五	二〇二四	五〇〇	三三〇
		計	一八九二	八二七	一〇〇九	一〇一五	二〇二四	五〇〇	三三〇
明治四十一年	爲替手形	金枚額數	三九四	二四八	二八七	二二二	五〇九	一〇〇	二七〇
		計	三九四	二四八	二八七	二二二	五〇九	一〇〇	二七〇
真岡支店	諸證書	金枚額數	二六	一〇	一八	一〇	二八	一〇	一〇
		計	二六	一〇	一八	一〇	二八	一〇	一〇
泰北銀行	約束手形	金枚額數	二六	一〇	一八	一〇	二八	一〇	一〇
		計	二六	一〇	一八	一〇	二八	一〇	一〇
明治四十三年	爲替手形	金枚額數	三三〇	一〇六	四三六	一三三	五六九	一〇	一〇
		計	三三〇	一〇六	四三六	一三三	五六九	一〇	一〇
明治四十一年	爲替手形	金枚額數	二六	一〇	一八	一〇	二八	一〇	一〇
		計	二六	一〇	一八	一〇	二八	一〇	一〇
合	計	金枚額數	二二六	一〇六	三三二	一三三	四六五	一〇	一〇
		計	二二六	一〇六	三三二	一三三	四六五	一〇	一〇
明治四十三年	爲替手形	金枚額數	三三〇	一〇六	四三六	一三三	五六九	一〇	一〇
		計	三三〇	一〇六	四三六	一三三	五六九	一〇	一〇
明治四十一年	爲替手形	金枚額數	二六	一〇	一八	一〇	二八	一〇	一〇
		計	二六	一〇	一八	一〇	二八	一〇	一〇
明治四十三年	爲替手形	金枚額數	三三〇	一〇六	四三六	一三三	五六九	一〇	一〇
		計	三三〇	一〇六	四三六	一三三	五六九	一〇	一〇
明治四十一年	爲替手形	金枚額數	二六	一〇	一八	一〇	二八	一〇	一〇
		計	二六	一〇	一八	一〇	二八	一〇	一〇

銀行別取立金 (大正元年)

名稱	種別	當		所		他		所	
		上半期	下半期	計	上半期	下半期	計		
拓殖銀行 樺太支店	爲替手形 約束手形 諸證書	金枚額數	一〇三	五二	一五五	一〇	二〇	一〇	一〇
		計	一〇三	五二	一五五	一〇	二〇	一〇	一〇
明治四十三年	爲替手形	金枚額數	一〇三	五二	一五五	一〇	二〇	一〇	一〇
		計	一〇三	五二	一五五	一〇	二〇	一〇	一〇
明治四十一年	爲替手形	金枚額數	一〇三	五二	一五五	一〇	二〇	一〇	一〇
		計	一〇三	五二	一五五	一〇	二〇	一〇	一〇
合	計	金枚額數	一〇三	五二	一五五	一〇	二〇	一〇	一〇
		計	一〇三	五二	一五五	一〇	二〇	一〇	一〇
明治四十三年	爲替手形	金枚額數	一〇三	五二	一五五	一〇	二〇	一〇	一〇
		計	一〇三	五二	一五五	一〇	二〇	一〇	一〇
明治四十一年	爲替手形	金枚額數	一〇三	五二	一五五	一〇	二〇	一〇	一〇
		計	一〇三	五二	一五五	一〇	二〇	一〇	一〇

第四節 物資ノ移出入

拓殖事業ノ進捗ト、人口ノ増加トニ比例シテ、年々移出入物資ノ遞増スルハ、素ヨリ其所ナランノミ。大正元年度ニ於ケル大泊港ノ移入貨物ハ、價格二百十二萬五千三百二十圓、移出貨物ハ價格百五十三萬六千一百九十五圓ニ上リ、眞岡港ニ在リテハ、移入貨物價格百十三萬八千二百八圓、移出貨物價格七十二萬八千三百六十七圓、大泊港ノ如キハ之ヲ四十三年度ニ比シ、移入ハ三割強、移出ハ八割強ノ著シキ進歩ノ迹ヲ示セリ。而シテ是等移入貨物ノ主要ナルモノハ、雜貨、白米、食鹽、煙草、繩、燕麥、石油、味噌、清酒等、即チ移住者ノ日常生活ノ必需品ニ屬シ、移出貨物ハ雜貨及本島海產物、即チ鯨油、蟹糞、榨粕、棒鱈、雜魚、鮑魚、罐詰、昆布等ニシテ、是レ本島主要ノ產物ナリ、而シテ是等移出及移入ノ最モ盛ナル期節ハ、四月解氷後ヨリ十二月マテノ間ニシテ、四月五月ハ恰モ海產物出荷ノ期節ナルカ故ニ、移出噸數最モ多ク、九月十月ニ至テハ既ニ越年準備期ニ入ルヲ以テ、移入噸數最モ多シ。

此ニ注意スヘキハ、眞岡港ニ於テ加工サレタル罐詰ノ移出價格、三十七萬五千餘圓ニシテ四十三年末ノ移出額ノ約七倍ニ近キ數ヲ示セルコト、及ヒ本島ノ林産界カ、從來調査時代ニ屬セシ結果、頗ル豊富ナル蓄積ヲ有スルニ拘ラス、未タ移出ヲ試ムルノ期ニ到達セザリシニ、今ヤ其ノ價格二十五萬餘圓

ノ移出及輸出ヲ見ルニ至リタルハ、以テ本島開發進捗ノ一端ヲ窺知スルニ足ルコト是レナリ。
大正元年末調査ニ係カル、大泊及眞岡港移出入貨物ノ數量及價格ヲ表示スレハ左ノ如シ。

大泊及眞岡移出入貨物 (大正元年末)

品目	移入		移出	
	數量 單位數	價格	數量 單位數	價格
白米	三,一九〇	三三,三七七	二,三〇	二七,五〇
糯米	一〇〇	五〇〇	—	—
雜穀	一,二七九	一,九八八	—	—
燕麥	二,八〇〇	二,八〇〇	—	—
豆	二,二〇〇	六,八〇〇	—	—
小豆	一,〇〇〇	七,七〇〇	—	—
大豆	一,〇〇〇	一,九〇〇	—	—
麥	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
蕎麥	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
蕎麥粉	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
蕎麥粉袋	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
蕎麥粉	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
白粉	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
麵粉	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
素麵	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
野菜	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
果實	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
鹽	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
糖	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
米	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
米	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
米	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—

煉瓦	空箱	空罐	空樽	空板	鐵板	金物	草鞋	網目	繩索	白綵	車油	石油	セメント	石炭	コークス	釘類	笹目	笹類	錫類	鹽類	棒類	厨子
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
四五〇	一一三	一三五	一七九	二八四	一一〇	二一〇〇	六一	一三	一七五	二七六	一八	九二九〇	二九八	六〇九六	六〇	一一一						
三五〇	二九四	一一九〇	二二〇	二七三	一九一八	二七〇	四八五	二	一四一	二二	九〇	三九一〇	一七五	五四八三	六〇	一四九三						
二五〇	七五〇	八九九	三五三	一一三	一一三	二二六			二八		二七三	五八五				一一〇	二一〇	五七	二〇	一一〇	二〇	
二七	二八九	九〇七	三三二	一一三	二八	二八			二八		二八					一一〇	一一〇	二七	二一	二七	二〇	
石	金	釘	綿	石	木	石	藥	石	衣	身	蓆	開	練	貝	胴	海	鱈	棒	鹽	生	鹽	鹽
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

身筋	雜昆	干魚	鹽魚	鰱魚	鰳魚	生魚	鷄卵	茶糖	砂糖	鹽糖	菓糖	サイター	酢酒	麥酒	清酒	燒酎	煙草	漬物	醬油	味噌	味噌	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一二	六三	一八三	三三	一八	二二	八九	八〇九	三三	七四七	二一六	三八五	九七	二二	二二	三三	四九	一〇七	五二	五二	五二	五二	五二
一二	六三	一八三	三三	一八	二二	八九	八〇九	三三	七四七	二一六	三八五	九七	二二	二二	三三	四九	一〇七	五二	五二	五二	五二	五二
一二	六三	一八三	三三	一八	二二	八九	八〇九	三三	七四七	二一六	三八五	九七	二二	二二	三三	四九	一〇七	五二	五二	五二	五二	五二

蝦罐詰ハ亞庭灣遠淵湖及池邊濱近海ニ産スルヲ原料トシテ製造セルモ、原料豊富ナラサル爲、産額一定セス。

鱒、鮭罐詰ハ蟹罐詰所ニ於テ、併セテ製造セラル、モノ尠カラス。東海岸ニ在リテハ、單ニ此ノ罐詰製造ノミニ從事スルモノアリ。

雲丹味付罐詰及海苔佃煮罐詰ハ、其ノ原料豊富ナルヲ以テ、蟹罐詰製造ノ餘暇ヲ利用シテ製造スル者アレトモ未タ商品トシテ發賣スルニ至ラス。

現在ノ工場數ヲ地方別ニシテ示セハ、

東海岸	蟹及蝦	鱒及鮭
亞庭灣	三	七
西海岸	六七	△三五

△印ハ蟹罐詰工場ヲ兼スルモノナリ。

罐詰産額ヲ年別ニシテ示セハ左ノ如シ。

四十二年	一封度	一六二、六〇〇	蟹	鱒及鮭
四十二年	一封度	?		

四十三年	一封度	九五〇、七八二	一封度	四三八、九一一
四十四年	一、二六二、八九四	半封度	一、二四、六九九	同
四十五年	一、二四六、五七七	半封度	一、〇九〇、六二三	同
				五一〇、九四五

第六節 其ノ他ノ工業

一、酒類醬油醸造業

(イ) 酒類醸造業

占領當時本島ニ於ケル酒類ノ供給ハ、總テ之ヲ北海道其ノ他ノ内地ニ仰キシカ故ニ、運送ニ多大ノ費用ヲ要シ、價格從テ廉ナラス、清酒一升ノ代價時ニ一圓以上ニ上リシコトアリシカ、三十九年豊原、大泊及真岡ノ三市街ニテ、酒類ヲ醸造スルモノ十數戸アルニ至リ、之カ造石セルモノト、移入酒ノ大部分トニテ、一般需用ニ應シタルモ、人口ノ増加ト共ニ、要衝ノ地ニ其ノ數増加シタリシモ、規模小ニシテ、酒質モ概シテ劣等ニシテ、嗜好ヲ滿タスニ充分ナラサリシモ、世ノ要求ハ、漸次醸造業者ノ覺醒ヲ促シ、資本ノ厚薄ト、規模ノ大小トノ間ニ、自ラ淘汰ノ行ハル、アリテ、資力豊富基礎鞏固ナルモノハ、土地ノ繁榮ニ伴フ消費力ノ増加ト相俟テ、倉庫ノ構造仕込方法及容器等ニ改良ヲ加ヘ、其ノ品質内地酒ニ近邇スルモノヲ醸造シ、業務ヲ擴張シツ、アルノ狀勢ヲ示スト雖、尙

清酒八百八十石餘、麥酒六百石餘ノ移入ヲ仰キツ、アリ。今造石高ノ變遷ヲ擧クレハ次ノ如シ。

其ノ一 明治四十年以降造石高概況

支應別	大正元年		四十四年		四十三年		四十二年		四十一年		四十年	
	場數	造石高	場數	造石高	場數	造石高	場數	造石高	場數	造石高	場數	造石高
豐原	五	二,一〇三	八	五,七六	五	二,九六	六	三,〇八	五	三,一	四	二,五〇
大泊	一四	四,〇一〇	一六	二,〇六六	一五	一,六一九	一四	一,八九五	一三	一,三七六	一〇	一,一〇〇
眞岡	一七	三,一八四	二二	一,八五〇	二〇	一,九四〇	一六	一,二六二	二九	一,三三三	一四	一,一〇〇
久春内	七	七,六九	二	五,四七	七	五,一三	五	一,八〇	一	一	一	一
敷香	三	一一〇	三	一,八四	一	七四	一	五〇	一	一	一	一
計	四六	一〇,一六六	五九	五,三三五	四八	四,四四三	四二	三,六九五	四七	二,九一〇	二八	二,五七〇

其ノ二 大正元年中造石高概況

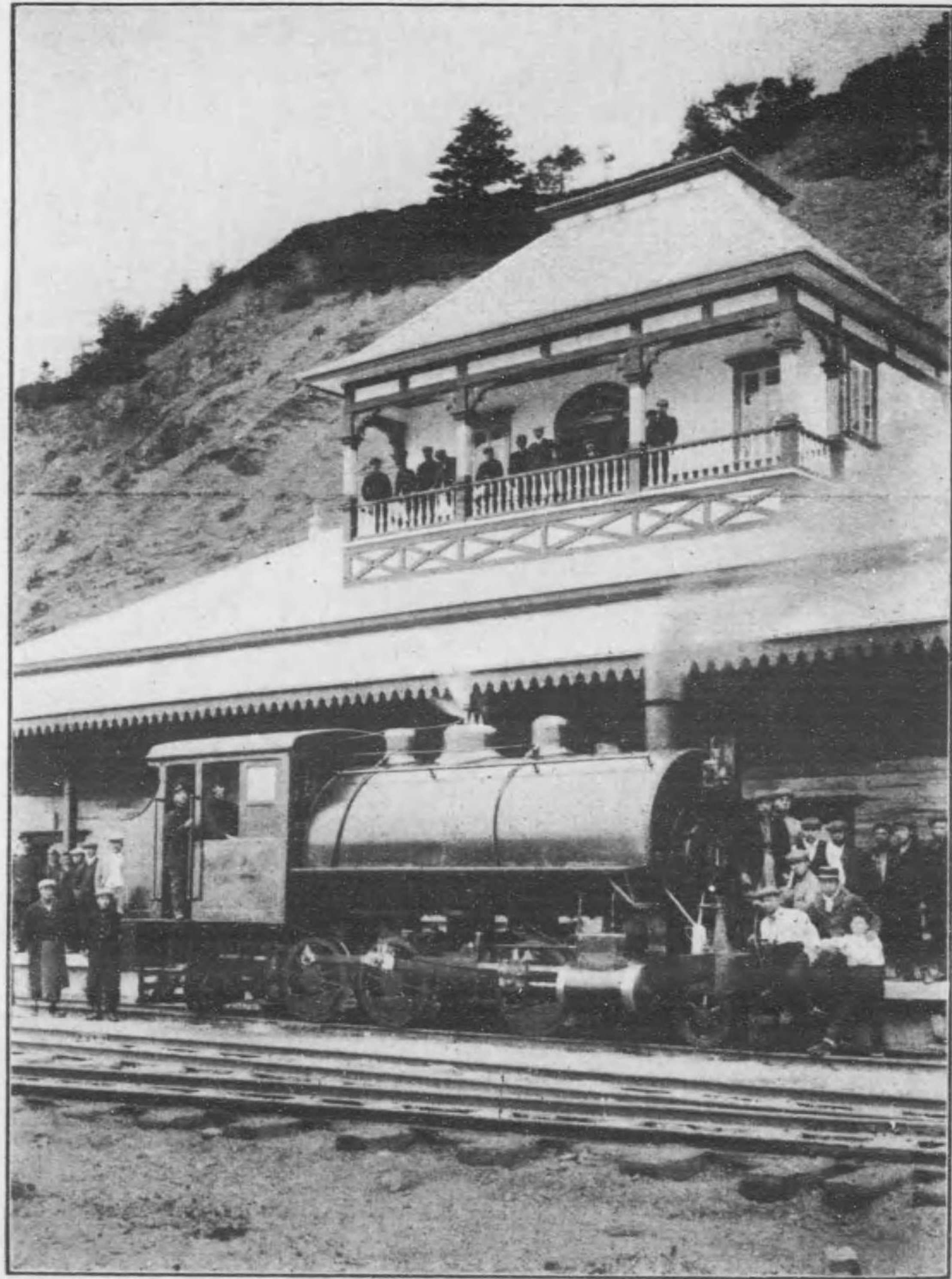
支應別	戸數	資本金	清酒		濁酒		白酒		焼酎		計	
			石數	價格	石數	價格	石數	價格	石數	價格		
豐原	五	二,五四〇〇	二,〇六〇	五,一五〇〇	一〇	二〇〇	一	一〇〇	三三	一,九八〇	二,〇三三	五,一六〇
大泊	一四	五,二六〇〇	三,九九〇	九,九七五	一	一〇〇	二	一〇〇	一八	一,〇八〇	四,〇一〇	一〇〇,九三〇
眞岡	一七	五,五六〇〇	三,一六〇	七,九,〇〇〇	二〇	四〇〇	一	五〇	三	一八〇	三,一八四	七九,六三〇
久春内	七	九,六六〇	七八五	一,九,六五	一	一	一	一	四	二四〇	七,六九	一,九八六五
敷香	三	二,五〇〇	一〇〇	二,七五〇	一	一	一	一	一	一	一一〇	二,七五〇
計	六二	一四,五八四〇	一〇,一〇五	二五,一六五	三〇	六〇〇	三	一五〇	五八	三,四八〇	一〇,一六六	一五六,八五

(ロ) 醬油醸造業

本島醬油醸造業ハ、氣候ノ關係上遅々トシテ振ハス。大正元年ニハ、全島ヲ通シテ三戸、其ノ造石高二百六十石餘ナリトス。

二、煉瓦製造業

本業ハ本島ノ建築上、最モ緊要ナルヲ以テ、特ニ其ノ創設費ニ對シ若干ノ補助ヲ與ヘタリ。大正元年末ニ於ケル工場三ヶ所資本金一萬四千圓ニシテ一年間ニ於ケル製造高六十二萬本其ノ價格一萬一千四百圓ナリ。



榮町停車場



道鐵殖拓ノ近附谷大



澤ノ瀧道街間岡真原豊





破 踏 道 山 ノ 隊 ー キ ス



送 輸 橇 犬



氷上陸ノ状況(亞庭灣内)



豐原郵便局

第九章 交通

第一節 總說

露領時代ニ於ケル交通機關ハ、其ノ設備甚タ不完全ニシテ殆ト見ルニ足ルモノナシ。領有以來銳意之カ設備計畫ヲ爲シ、今ヤ漸次其ノ歩ヲ進メ本島拓殖ノ效ヲ擧ケントス。

交通機關ノ設備ハ之ヲ分チテ陸運、海運及通信ノ三節トシ逐次之ヲ概説スヘシ。

第二節 陸運

第一項 鐵道

本島ノ鐵道ハ元軍需品輸送ノ目的ニ據リ計畫セラレタルモノニシテ、三十九年九月大泊、豊原間二十六哩餘ノ敷設ニ着手シ、同年十一月竣功ス。這間僅々六十日ニ過キスシテ、此ノ大工事ノ竣成ヲ觀ル、鐵道大隊ノ功ヤ寔ニ大ナリト謂フヘシ。而シテ本鐵道ハ輕便式ニシテ、十八封度軌條ヲ用ヒ、其ノ「ゲージ」六十珊（凡ソ我カ一尺九寸八分）、機關車ハ獨逸双合式ニシテ其ノ重量十五噸、貨車ハ無蓋ノミニシテ有蓋ノモノナク、其ノ積載量モ僅ニ五噸ニ過キス。而シテ大泊、三ノ澤間ノ海岸ハ、高サ百尺以上ノ頁岩磐海岸ニ突出セル箇所アリ、常ニ大小ノ石塊ヲ落下シ、危險甚シク、波浪亦屢々道路

ヲ洗フノ虞アルヲ以テ、此ノ區間ハ線路ヲ山間ニ擇ヘリ。從テ線路ノ勾配モ、往々急ニ失スル箇所アリ、牽引力爲ニ減殺セラレ、通常ハ貨車十二輛牽引シ得ルモ、這間ハ僅ニ五輛ヨリ牽引シ得サリシ次第ニシテ、軍政中ハ軍需品輸送ノ餘力ヲ以テ、一般乘客及貨物ノ輸送ニ從事シタリシモ、四十年四月軍政廢止ト共ニ、樺太廳ノ所管ニ移ルヤ、同年八月一日ヨリ一般營業ヲ開始シ、大泊、豊原間一日二回ノ定期列車ヲ運轉セシメ、翌四十一年四月大泊、榮町間一哩餘ノ海岸線ヲ延長シ、更ニ四十二年大泊三ノ澤間ノ山道迂回線ヲ海岸線ニ改ムル等、敷設改良相踵キ、專ラ輸送力ノ増加ヲ務メタリ。殊ニ逐年本島ノ開發ニ伴ヒ、貨物ノ輻輳旅客ノ往來頻繁トナルニ及ヒ、遂ニ四十二年六月榮町、豊原間(二十四哩七)ヲ三呎六吋ノ普通線ノ改築ニ着手シ、同年十一月竣功、直チニ運轉ヲ開始ス。而シテ四十四年六月豊原、榮濱間(三十二哩九)ノ敷設ニ着手シ、同年十一月竣功シ、同十二月二日ヨリ其ノ運轉ヲ開始シ、茲ニ本島拓殖鐵道第一期線ナル榮町榮濱間、延長五十七哩五十八鎖ノ完成ヲ觀ルニ至レリ。

蓋シ本線貫通ノ榮町榮濱間ハ、物貨集散ノ咽喉地タル大泊埠頭ニ起リ、鈴谷内淵ノ兩原野ヲ縱斷シテ榮濱ニ至リ、亞庭灣ト東海岸トヲ連絡シ、其ノ沿線廣袤十萬餘町歩ノ沃野ヲ有シ、亦東西ニ連互スル山脈ハ鬱蒼タル森林ニ富ム。而シテ又西方鈴谷内淵ノ兩大川ノ上流ハ所謂中央炭田ニシテ、之カ開通ヲ見タルハ、實ニ本島利源ノ開發ニ裨益スルコト至大ナルヘキナリ。

本線ハ最急勾配八十分一ニシテ、列車ノ運轉ハ榮町豊原間定期列車一日ニ二往復、其ノ速力ハ平均二十哩、豊原、榮濱間ハ定期列車一日一往復、其ノ速力平均十八哩ナリ。此ノ外數回ノ臨時列車運轉ス、又大正二年十一月三日ヨリ、榮町ヲ起點トシテ榮濱間平均二十五哩ノ速力ヲ以テ汽働車一往復ノ運轉ヲ開始セシニ其ノ成績良好ナリ。

次ニ支線トシテハ、本年四月、中央炭田ノ一部タル川上炭田掘鑿ノ決定ヲ觀ルヤ、之カ運炭ノ目的ヲ以テ、小沼ヨリ榮町榮濱間幹線ト分岐シ、殖民地川上部落ヲ貫通スルモノニシテ、其ノ延長八哩ヲ有シ、炭山ヨリ來ル專用輕便鐵道ト連絡ス。

今大正二年十二月一日現在ニ於ケル車輛數及運輸成績ヲ示セハ左ノ如シ。

機 關 車			貨 車		
種 類	輛 數	重 量	種 類	輛 數	積 載 量
		總重量			一車平均
英型四輪連結タンク	二	六七・〇	有蓋貨車	八	五六・〇
米型六輪連結タンク	三	七三・三	材木車	二五	一七五・〇
同上	一	二九・〇	無蓋貨車	三五	二四五・〇
計	六	一六八・三	貨物緩急車	二	一〇・〇
			計	七〇	四八六・〇

汽働車

種類	輛數	定座員	一車平均席	手荷物及郵便物積載量
汽働車	二	並特等 二〇三人	並特等 六六人	

客車

種類	輛數	定座員		一車平均席		手荷物及郵便物積載量	
		定座員	一車平均席	重量	容積	重量	容積
特等客車	二	四八人	二四人				
特並等客車	二	四八人	二四人				
同	一	四八人	二四人				
緩急機付並等客車	八	二八八人	四六六人				
手荷物緩急車	三	四八人	二四人				
計	三三	七〇八人	四〇八人				

(右車輛表ニハ輕便車輛ヲ掲上セス)

運輸成績月別表 (大正元年度)

月別	別	列車	運轉回數	荷物噸數	乘車人員	收		入
						乘客收入	荷物收入	
四	月	五,七九一	二七九	六,一三三	七,六七七	二,七〇七	四,五七九	七,二二七
五	月	五,六九八	二四一	五,一六四	一〇,五五四	四,四七五	五,一六八	九,五八四
六	月	五,七六八	二二九	五,五四〇	九,八一	四,〇六八	五,一三〇	九,一八七
七	月	五,七八〇	二〇五	四,八四三	九,四二九	三,九七一	四,七〇三	八,六〇〇
八	月	六,〇二六	三三四	六,三三四	九,三六〇	三,七九六	五,九三三	九,七三三
九	月	六,〇八二	二七二	七,五七八	八,五五四	三,五〇二	五,四八九	八,九三二
十	月	五,七三三	三三九	五,四七九	八,六五五	三,六五一	四,八九五	八,五四七
十一	月	五,七八五	一九八	四,六五二	七,八六六	三,〇三九	五,〇〇一	八,〇四一
十二	月	五,四九四	二二五	三,七四三	六,八五五	二,三九五	四,一七二	六,五六七
一	月	五,四九八	二二二	三,五八六	五,三九九	一,六四六	二,五四〇	四,二〇六
二	月	五,〇六一	二〇四	二,七〇一	四,七七四	一,五四三	一九六	三,四六八
三	月	五,九六六	二六一	五,九〇五	六,六三七	二,一七九	四,〇七五	六,一八七
計		六八,六一一	二,八九九	六,四三六	九五,五七一	三六,九二二	五,三三七	九〇,二九〇
四十四年度		四八,三二七	二,〇七〇	四,四三六	七五,九三三	二六,七八七	四,〇〇二	六六,八四八
四十三年度		五四,四六三	三,五六四	三,八二三	六六,九〇三	三三,八三九	三,〇四九	五四,三三三
四十二年度		四二,〇〇〇	三,一七一	二,〇六八	三七,五七一	二〇,〇〇〇	一,七九九	三七,九六二
四十一年度		四五,八六〇	二,二三四	一,一七三	四五,五五七	三〇,四八〇	二,七五三	五八,〇三三

四十年	四三、二八〇	二五、一〇〇	一八、〇八五〇	四一、六五五	二六、二四、四〇〇	二五、〇四、四三〇	五、二八、二八三〇
六ヶ年	五〇、四一〇五	二七、四一	三〇、三九八	六〇、五五五	二七、三七、五〇九	三二、四三、二二九	五九、七九、二二八
平均							
收入							

第二項 道路及驛遞

一、道路 本島ニ於ケル主要道路ハ、之ヲ大別シテ露領時代ノ經營ニ屬スルモノト、邦領以來開鑿シタルモノトニ別ツコトヲ得レトモ、前者ハ其ノ後改修ヲ加ヘタルモノヲ除クノ外、概ネ荒廢ニ歸シ、橋梁暗渠ノ如キハ殆ント其ノ形骸ヲ止メス。

今左ニ是等主要道路ノ各區間ニ於ケル狀況ヲ概述スヘシ。

【大泊、榮濱間】 本線中大泊貝塚間ハ海岸線ニシテ、時々波浪ノ爲ニ殆ント痕跡ヲモ止メサルニ至ルコトアリシヲ以テ、民政署時代ニ於テハ、此ノ改築ヲ急務トシ、三十八年十一月先ツ此ノ區間ヲ修繕シ、次テ翌三十九年融雪ノ期ヲ俟テ、直ニ大泊豐原間及豐原榮濱間ノ道路橋梁ノ改修ニ着手シ、又新ニ大泊貝塚間ニ山道ヲ開鑿シテ、海岸線ヲ廢シ、今ヤ大泊、榮濱間約二十二里ノ道路ハ全ク舊來ノ面目ヲ一新シ、稍安全ニ車馬ノ通行ヲ見ルニ至レリ。

【榮濱、敷香間】 本線中榮濱東白浦間ハ、數度ノ修繕ヲ加ヘ、且四十三年度ニ於テ、橋梁三十數箇所、本年度ニ於テ五十數箇所ヲ修繕シタルヲ以テ、現時車馬ノ通行ニ適スト雖、東白浦以北ハ露領當

時ノ經營ニナリタル輪荒馬群潭間ノ舊道ヲ除クノ外、別ニ道路ノ築造ナク、或ハ海濱砂礫ノ上ヲ歩ミ、或ハ密林伐開ノ間ヲ交通スルノミニシテ、人馬ノ通行困難ナルハ勿論、屢々其ノ梗塞ヲ見ルニ至ルコトアルヲ以テ本線開鑿ハ、焦眉ノ急ニ逼リ着々開鑿又ハ改修スルノ運ニ至ルヘシ。「アイヌ」人ノ慣用スル犬橇ハ、冬季此ノ地方ニ特有ナル交通機關ニ屬シ、通常ハ九頭ヨリ、多キハ十五六頭ノ犬ヲ用ヒ、最モ雪中旅行ニ適ス。橇ノ構造ハ普通馬橇ト異ナリ、幅僅ニ一尺乃至二尺、長サ十二尺乃至十八尺ニシテ、其ノ形狀小舟ニ類シ、重量ヲ減スルヲ主眼トシテ、巧ニ構造シタルモノナリ。故ニ四十貫ヲ限度トスル輕量ノ荷物ヲ積載シ得ト雖、主トシテ乗用ニ供スルモノニシテ、一日ノ行程二十里ヲ超ユルコト容易ナリ。又内路以北國境ニ至ル間ハ、「ギリヤーク」人等、馴鹿ヲ使役シテ橇ヲ曳カシメ、旅行ニ便ヲ與フルコト極メテ大ナリ。

【豐原、眞岡間】 本道路ハ即チ本島内部ト西海岸トノ連絡幹線ニシテ、豐原ヨリ軍川ニ至ル約二里ノ間ハ、露領時代既ニ道路ヲ開鑿シ、車馬ノ通行ヲ得タルモ、軍川以西眞岡ニ至ル約十六里ノ間ハ、山脈連互シテ南北ニ走リ、留多加川ノ上流其ノ間ヲ流レ、山嶺溪谷相迫リ、樹木鬱蒼トシテ滿山ヲ蔽ヒ、地勢頗ル峻峻タリ、三十八年十月中旬、民政署時代ニ於テ之カ實行ニ着手シ、同年十二月上旬ニ至ル五十餘日ヲ以テ、軍川、眞岡間道路假開鑿(伐開幅四間)ノ作業ヲ竣功シ、大小百餘ノ假橋梁ヲ架設シ、茲ニ漸ク其ノ連絡ヲ見タリ、而シテ三里乃至五里毎ニ驛遞ヲ設置スルト同時ニ、又豐原、眞岡

間ニ電線ヲ架設シ、不完全ナカラ、稍交通ト通信トノ機關ヲ備フルニ至レリ。越テ四十年ニ及ヒテ始メテ車馬道ノ開鑿ニ着手シ、軍川ヨリ瀧ノ澤マテノ間、延長八千九百七十二間(幅二間半)ヲ竣了シ、尙四十二年ニ於テモ引續キ其ノ殘部ヲ開鑿シ、四十二年九月ニ至リテ全部竣功シ、始メテ車馬ノ通行ノ便ヲ得タリ。同時ニ驛遞ヲモ二里乃至三里毎ニ増設シ、尙四十四年以降毎年夏期中修路工夫ヲ置キ、道路維持ノ方法ヲ講シ來レリ、而シテ數年前ヨリ樺太廳補助ノ下ニ、定期馬車ノ營業ヲ開始セシメタレト、本年夏期自働車ヲ以テ馬車ニ代ヘ運行セシムルコト、ナリ、兩地間僅ニ七時間ヲ以テ往復シ得ルニ至レリ。

【眞縫、久春内間】 該路北緯四十八度附近ニ當リ、本島中最モ狹少ナル部分ニ在リ此ノ道路ハ東西兩海岸ヲ連絡スルモノニシテ、其ノ延長約八里、交通上主要ノ線路ナレトモ、露領時代ノ開鑿ニ係リ、其ノ工事極メテ粗惡ナルノミナラス、南樺太山脈其ノ中央ヲ貫通スルヲ以テ、勾配ノ急ナル箇所多ク、目下纔ニ人馬ヲ通スレトモ、交通頗ル困難ニシテ、到底車馬ヲ使用スルコト能ハス。已ニ改築ノ必要ヲ認メ、年々數千圓ヲ投シテ漸次改良ノ歩ヲ進メツ、アレハ近キ將來ニ於テハ容易ニ車馬ヲ通セシムルコトヲ得ルニ至ラン。

【大泊、落帆間】 亞庭灣沿岸ト東海岸トノ連絡線ニシテ大泊ヲ起點トシ古牧ヲ經テ君内川ヲ縫ヒ、富内湖畔ニ沿ヒテ東海岸落帆ニ達ス、其ノ延長約十五里ニ迫ヘルモ露領時代ノ築造ニ係リ、其ノ後荒廢

シテ殆ント見ルヘキモノナカリシヲ以テ、四十一年之カ實測ヲナシ、四十二年七月起工、同年十月大泊君内間四里十五丁ノ開鑿ヲ竣功シ、昨年幾分ノ改修ヲ加ヘ、今ヤ古牧富内湖間ハ完全ナル道路トナレリ。

【豊原、留多加間】 豊原ヲ起點トシ、追分、並川、中澤、小里及平野ヲ經テ、留多加ニ達スルモノニシテ、是亦露領時代ノ開鑿ニ係リ、延長約十一里ニ達セリ。留多加ハ留多加川ノ河口ニ近ク、現今大泊支廳出張所ノ所在地ニシテ、其ノ附近ハ概シテ農耕ニ適シ、移民ノ數モ亦少カラス。尙將來益々増加ノ見込アリ。加之其ノ附近海岸一帯ニハ漁場多シ。サレト現今留多加ニ達スル道路ハ、唯一ノ本線路アルノミナルモ、其ノ築造モ不完全ナルカ故ニ、冬季積雪ノ際ニハ馬橋ヲ通スルコトヲ得ルモ、其ノ他ノ時季ニ於テハ人馬ノ通行頗ル困難ナリ。故ニ四十一年度ニ於テハ、留多加部落ヨリ河口ニ到ル約一里間ヲ改修シテ、村落、河口間交通ノ便利ヲ計レリ。中澤小里間ハ改築ノ必要アリ、實測結了遠カラス工事着手ノ運ニ至ルヘシ。本道路ハ農工ニ適スル地域ヲ通過スルヲ以テ、之ニ相當ノ修理ヲ加フルト共ニ、更ニ前述ノ幹線ト、留多加トヲ短距離ニ連絡スルノ道路ヲ開鑿スルノ必要アリ。而シテ大泊ヨリ陸路留多加ニ至ラントスルニ當リ、若シ本道路ニ依ルトキハ、非常ニ迂回ナルノミナラス、通行極メテ困難ナルヲ以テ、現今ニ在テハ、貝塚渡船場ヨリ、鈴谷川(河口約二海里)ヲ渡リ海岸ニ沿ヒ、四里ヲ通過シテ留多加ニ至ルヲ便ナリトス。其ノ冬季亞庭灣内結氷ノ時期ニアリテハ、貝塚ヨリ直チニ

氷上馬橋ヲ驅リテ、通行シ得ルノ便アリ。

【大泊、荒栗間】 大泊ヲ起點トシ、其ノ南方亞庭灣ノ海岸ニ沿ヘル小徑ニシテ、未タ道路ト稱スルニ足ラス。唯大泊、女麗間及池邊濱、荒栗間各約三里ハ、纔ニ車馬ヲ通スレトモ、其ノ中間女麗、池邊間約五里ノ海岸ハ、岩礁突出セル所多キヲ以テ、干潮ノ時ニアラサレハ、車馬ヲ通スルコト能ハス。本線沿道ニハ漁場多ク、常ニ舟楫ノ便アルヲ以テ、道路ノ發達ヲ見ルコト能ハサリシモ、將來農漁村落ノ發達スルニ至ラハ、陸上交通ノ設備、亦自ラ其ノ必要ヲ生スヘキニヨリ、他日必ス本道路ノ開鑿ヲ見ルニ至ルヘシ。目下沿道ノ各部落ニハ驛遞ヲ設置セリ。

【眞岡、仁多須間】 此ノ區間ニ於ケル各部落ハ、本島中漁農共最モ發達セル地方ナルヲ以テ、人馬ノ交通頻繁ニシテ、完全ナル車馬道ノ開鑿ハ、刻下ノ急務ナリト認メ、本年六月之カ工事ニ着手シ、同年十月約九里ニ互ル完全ナル車馬道ヲ完成セシムルコトヲ得タリ。

【仁多須、久春内間】 本線ハ唯纔ニ人馬ノ通行ニ適スレトモ未タ安全ニ車馬ノ通行ヲナシ得ルノ程度ニ達セス、既ニ實測ヲ了シ居ルヲ以テ早晚完全ナル車馬道ヲ開鑿スル時機到來スヘキナリ。

此ノ他眞岡以南本斗ニ至ル間十二里ハ、其ノ半途迄稍車馬ヲ通行セシムルニ足ルト雖、不完全タルヲ免カレス。是亦開鑿ノ要アルヲ以テ實測中ナリ。

二、驛遞 由來樺太南半ノ地ハ、露領時代ニ於テハ事業ノ視ルヘキモノナク、從テ交通機關ノ施設モ

甚タ不完全ナリシカ、我カ領有ニ歸スルヤ、或ハ探檢ニ、或ハ視察ニ、其ノ他種々ノ目的ヲ以テ渡航スル者日ニ多キヲ加フルニ至リシヲ以テ、三十八年七月、大泊豊原間(鐵道開通後之ヲ廢止ス)ニ、驛遞ノ開設ヲ許可セシヲ初トシ、漸次其ノ他ノ道路ニ及ホセリ。驛遞業者ニハ土地ノ情況ニ依リ毎月一定ノ補助金ヲ與フルモノト與ヘサルモノトアリ、家屋ハ自力ヲ以テ建築スルモノト幾分ノ補助ヲ受ケテ建築スルモノトノ二様アルモ、概テ官有ノ露國式家屋ヲ貸與シ、馬匹ヲ備ヘ、一定ノ命令條件ノ下ニ、旅人ノ宿泊及人馬ノ繼立ヲ爲サシムルモノトス。又常設ノ驛遞ノ外冬季ニ在リテハ、通路難所ニ特ニ臨時驛遞ヲ設置シ、以テ一般交通上ニ利便ヲ與フルニ至レリ。現在驛遞設置ノ箇所及車輛數ヲ表示スレハ左ノ如シ。但シ道路ノ修築、未タ車輛ノ利用ヲ圓滿ナラシムルニ至ラサルカ故ニ、農家自用ノモノヲ除ケハ市街地ニ少數ノ客馬車アルノミ、是レ車輛數ノ頗ル少數ナル所以ナリ。

驛遞設置地名 (大正二年十二月調)

(一) 自豊原間至東海岸國境

小	沼	柏	濱	相	川	小	田	寒
東	白	浦	近	幌	エベケナイ	東	柵	丹
大	鞆	取	樫	保	東	禮	文	東
新	問	内	路	敷	香	多	來	加

- (二) 野原頂散江舟泊遠岸
- 自豐岡間
- 至真岡間
- 瀧ノ澤大曲中野清
- 逢阪
- (三) 自真岡間
- 至西海岸國境間
- 蘭泊小能登呂岬有部泊居
- 萌菱來知志バッコ沼古丹
- 伊皿鵜城惠須取糸音
- 北名好西柵丹沃內安別
- (四) 自豐原間
- 至西能登呂岬ヲ經テ真岡間
- 江ノ浦多蘭內雨龍間串
- 來泊昆沙瀆西能登呂岬宗仁岬
- 十和田モイレトマリ內幌本斗
- 多蘭泊
- (五) 自大濱泊
- 至茶濱泊

古 牧 君 內 雄 吹 泊 女 麗
 禮 文 別 遠 淵 彌 滿 札 塔
 皆 別 落 帆 野 寒 札 塔

第三節 海運

第一項 船舶

本島ノ海運ハ之レヲ分チテ(一)本島沿岸線、(二)本島内地間線ノ二トナスヲ得ヘシ。本島ノ沿岸ヲ航行スルモノニハ、亞庭灣内ニ於テ灣内各地ヲ巡航スルモノ及大泊ヨリ灣内東部各地ヲ經テ東海岸榮濱ニ到ルモノト、西海岸ニ於テ真岡ヲ基點トシテ、久春内以南ノ各地間ヲ巡航スルモノトノ二アリ、共ニ樺太廳ノ補助ヲ受クル會社ノ經營ニシテ、夏季中百五十噸以下ノ小船ヲ以テ、地方ノ運輸ニ從事スルモノナリ。本島ト内地間ヲ航行スル船舶ニハ、政府ノ補助ヲ受クルモノト、然ラサルモノトアリ。補助ヲ受ケサルモノハ、沿岸漁業時季等ニ於テ、其魚獲物ヲ運搬スル爲ニ内地ヨリ來航スルモノニシテ、不定期ニシテ且寄港地モ亦一定セス、唯物資ノ多少ニ依リテ隨時往復スルモノナリ。此等ノ船舶ニハ漁業ニ關スルモノ、外、材木積取リノ爲ニ來航スルモノアリ、近年木材輸出事業ノ發展スルニ從ヒ、船舶ノ出入其ノ數ヲ増加スルニ至レリ。

補助ヲ受クルモノニシテ、遞信省ノ管理ヲ受ケ、命令航路ヲ往復セルモノアリ、北海道函館ヲ基點トシ、小樽ヲ經テ大泊、真岡間ヲ往復シ、四月ヨリ十二月ニ至ル間月六回ノ定期航行ヲナス。樺太廳ニ於テ定ムル所ノ補助航路ハ左ノ七航路トス。

- 一、東海岸第一線
本島東海岸各地ヲ經テ北海道小樽ヨリ函館ニ達スルモノ
- 二、東海岸第二線
本島東海岸各地ヨリ北海道小樽ニ至ルモノ
- 三、西海岸第一線
本島西海岸各地ヨリ北海道小樽ニ至ルモノ
- 四、西海岸第二線
本島西海岸各地ヨリ北海道小樽ニ至ルモノ
- 五、西海岸第三線
本島西海岸各地ヨリ北海道小樽ニ至ルモノ
- 六、冬季線
本島大泊真岡ヨリ北海道小樽ニ至ルモノ
- 七、稚内線
本島大泊ヨリ北海道小樽ニ至ルモノ
- 八、亞庭灣內線
本島灣內ヨリ本島榮濱ニ至ルモノ

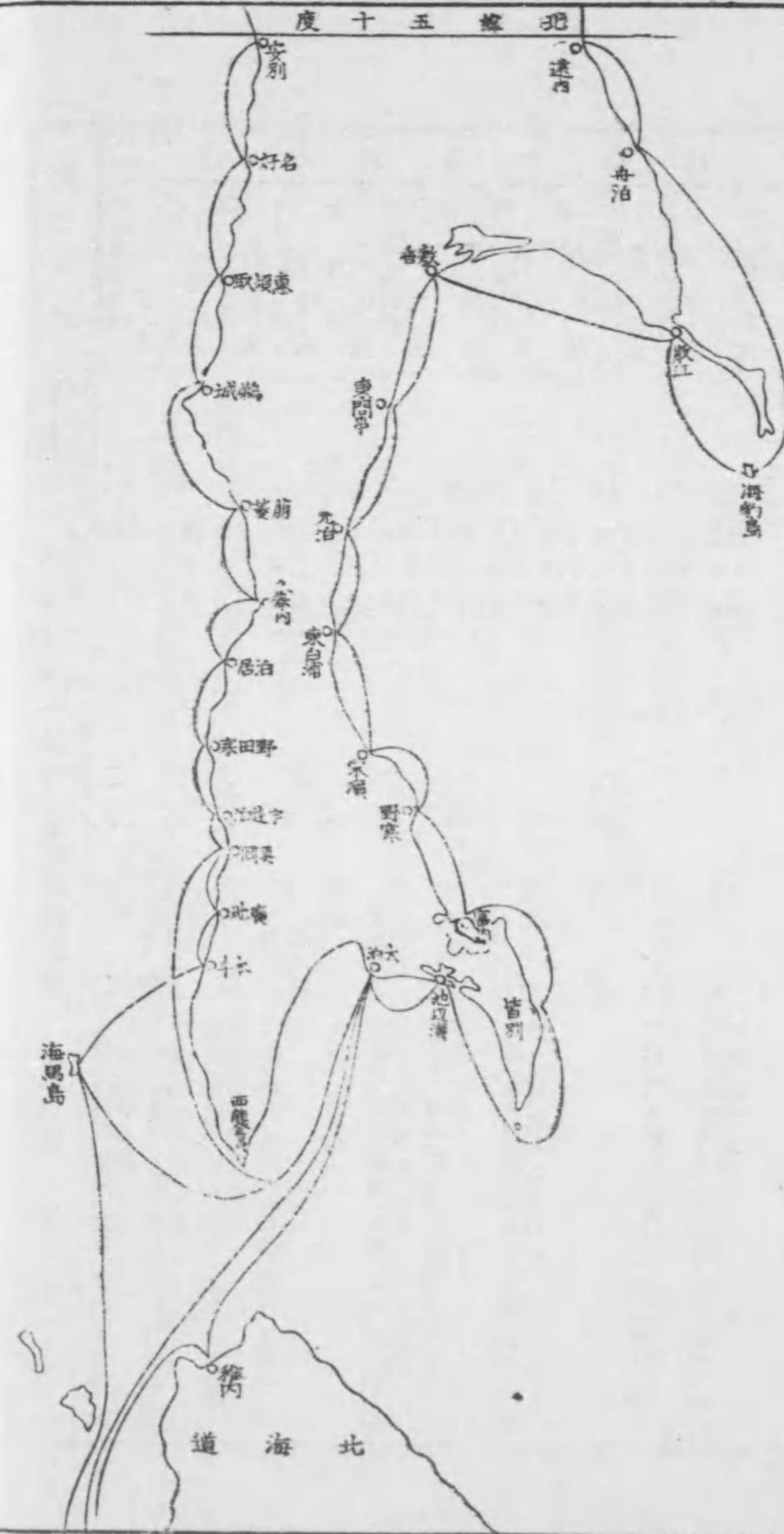
今大正二年度ニ於テ此等各線ニ屬スル船舶ノ航行期間、回数、寄港地ヲ舉クレハ左ノ如シ。遞信省管理ノ補助船ハ、數年ノ期間ヲ以テ日本郵船會社受命シ居ルモ、樺太廳命令ノ分ハ、毎年度新ニ適當ノ船舶ヲ選ヒテ之ヲ命スルモノトス。

種別	使用船舶數	命令期間	航行回数	起點地	終點地	中間寄港地
東海岸第一線	六六	自五月六ヶ月	一二	小樽	江	大泊、池邊、宮内、野寒、榮濱、東白浦、元泊、東間串、數香
東海岸第二線	七〇	自五月六ヶ月	一二	小樽	海	大泊、池邊、宮内、榮濱、東白浦、元泊、數香、散江、海狗島、舟泊
東海岸第三線	九九	自四月八ヶ月	一七	小樽	江	大泊、池邊、皆別、宮内、野寒、榮濱、東白浦、元泊、東間串、數香
冬季第一線	一三	自十一月八ヶ月	三六	小樽	好	大泊、本斗、真岡、野田寒、泊居、久春内、鶴城
冬季第二線	一三	自十一月八ヶ月	三六	小樽	好	大泊、本斗、真岡、野田寒、泊居、久春内、鶴城
冬季第三線	一三	自十一月八ヶ月	三六	小樽	好	大泊、本斗、真岡、野田寒、泊居、久春内、鶴城
西海岸第一線	七三	自四月七ヶ月	一四	小樽	好	海馬島、本斗、廣地、真岡、蘭泊、野田寒、泊居、久春内、牛毛、前麥、鶴城、惠須取
西海岸第二線	七三	自四月七ヶ月	一四	小樽	好	海馬島、南名好、本斗、廣地、真岡、蘭泊、野田寒、泊居
西海岸第三線	三七	自四月七ヶ月	一八	小樽	好	大泊、本斗、真岡、蘭泊、野田寒、泊居、久春内、前麥、鶴城、惠須取
千賀丸	七	自四月七ヶ月	七	小樽	好	大泊、本斗、真岡、蘭泊、野田寒、泊居、久春内
幸成丸	七	自四月七ヶ月	七	小樽	好	大泊、本斗、真岡、蘭泊、野田寒、泊居、久春内
北洋丸	一	自五月六ヶ月	一	大泊	內	留多加、多蘭內、嶮内保、雨龍、菱取、間串、登、鉢、池邊、內音、札塔、皆別、愛郎、宮内、落帆、野寒、宗運
亞庭灣沿岸丸	一	自五月六ヶ月	二	大泊	榮濱	留多加、多蘭內、嶮内保、雨龍、菱取、間串、登、鉢、池邊、內音、札塔、皆別、愛郎、宮内、落帆、野寒、宗運
大泊丸	一	自五月六ヶ月	一	大泊	榮濱	留多加、多蘭內、嶮内保、雨龍、菱取、間串、登、鉢、池邊、內音、札塔、皆別、愛郎、宮内、落帆、野寒、宗運
北見丸	一	自五月六ヶ月	一	大泊	榮濱	留多加、多蘭內、嶮内保、雨龍、菱取、間串、登、鉢、池邊、內音、札塔、皆別、愛郎、宮内、落帆、野寒、宗運
同計	二八〇	五ヶ月	五〇			
大正元年度	二八〇	五ヶ月	五〇			

品名	價目	單位	大泊	本斗	真岡	野田	居寒	久春內	鶴城	北名好
元價取	一百圓	一才	二六	四六	二六	四二	五〇	五五	六二	六八
一等品	一等品	一才	二六	四六	二六	四二	五〇	五五	六二	六八
二等品	二等品	一才	二六	四六	二六	四二	五〇	五五	六二	六八
三等品	三等品	一才	二六	四六	二六	四二	五〇	五五	六二	六八
四等品	四等品	一才	二六	四六	二六	四二	五〇	五五	六二	六八
五等品	五等品	一才	二六	四六	二六	四二	五〇	五五	六二	六八
小荷物一才以下	一才以下	一筒	二六	四六	二六	四二	五〇	五五	六二	六八
同	二才以下	一筒	二六	四六	二六	四二	五〇	五五	六二	六八
同	三才以下	一筒	二六	四六	二六	四二	五〇	五五	六二	六八
同	米穀十俵以上	一俵	二六	四六	二六	四二	五〇	五五	六二	六八
同	燕麥十俵以下	一筒	二六	四六	二六	四二	五〇	五五	六二	六八
酒	六大才樽	一筒	二六	四六	二六	四二	五〇	五五	六二	六八

西海岸線大禮丸貨物運賃表 (小樽樽太各港間)

航路略圖



紙	野	建	干	同	鹽	鐵	同	石	同	官	蜜	梨	同	鷄
幣	菜	蕙	蕙	同	類	類	油	蕙	刻	製	柑	子	同	卵
百圓	果實類	同	十枚掛	十袋以上	十束以上	十筒未滿	十筒以上	四才三分	八才	一才五分	一才五分	二才五分	二才五分	中才五分
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一才	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一四	一四	一五	一一	一一	一八	一三	一〇	一八	三〇	四〇	七	六	一〇	一八
一四	一五	一四	一〇	一五	一九	一五	一〇	一九	三七	四八	九	七	一四	一九
一四	一五	一四	一〇	一三	一九	一四	一〇	一八	三六	四八	八	六	一二	一八
一八	一五	一六	一三	一八	一三	一八	一三	一〇	四二	五五	一三	九	一四	二六
二〇	一六	一八	一四	二二	二二	二二	一四	一三	五〇	六五	一四	二	二七	三〇
一三	一七	二〇	一六	二五	二五	二二	一六	一四	五八	七五	一六	一四	三〇	三五
二五	一八	二二	一八	二七	二七	二六	一八	一六	六二	八〇	一八	一五	三四	三八

同	砂	麥	麥	燒	鹽	同	酢	同	魚	同	味	同	醬	酒
同	包	糖	粉	酒	瓶	鯷	同	同	漬	同	增	同	油	同
同	五三分才	四才五分	一才五分	四打	二木合	石入油	分合	德利	六才	小才	中才	小才	同	中才
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	一筒
一六	〇	六	一五	七	〇	九	二	二	二四	二	二七	六	二	二
一八	二四	一〇	三	九	〇	三	一六	一四	三〇	三	一八	七	三	一六
一六	二〇	七	二七	九	〇	二	一五	一四	二七	二	一七	六	二	一五
二	三〇	三	二五	二	二	二	一四	一八	一六	三	二	三	一	一五
二四	三	一五	三〇	三	三	四	一七	二〇	一八	三七	一六	二四	一〇	一三
一八	三	一七	三	一五	一六	一	一九	二四	三	四	一九	二八	一	一〇
三〇	四	一九	三八	一六	一八	二	二六	三	四九	二	三〇	三	三	二六

品名	單位	大泊	海馬島	真岡	野田居	久春內	鶴城	北名好
生薑	斗	二	四	三	七	九	四	六
大亞	才	七	九	八	二	四	六	七
亞麻	才	七	九	八	二	四	六	七
馬鈴薯	俵	九	一〇	一〇	二	四	六	七
蔬菜類	才	四	五	四	六	七	八	九
各種	同	四	五	四	六	七	八	九
澱粉	同	五	五	五	七	九	一	二
麥粉	同	六	〇	七	三	五	二	三
薄荷	才	二	一	二	三	五	二	三
樹脂	同	六	九	八	二	四	六	七
樹材	同	六	九	八	二	四	六	七
木石	百	三,〇〇〇	三,〇〇〇	三,〇〇〇	四,〇〇〇	四,〇〇〇	四,〇〇〇	四,〇〇〇
同石	同	四,〇〇〇	四,〇〇〇	五,〇〇〇	五,〇〇〇	五,〇〇〇	五,〇〇〇	五,〇〇〇
生牛	頭	四,〇〇〇	四,〇〇〇	四,〇〇〇	五,〇〇〇	六,〇〇〇	七,〇〇〇	八,〇〇〇
生馬	頭	六,〇〇〇	六,〇〇〇	六,〇〇〇	七,〇〇〇	八,〇〇〇	九,〇〇〇	一〇,〇〇〇

品名	單位	大泊	海馬島	真岡	野田居	久春內	鶴城	北名好
麥類	俵	〇	二	一〇	四	五	九	二
燕麥	同	二	三	三	六	七	二	二
豆類	同	八	二	九	三	四	六	八
同類	同	二	四	二	七	九	二	二

貨物運賃表 (自樺太各港至小樽)

品名	單位	大泊	海馬島	真岡	野田居	久春內	鶴城	北名好
白銅	百圓	三〇	二九	二九	三五	四一	四五	五〇
生馬	頭	六,〇〇〇	七,〇〇〇	七,〇〇〇	九,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一三,〇〇〇
生牛	頭	三,五〇〇	六,〇〇〇	五,〇〇〇	七,〇〇〇	七,五〇〇	八,五〇〇	一〇,〇〇〇
豚仔	同	一,二〇〇	二,〇〇〇	一,七〇〇	二,五〇〇	三,〇〇〇	三,五〇〇	四,〇〇〇
家禽	同	七	八	八	一〇	一二	一四	一六
羊	頭	一,四〇〇	一,五〇〇	一,五〇〇	二,〇〇〇	二,三〇〇	二,七〇〇	三,〇〇〇

雜魚	鯨	魚	同	同	昆	錫	同	干	燻	鹽	同	鹽	壓	生
	掉	油			布	子	鱈	製		藏		搾		
		函石	八	五	以百	貫二十	二十束	二八				草	豚	
粕	粕	入油	貫	貫	上石	建八	貫種	貫種				一	一	
同	百	同	同	一	百	同	同	一	同	同	同	同	一	
	石			箇	石			個					才	
三六、〇〇	三六、〇〇	二	一〇	六	三〇、〇〇	三五	三三	二七	六	四	四	四	三	
四二、〇〇	四二、〇〇	一五	一二	八	三五、〇〇	四〇	四〇	三	八	五	五	五	五	
三六、〇〇	三六、〇〇	二	一〇	六	三一、五〇	三五	三五	三〇	七	五	五	五	五	
四六、〇〇	四六、〇〇	一七	一二	八	四〇、〇〇	四〇	四七	四〇	九	六	六	六	六	
五一、〇〇	五一、〇〇	一八	一四	一〇	五〇、〇〇	四五	五五	四五	一〇	七	七	七	七	
六五、〇〇	六〇、〇〇	二〇	一六	一二	五〇、〇〇	五〇	六〇	五〇	一二	八	八	八	八	
七五、〇〇	七五、〇〇	三	一八	一四	五五、〇〇	五五	六五	五五	一三	九	九	九	九	

二三六

筐	鱈	身	同	鹽	同	鹽	胴	鱈
	胃	缺		蛙		鱈	鯨	鯨
	ステ			庭		庭	荷器	荷器
目	ベカ	鱈	散	包	散	包	造械	粕
百	一	一	同	同	同	同	同	同
石	箇	本						
五〇、〇〇	四〇	二〇	四八、〇〇	四三、〇〇	四八、〇〇	四三、〇〇	四三、〇〇	三六、〇〇
六〇、〇〇	五五	二八	六五、〇〇	五八、〇〇	六五、〇〇	五八、〇〇	五八、〇〇	四二、〇〇
五二、〇〇	五〇	二〇	五八、〇〇	四八、〇〇	五八、〇〇	四八、〇〇	四八、〇〇	三六、〇〇
六二、〇〇	五五	二八	六六、〇〇	五八、〇〇	六六、〇〇	五八、〇〇	五八、〇〇	四六、〇〇
六六、〇〇	六〇	三〇	七〇、〇〇	六〇、〇〇	七〇、〇〇	六〇、〇〇	六〇、〇〇	五二、〇〇
七一、〇〇	六五	三〇	七五、〇〇	六八、〇〇	七五、〇〇	六八、〇〇	六八、〇〇	六〇、〇〇
八〇、〇〇	六五	三〇	八〇、〇〇	七〇、〇〇	八〇、〇〇	七〇、〇〇	七〇、〇〇	七五、〇〇

附記

一、十二月ヨリ翌年三月マテハ本表ノ五割増。
 一、米ノ移入及水産物移出運賃ハ經濟上ノ狀況ニヨリ、貨主ト協定ノ上本表運賃ヨリ六割迄ヲ増加スルコトヲ得。

西海岸線旅客運賃表

品名	元價	一等品	二等品	三等品	四等品	五等品	小荷物	同	同	米穀	同	燕麥	酒大樽
元價	一才	一才	一才	一才	一才	一才	一才	一才	一才	一才	一才	一才	一才
單位	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓	百圓
大泊	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八
池邊	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
富内	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三
濱東	四七	四七	四七	四七	四七	四七	四七	四七	四七	四七	四七	四七	四七
白浦	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九
元	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二
泊敷	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二
香散	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七
江海	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七
島舟	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇
泊	八三	八三	八三	八三	八三	八三	八三	八三	八三	八三	八三	八三	八三

筑後川九自小樽至遠内貨物運賃表

備考
本表運賃ハ順路寄港ノ場合ノ運賃トス

品名	小樽	大泊	本斗	海馬島	真岡	野田塞	泊居	久春内	鶉城	北名好
小樽	四八、三〇〇									
大泊		四八、三〇〇								
本斗			三、七〇〇							
海馬島				一、二〇〇						
真岡					二、五七〇					
野田塞						一、二〇〇				
泊居							一、二〇〇			
久春内								一、二〇〇		
鶉城									二、四〇〇	
北名好										一、五〇〇

蠟燭	白玉	蜜柑	梨子	薩摩芋	同小樽	油中樽	同	素麵	布團綿	判綿	塵紙	紙半紙	同函入	鷄卵
二函 才入	二函 才入	函 同	一函入 二ッ合 才五分	一才一分 合	一才一分 合	二才七分	一才二分	二才	十貫 才入	十二貫 才入	二才六分 貫	六貫四才	二才	中才五分 樽
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

七	七	七	六	三	五	三	五	九	七	四	二	八	〇	八
八	八	八	七	二	六	六	六	二	四	五	三	三	二	三
二	二	二	九	三	八	〇	八	四	五	六	一	七	二	七
三	三	三	二	四	九	三	九	一	六	七	八	〇	三	八
三	三	三	三	四	〇	二	五	〇	七	七	八	二	四	九
一	四	一	四	〇	二	六	一	〇	八	七	九	三	六	〇
一	六	一	六	三	五	二	九	二	〇	八	九	二	四	〇
二	八	一	八	五	五	八	三	三	三	三	九	一	二	五
一	九	一	九	六	六	三	四	三	四	一	〇	一	三	九
三	三	三	三	九	七	六	四	二	六	二	九	一	四	五

二四一

同荏包	砂糖	麥粉	麥酒	燒酎	鹽鱈	同德利	酢	同	漬魚	同	中味樽	同小樽	醬油	酒中樽
三才五分	中才二分 樽	一五斤 才入	四打 才入	十二木	石油函入 一才五分	二木 才	同	中才六分 樽	大樽六才	二才六分	三才五分	一才六分	同	二才六分
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	一筒

一	〇	六	五	七	〇	九	二	二	二	四	二	七	六	二
一	九	二	七	八	八	二	二	四	四	二	九	四	〇	七
二	四	〇	九	三	二	五	四	八	八	三	六	八	六	九
二	九	三	二	七	三	一	八	六	三	三	四	三	二	三
三	〇	三	二	九	三	九	七	三	三	四	四	三	三	二
三	三	四	〇	三	〇	四	〇	八	二	四	四	四	二	四
三	四	〇	三	〇	四	〇	八	二	四	四	四	四	二	四
三	五	四	三	三	五	六	三	〇	六	六	五	六	七	三
四	〇	五	一	五	三	八	一	八	二	五	三	〇	三	〇
四	三	四	一	六	四	一	九	七	二	四	三	三	五	三
五	六	一	九	四	三	三	三	二	九	六	七	六	四	九

二四〇

同	小	荷	鍊	板	襖	同	鹽	人	石	卷	吹	薄	同	疊
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

亞	鐵	硫	洋	俵	樽	同	石	燐	干	罐	茶	同	官
鉛	類	酸	釘		柿	未	油	寸	餛	詰	櫃	刻	製
板		函			六	滿	十	四	四	六	五	三	八
十	十	五	三	小	才	八	二	一	一	一	五	四	才
五	二	才	才	六	才	分	箇	才	分	分	分	分	一
八	貫	才	分	貫	才	寸	上	才	寸	寸	寸	寸	筒
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

鐵罐 葉用 板	貓 狎 小 犬	羊 犬	家 禽	同 仔 函 入	豚 牛	生 馬	生 貨	銅 貨	白 貨	散 金	紙 幣 封 包	生 魚 函 入 二 才	鮮 魚 函 入 二 才	同 未 滿
一 才 六 分	一 同	一 同	一 同	一 同	一 同	一 同	一 同	一 同	一 同	一 同	一 百 圓	一 筒	一 筒	一 筒
一 三	七 〇	一、 四 〇	七	八	一、 二 〇	三、 五 〇	六、 〇 〇	五	三	二 七	四	二	一 五	
一 六	八 四	一、 六 八	八	〇	一、 四 〇	四、 二 〇	七、 二 〇	六	三	二 〇	七	三	一 八	
二 〇	一、 五 〇	二、 一 〇	二	二	一、 八 〇	五、 五 〇	九、 〇 〇	八	五	二 六	二	七	二 三	
二 三	一、 二 六	二、 五 二	三	一 五	二、 一 六	六、 三 〇	一〇、 八 〇	一、 〇 〇	四	三	二 五	〇	二 七	
二 五	一、 三 三	二、 六 六	三	一 五	二、 二 八	六、 六 五	一〇、 四 〇	一、 〇 五	五	三	二 七	二	二 九	
二 六	一、 四 〇	二、 八 〇	四	一 六	二、 四 〇	七、 〇 〇	一三、 〇 〇	一、 一 〇	六	三	二 八	三	三 〇	
二 九	一、 五 四	三、 〇 八	六	一 八	二、 六 四	七、 七 〇	一三、 二 〇	一、 二 一	六	三	三 七	四	三 五	
三 三	一、 七 五	三、 五 〇	八	二 〇	三、 〇 〇	八、 七 五	一五、 〇 〇	一、 三 八	五	四	三 五	七	三 八	
三 五	一、 八 八	三、 六 八	九	二 三	三、 一 四	九、 四 五	一六、 〇 〇	一、 四 九	八	四	三 九	〇	四 一	
四 三	二、 二 四	四、 四 八	三	二 六	三、 八 四	一、 一 〇	一九、 二 〇	一、 七 六	九	五	四 五	三	四 八	

豆 類	石 材	木 炭	同 叭 入	石 炭 以 上	野 菜 果 實 類	中 間 繩	大 間 繩	藥 草 履 綱 草	棕 實 欄 子 繩	蔴 機 械 造	建 蔴 同	干 蔴 十 枚 合	石 油 空 函	早 切 七 五 本 才 棟
一 十 俵 以 上	一 三 才 以 下	一 炭	一 筒	一 噸	一 才	一 同	一 同	一 同	一 同	一 才	一 同	一 同	一 同	一 筒
一 〇	五	〇	八	一、 〇 〇	四	六	〇	四	四	四	一 五	二	六	二 三
二	六	三	〇	一、 一 〇	五	七	二	五	五	五	一 八	三	七	二 六
一 五	八	五	二	一、 五 〇	六	九	一 五	六	六	六	三	七	九	三 五
八	九	八	五	一、 八 〇	七	二	一 八	七	七	七	二 七	〇	二	四 一
一 九	〇	九	一 五	一、 九 〇	八	三	一 九	八	八	八	二 九	二	二	四 四
二 〇	〇	〇	一 六	二、 〇 〇	八	二	二 〇	八	八	八	三	三	二	四 六
三	二	三	八	二、 一 〇	九	三	三 三	九	九	九	三 五	二 四	三	五 一
二 五	三	二 五	〇	二、 五 〇	一 〇	一 五	二 五	一 〇	一 〇	一 〇	三 八	二 七	一 五	五 八
二 七	四	二 七	三	二、 七 〇	一 一	一 六	二 七	二	二	二	四	三	一 六	六 二
三	一 六	三	二	三、 〇 〇	一 三	一 九	三	三	三	三	四 八	三 五	一 九	七 三

品名	単位	大泊	池邊	富内	築濱	東白	浦元	泊敷	香散	江海	豹島	舟泊
麥粉 五十斤入	一箇	六	七	九	一〇	一一	一二	一四	一五	一六	一九	
薄荷油	一俵	二	三	七	九	一〇	一二	一四	一五	一六	一九	
木炭	一俵	九	一〇	一三	一五	一六	一七	一九	二二	二四	二七	
醋	一才	七	八	一一	一二	一三	一四	一六	一七	一八	二〇	
樹實	一才	七	八	一一	一二	一三	一四	一六	一七	一八	二〇	
樹脂	一箇	六	七	一〇	一一	一二	一三	一五	一六	一七	一八	
同油	一箇	六	七	一〇	一一	一二	一三	一五	一六	一七	一八	
石材	一才	五	六	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	
木材	百石以上	三六,〇〇〇	四一,八〇〇	四九,五〇〇	五四,〇〇〇	五八,五〇〇	六三,〇〇〇	六七,〇〇〇	七一,〇〇〇	七五,〇〇〇	七九,〇〇〇	
同	百石以下	四八,〇〇〇	四八,〇〇〇	五八,〇〇〇	六六,〇〇〇	七〇,〇〇〇	七五,〇〇〇	八五,〇〇〇	九〇,〇〇〇	九〇,〇〇〇		
草木加工品	一才	四	五	六	七	七	八	九	一〇	一〇	一一	
石炭	一噸	九	一〇	一四	一六	一七	一八	二〇	二二	二四	二六	
見本以外	一噸	九	九	一三	一五	一七	一八	二〇	二二	二四	二六	
生牛	一頭	四,〇〇〇	四,〇〇〇	六,一二〇	六,九六〇	七,四〇〇	七,九二〇	九,〇〇〇	九,八八〇	一二,八〇〇	一二,四〇〇	
生豚	一頭	一,二〇〇	一,三三〇	一,八四〇	二,〇九〇	二,三三〇	二,三三八	二,七〇〇	二,九六〇	三,三六〇	三,七三〇	

品名	単位	大泊	池邊	富内	築濱	東白	浦元	泊敷	香散	江海	豹島	舟泊
麥類 十俵以上	一俵	一〇	一一	一五	一七	一九	二〇	二三	二三	二六	二九	三二
同 十俵未満	一俵	二	三	七	九	一〇	一一	一三	一三	一六	一九	二二
燕麥 十貫入	同	八	九	一二	一四	一五	一六	一八	一八	二二	二五	二八
豆類 十俵以上	同	二	三	七	九	一〇	一一	一三	一三	一六	一九	二二
同 十俵以下	同	三	四	七	九	一〇	一一	一三	一三	一六	一九	二二
大蕓 五斗入	同	二	三	七	九	一〇	一一	一三	一三	一六	一九	二二
亞麻	一才	七	八	一一	一二	一三	一四	一六	一七	一八	二〇	二二
杞柳	一才	七	八	一一	一二	一三	一四	一六	一七	一八	二〇	二二
馬鈴薯	一俵	九	一〇	一四	一六	一七	一八	二〇	二一	二四	二七	三〇
蔬菜類	一才	四	五	六	七	七	八	九	一〇	一二	一四	一六
各種々	同	四	五	六	七	七	八	九	一〇	一二	一四	一六
澱粉	同	五	六	八	九	一〇	一一	一三	一三	一六	一九	二二

各港出入船舶

港名	汽船		船		客		移入貨物		移出貨物	
	入港	出港	入港	出港	上陸	乗船	噸數	價格	噸數	價格
本斗	一〇六	一〇六	八〇、三三	八〇、三三	一、三七	六七九	一、三三	二六、五〇六	一、四二	一八、〇〇〇
阿馬	三三	三三	六、五六一	六、五六一	一、四一	三	一、四一	八、四六	四、五	二〇、〇〇〇
海馬	六	六	四、五五	四、五五	九、九	四、五五	一、〇七四	一、〇七四	一、〇七四	七、四、六七
眞馬	三三	三三	一、五、七五五	一、五、七五五	四、九六	四、七六	一、八七、五五	一、八七、五五	七、九三	八、七、七
關田	一	一	一、五九九	一、五九九	一	一	六、八〇	六、八〇	一、一五	二〇、三三
野田	一〇	一〇	一〇〇、六四九	一〇〇、六四九	一、一五	六七	三、〇四〇	二、七、六	一、一五	二〇、三三
追手	八	八	五、二二	五、二二	一、一七	一	三、四七	二、七、七	四、七	八、六八
泊居	三〇	三〇	二八、五九九	二八、五九九	一、四四	七四	二、八〇	一、〇、八	七、五〇	一、五〇、三三
久春	二	二	九六、二〇一	九六、二〇一	一、五七	一、九八	九、九	二〇、九七	九、九	九六、五〇
荻城	四	四	二四、四三	二四、四三	四、三	八	二、五九	二、八、九三	四、	三、五七
蕨須	三	三	三、七五五	三、七五五	一、九〇	三	三、三	一六、〇〇〇	七、二五	六、二、二四
北須	三	三	三、九七一	三、九七一	三、三	一、八六	二、〇三	二九、八三三	三、	五、八、三三
安別	一六	一六	九、六三三	九、六三三	三、三	一、八六	一、八九	三、一、八七	四、三	三、〇、三九
大泊	四八	四八	四八、四九六	四八、四九六	一〇、九七	八、八〇	七、五八、二二	二、四、六八	七、〇〇〇	一、七〇、一八
池邊	一三	一三	六、四四〇	六、四四〇	三、七四	二八	一、三〇	五、九、三	一、一八	一、三、八三
富内	七	七	五、一五六	五、一五六	三、七九	二〇	一、二八	八、一、七	一、一八	一、三、八三
榮濱	七	七	五、一五六	五、一五六	三、七九	二〇	一、二八	八、一、七	一、一八	一、三、八三
東白	五	五	五〇、二一〇	五〇、二一〇	三、三	二〇八	三、三	三、九、九	四、九	三、一〇一

備考 統計不完全ナル所、及船舶ノ出入僅少ナル港灣ハ省略シタリ、帆船モ亦大泊、眞岡、數香ノ數港ニ出入シタルモノアルモ本表ニハ掲ケス。

第二項 寄航港

本島ノ港灣中最モ船舶ノ出入多キハ大泊及眞岡港ニシテ、大泊港ハ元其ノ地形ニ依リテ楠溪町及榮町ノ二港ニ區別セラレ、露領時代ニ於テハ前者ヲ商船ノ出入港トナシ、後者ハ一ノ漁港タルニ過キサリシカ、邦領トナリシ當時、楠溪町ハ陸海軍使用船ノ碇泊地タリシモ、榮町ハ一般船舶ノ出入港タリ、且本島ニ於テ始メテ渡航者ニ居住ヲ許セシ所ナルヲ以テ、海陸運漕業者ノ居住地及倉庫等ハ概ネ之ニ設備セラレタリ、兩者共ニ棧橋ノ設備アリテ海陸ノ連絡ニ便ス、此ノ兩港ハ鈴谷留多加等ノ殖民地ヲ後背ニ控ヘ、且本島ノ鐵道及幹線道路ノ起點ニシテ、西海岸地方ヲ除ク外、島内交通ノ衝ニ當リ、獨リ海陸ノ接續點ナルノミナラス、又旅客貨物ノ集散地タリ、從來冬季二三箇月間ノ結氷ハ、此ノ天然ノ位置ヲシテ十分ナル活動ヲ爲サシムルコト能ハサリシト雖、樺太廳ニ於テ冬季交通ニ使用セル命令船大禮丸及上川丸ハ、碎氷裝置ヲ有スルヲ以テ、結氷期間能ク大泊港ニ出入スルコトヲ得、且大正元年ニ至リ、榮町ニ於ケル海岸ノ埋立及船洞ノ修築ヲ竣成シ、近來ハ冬期中ト雖、海陸ノ連結至便ナル

ニ至レリ。真岡港ハ大泊港ヲ距ル百四十海里、本島西海岸ニ於ケル物資集散ノ要地タリ、從テ本島及内地間ヲ航行スル自由航路并補助航路ノ船舶ハ常ニ之ニ出入シ、殊ニ漁業季節ニ在リテハ最モ頻繁ヲ極メ、殆ト大泊港ヲ凌駕スルノ勢アリ。而シテ中央首府豊原トノ道路夙ニ成リ馬車一日ニシテ來往スルヲ得、且大正二年ヨリハ夏期中自動車ヲ運轉シ、數時間ヲ以テ之ヲ往復スルコトヲ得、旅客ノ交通物資ノ輸送極メテ容易ナルニ至レルノミナラス、船灣ノ設備ヲ完成シ、出入船舶ノ碇泊ニ便シタルヲ以テ、今ヤ同港ハ大泊ト相并ヒ逐次發展ノ域ニ進ミツ、アリ。

此ノ外船舶ノ寄港地トシテハ亞庭灣内ニ留多加、池邊濱、遠淵、西海岸ニ本斗、野田寒、泊居、久春内、鶴城、北名好、東海岸ニ富内、榮濱、東白浦、元泊、敷香、散江等アリ各港毎月數回船舶ノ出入ヲ見ル。

第四節 通信

本島ニ於ケル通信業務ハ、占領當時ヨリ現今ニ至ル迄、移住民ノ増殖、諸種産業ノ振興ニ伴ヒ、逐年發達ノ趨勢ニ在ルヲ以テ、局所ノ新設、郵便電信電話線路ノ布設等通信機關ノ改善ハ、着々トシテ其ノ歩ヲ進メ、現時ニ於テハ稍完成ニ近ツキタルモノト云フヲ得ヘシ。今茲ニ領有後ニ於ケル郵便電信電話ニ關シ、以下聊カ其ノ概要ヲ叙述スヘシ。

第一項 郵便

郵便ハ元ト野戰組織ナリシカ、三十八年九月以降、漸次普通郵便ノ一部ヲコルサコフ(大泊)、ウラジミロフカ(豊原)、ガルギノウラスコエ(落合)及マウカ(真岡)ニ開始シ、野戰郵便局ヲシテ、其ノ業務ヲ取扱ハシメ、尋テ三十九年八月普通郵便全部ノ取扱ヲ開始セリ。四十年四月ニ至リ、軍政撤去ト共ニ、其ノ組織ヲ變更シテ、通信業務ハ總テ樞太應郵便電信局ノ管理スル所トナリ、四十二年五月再ヒ官制改革ノ結果、一般ノ業務ハ樞太應郵便局ノ掌理ニ歸屬シ、從來ノ本支局制度ヲ改メテ、普通局及特定局トナシ、以テ今日ニ至レリ。而シテ現存ノ普通郵便局ハ四箇所ニシテ、特定局ハ二十五箇所ナリ。其ノ名稱、位置、取扱事務及設置ノ年月ヲ掲クレハ左ノ如シ。(大正二年十一月調)

局名	稱	位	置	取扱事務	設置年月日
豊原	郵便局	豊原	大通南五丁目	郵便、電信、電話、爲替、貯金	明治四十年四月一日
大泊	同	大泊	榮町二丁目二十一、二十二番地	同	同
真岡	同	真岡	本町三丁目無番地	同	同
名好	同	北名	好本通一丁目	郵便、電信、爲替、貯金	同
敷香	同	敷香	村川岸通番外地	同	同
大泊楠溪	同	大泊	楠溪町大通五丁目	郵便、電信、電話、爲替、貯金	同
留多加	同	留多加	加村第九番地	郵便、電信、爲替、貯金	同

長濱郵便局	池邊濱村四六號	郵便、電信、爲替、貯金	明治四十二年九月七日
富内同	富内無番地	同	明治四十一年九月十一日
榮濱同	榮濱第二十七番地	郵便、電信、電話、爲替、貯金	明治四十年四月一日
東白浦同	東白浦部落無番地	郵便、電信、爲替、貯金	同
元泊同	元泊北濱官有豫定地内	同	明治四十三年三月一日
大谷同	大谷村三十八番地	郵便、爲替、貯金	同
鶴城同	鶴城部落	郵便、電信、爲替、貯金	明治四十二年十月十五日
萌菱同	萌菱番外	同	明治四十三年六月十六日
久春同	久春内湊町二丁目	郵便、電信、爲替、貯金	明治四十二年四月一日
泊居同	泊居南本町二丁目	同	明治四十二年七月一日
野田同	野田寒濱町二丁目十五番地	同	明治四十一年三月二十六日
蘭泊同	蘭泊部落十五號	同	明治四十二年七月二十一日
本斗同	本斗無番地	同	同
海馬同	海馬島字ウッス	同	明治四十年八月九日
西能同	西能登呂岬	電信	同
豐原同	豐原西一條南一丁目七番地	郵便、爲替、貯金	同
真岡同	真岡北濱町三丁目二番地	同	明治四十五年五月一日
惠須同	惠須取	郵便、電信、爲替、貯金	明治四十五年七月一日
南好同	南好名	同	同
散江同	散江乙區第五號	同	同

遠淵同	遠淵	同	大正二年八月一日
寄同	寄	同	大正二年八月六日

本島ニ於ケル地方連絡郵便物ハ、鐵道、水路及通常道路ニ依リテ、遞送シツ、アルモ、陸路ハ概ネ不便ニシテ、交通不完全ノ箇所多シ、從テ定規速度ヲ實行スルコト難ク、自然遲達ヲ免レス、夏季ハ陸路ノ外、汽船便ヲ利用シ得ルヲ以テ、稍敏活ノ遞送ヲ爲シ得ルモ、冬季ハ陸路便ニ依ルノ外ナク、不便ノ度甚シカリシモ、現今遞送回數ヲ増加シ、地方交通上努メテ郵便物ノ速達ヲ計レリ、今茲ニ陸路郵便線路名稱、遞送里程、遞送回數等ヲ表示スレハ左ノ如シ。(大正二年十二月調)

種別	線路名	區別	種別	送別	里	程	回数	及	期間
通常道路	惠須取	遞送	人夫送		一〇、三、二	月	十		五
同	鶴城	同	同		八、一、五	同			同
同	鶴城	同	同		二〇、五	同			同
同	久春	同	同		六、一、八	及自五月至十月十五	同		同
同	久春	同	同		三、八	及自十一月至三月	同		同
同	久春	同	同		九、一、九	月	六		同

第九章 交通

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
手折	帆留	小野	圓散	川榮	野榮	南富	千鉢	鉢富	中札	札遠	四留	南南	安名	遠長		
毛菱	保加	呂寒	度江	北濱	寒濱	入内	保戸	戸内	床塔	塔淵	能登	白主	別好	淵濱		
間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
四、二八	一六、〇〇	一七、一一	二五、一四	七、二九	六、〇三	七、一	二八、二六	六、二	七、一	六、二五	一〇、〇〇	四、一九	二九、〇〇	九、四		
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
四月及五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	四月及十二月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月
四月及十一月至三月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月	五月至十一月
(夏)月十回	(冬)月十回	(夏)月十回	(冬)月十回	(夏)月十回	(冬)月十回	(夏)月十回	(冬)月十回	(夏)月十回	(冬)月十回	(夏)月十回	(冬)月十回	(夏)月十回	(冬)月十回	(夏)月十回	(冬)月十回	(夏)月十回

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
長大	富大	貝留	豐留	眞豐	東榮	元東	數元	散數	南本	本眞	關眞	野眞	泊野	名泊						
濱泊	内泊	塚加	原加	岡原	浦濱	泊浦	香泊	江香	好斗	斗岡	泊岡	寒岡	居寒	寄居						
間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間	間
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
八、一	一六、〇〇	七、一	九、三五	一九、一	一三、二三	一三、〇二	二九、五	二五、八	七、一八	二、九	三、二〇	二、三	一〇、六	四、九						
每	月	日	日	日	同	同	月	月	月	月	同	同	同	每	日					
日	十	自一月至十一月	四月及十二月	日			十	十	十	十				日						
一	五	三月十五回	月十五回	一			五	五	五	五				一						
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

通	道	鐵	水	同	同	同	同	同	同
常	道	路	路	同	同	同	同	同	同
東	登	榮	真	遠	安	大	大	同	同
白	白	濱	館	泊	泊	泊	泊	同	同
浦	帆	濱	岡	泊	泊	泊	泊	同	同
間	間	間	間	間	間	間	間	同	同
集	送	送	汽	同	同	同	同	同	同
配	同	同	船	同	同	同	同	同	同
人	同	同	同	同	同	同	同	同	同
夫	同	同	同	同	同	同	同	同	同
送	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一五、一六	五、六	四四、五	四八〇	三八	六四	三六七	十二月	三月	五月
夏	日	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月	五月
月	上	至	至	至	至	至	至	至	至
十	下	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月	十二月
一	二	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月	六月
回	回	回	回	回	回	回	回	回	回

又本島、内地間ノ郵便物ハ、汽船ノ來往不便ナルヲ以テ、時期ニ依リ遅達ヲ免レス。郵便物ハ樺太
 廳補助船及遞信省命令定期船、其ノ他社外船ニ依リ、小樽ト大泊、真岡トノ間ニ毎月凡ソ十五回ノ遞
 送ヲナセリ。然レトモ、毎年一月ヨリ三月ニ至ル冬期三箇月間ハ流水又ハ結氷ノ爲、船舶ノ航行自由
 ナラス、廳ノ補助船并ニ遞信省命令定期船ヲ合セ、毎月五回乃至六回航行スルニ過キス、而シテ其ノ
 大泊、真岡ニ陸揚シタル郵便物ハ、同地ヨリ陸路便ニ依リテ、更ニ各地ニ遞送セラレツ、アリ。

第二項 電信

軍政時代ニ於テハ、軍用電話ニ依リ、コルサコフ外七箇所ノ通信所ニ於テ取扱ヒシカ、四十年三月
 軍政廢止ト共ニ其ノ事務ハ、樺太廳郵便電信局之ヲ繼承シ、本局并ニ各支局ニ於テ之ヲ取扱フニ至レ
 リ。而シテ四十二年五月郵便局官制改革ニ伴ヒ、本局并ニ各支局ハ、普通局、特定局ニ變更セラレタ
 リ。其ノ度着々置局セラレ現今普通局四箇所、特定局二十五箇所内三箇所ヲ除クノ外ハ、全部電信事務
 ノ取扱ヲ開始スルニ至レリ。今本島現時ノ電信回線ヲ示セハ左ノ如シ。

電信回線表 (大正二年十二月調)

回線名	陸上線	水底線	接續局名
札幌樺太線	一三、〇〇、三四、〇	一〇一、〇九五	札幌、豊原
小樽真岡線	二、三〇、四一、三	一三三、六四七	真岡、海馬島、小樽
豊原大泊線	一〇、一五、一二、三		豊原、大泊
豊原留多加線	二〇、二二、二八、三		豊原、大泊、楠溪、留多加
豊原南名好線	三六、一七、一一、三		豊原、真岡、本斗、南名好
豊原久春内線	三八、一二、二五、三		豊原、榮濱、東白浦、久春内
留多加西能登呂岬線	二七、一八、五四、〇		留多加、西能登呂岬
富内遠淵線	二四、二二、四〇、〇		富内、大泊、長濱、遠淵
東白浦江線	七二、一九、四二、五		東白浦、元泊、敷香、散江
久春内名好線	四五、二八、四六、〇		久春内、萌菱、鶴城、惠須取、名好

真岡久春内線 二九、三四、九、三
久春内名寄線 二、二六、三九、二

真岡、蘭泊、野田寒、泊居、久春内
久春内、名寄

二六二

本島、内地間ノ電報ハ元ト北海道稚内、コルサコフ間ノ海底線一條ニ依リ通信シタルモ、時ニ輻輳遅延ヲ免レサリシヲ以テ、四十年十月五日ニ至リ、稚内、真岡間ニ更ニ一條ノ海底線ヲ増設シ、札幌又ハ小樽ヨリ稚内ヲ經テ、此等二線ニ依リ通信スルコト、ナリ、大ニ便益ヲ得ルニ至レリ、即チ前表ニ示ス所ノ札幌樺太線、小樽真岡線是ナリ。又邦領樺太ト露領樺太トノ間ニハ、未タ直接通信ノ途開ケサルヲ以テ、郵便電信ハ總テ内地ヲ經由セリ。

第三項 電話

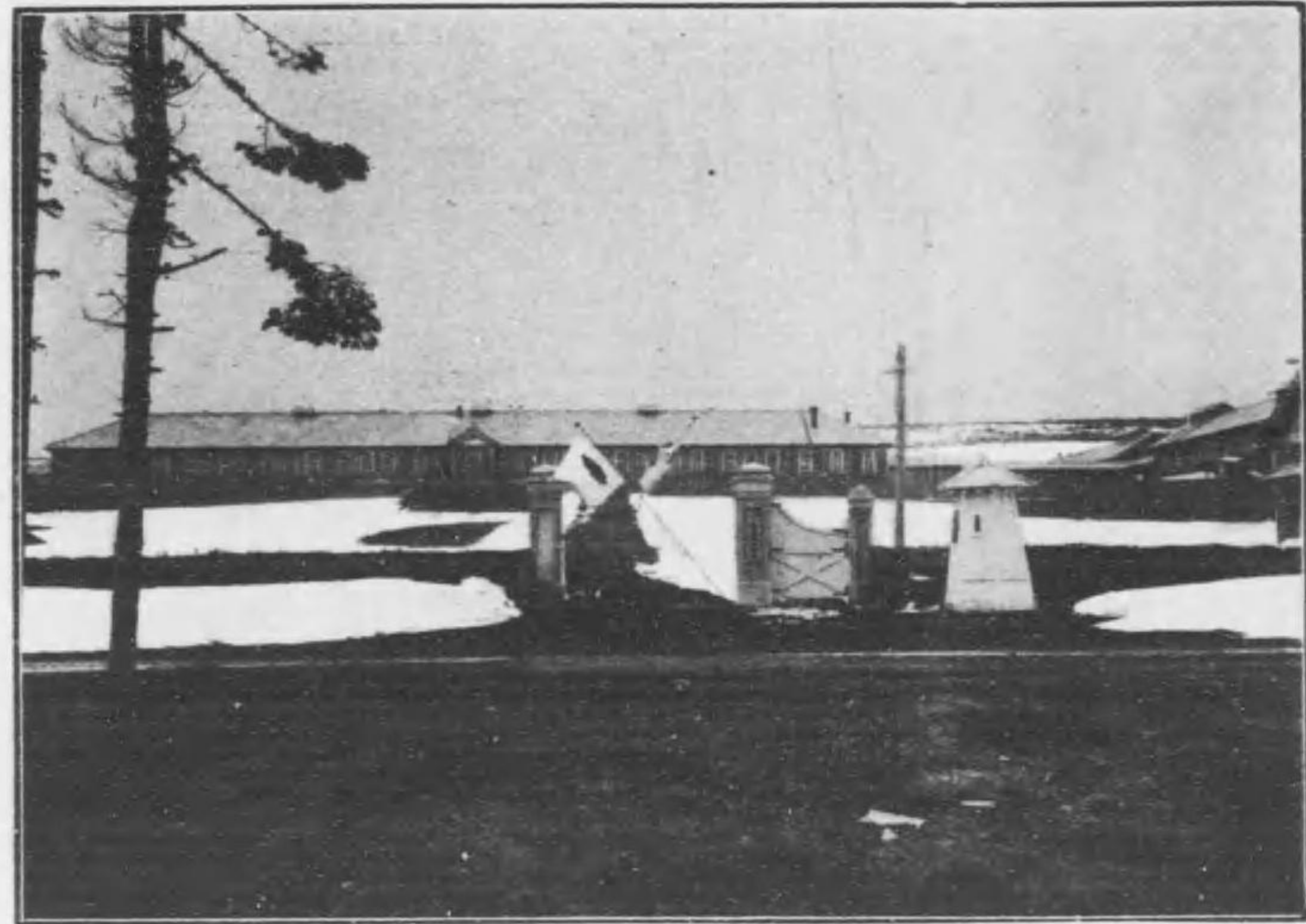
電話ハ元コルサコフ、ウラジミロフカ、マウカ、ガルギノウラスコエ及ノトロノ各通信所、其ノ他主要ナル官衙ニ設置セラレタルモ、其ノ當時ハ軍用ニシテ公衆ノ用ニ供セラレス、地方一般ノ不便トセル所ナリシカ、四十年八月一日コルサコフニ、同年九月一日ウラジミロフカニ電話交換業務ヲ開始シ、又同年八月一日コルサコフ記念橋、大泊（ボロアンドマリ）、ウラジミロフカ、ガルギウラスコエノ各地ニ電話所ヲ設置シタルモ、其ノ後變更シテ、電話所ハ豊原、大泊、大泊本町、榮濱ノ四箇所トナシ、四十三年二月六日真岡局ニ電話交換事務ヲ開始シ、真岡電話所ノ新設ヲ見ルニ至レリ。而シテ大正元年度末現在ニ依レハ、電話加入者ハ、豊原百八十二名、大泊百十七名、真岡八十九名ニシテ

尙加入申込者多々アルモ、豫算ノ關係上全部其ノ需メニ應スルヲ得スト雖、此等ハ出來得ヘキ範圍内ニ於テ、其ノ申込希望ニ副フノ方針ナリ。

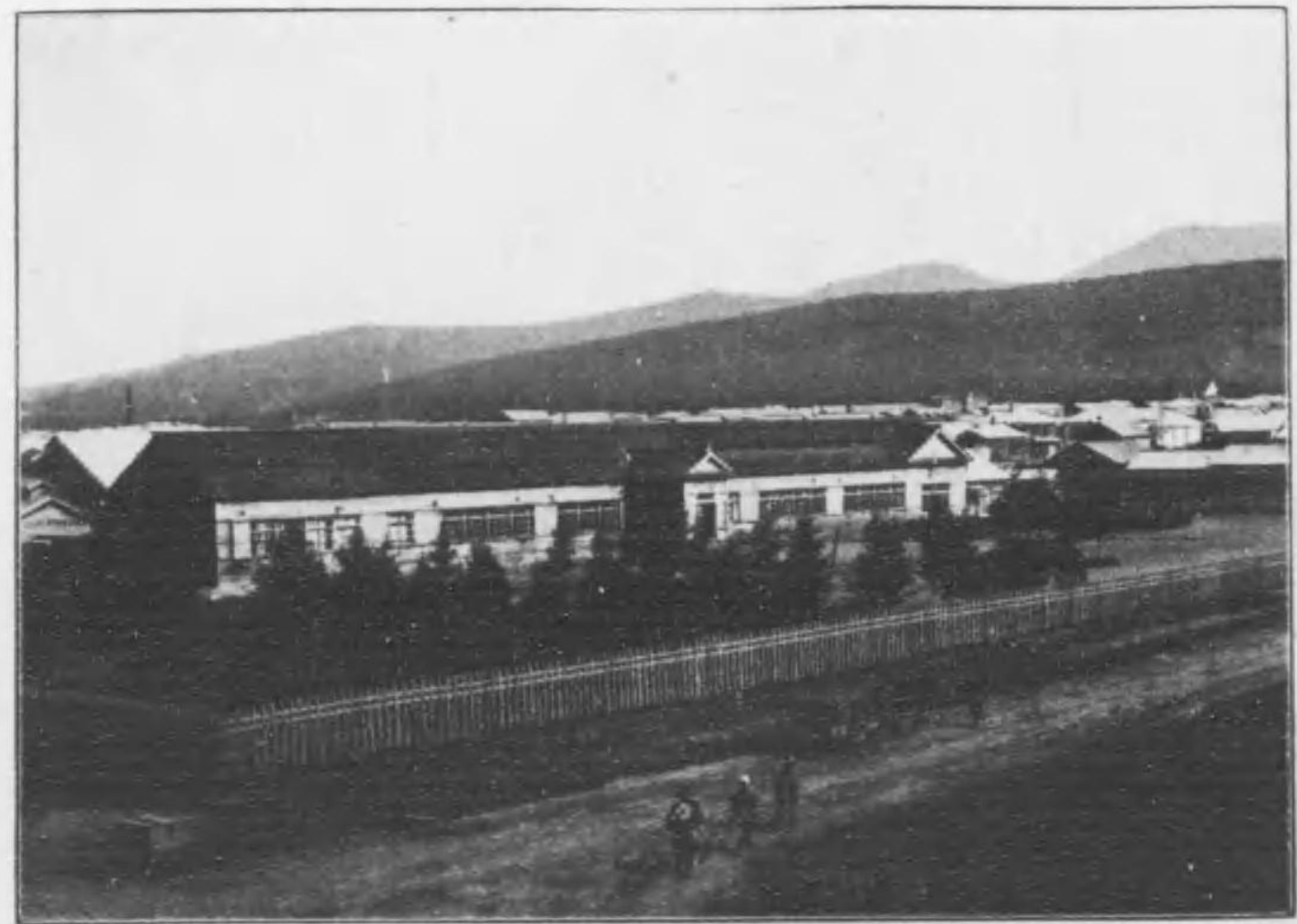
以上述ヘタル如ク、本島ノ通信業務ハ年ヲ逐フテ激増シツ、アリ、是レ即チ本島開發進步ノ事實ヲ標示スルモノト謂フヘシ。今四十年以降ニ於ケル郵便、電信、電話ノ比較表ヲ示セハ左ノ如シ。

郵便物比較表

年度別	種別		郵便		小包	
	引受數	配達數	引受數	配達數	引受數	配達數
四十年度	一、四八三、九三一	一、七五七、〇五四	八、四七〇	二七、六八六		
四十一年度	一、四一八、〇三六	一、六七〇、六九八	一〇、一五四	三一、三七〇		
四十二年度	一、四三三、七七三	一、八七五、五九五	一一、七三三	三二、五九八		
四十三年度	二、一四四、八八七	二、五五三、五八四	一六、〇九五	四九、五八五		
四十四年度	三、二一五、八四三	三、六六三、八二八	一八、〇八一	五六、一九六		
大正元年度	三、七〇七、八九三	三、九〇二、三三六	二〇、一五三	五八、九一六		



國立廳中學



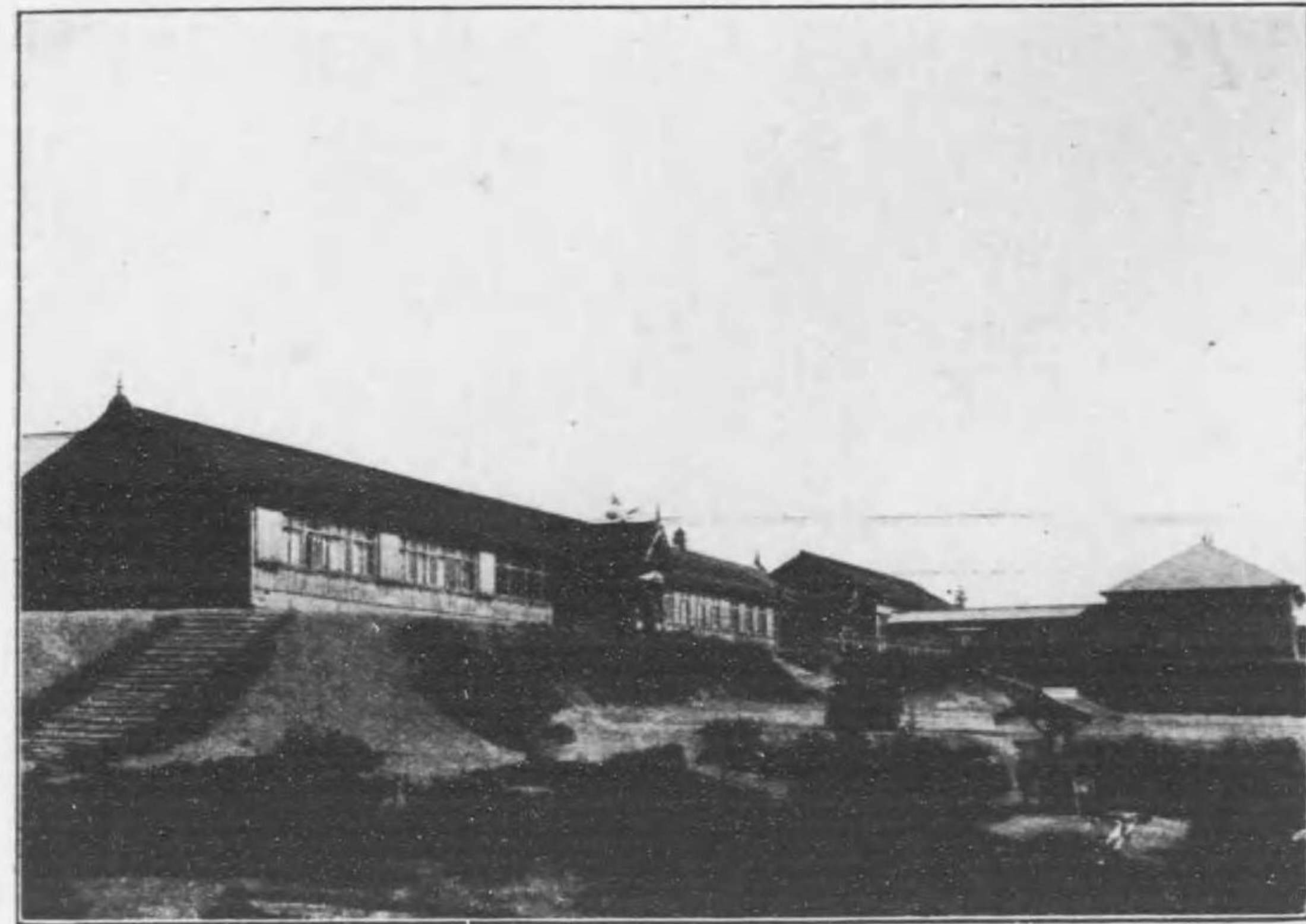
國立廳尋常高等小學校

電話通話度數比較表

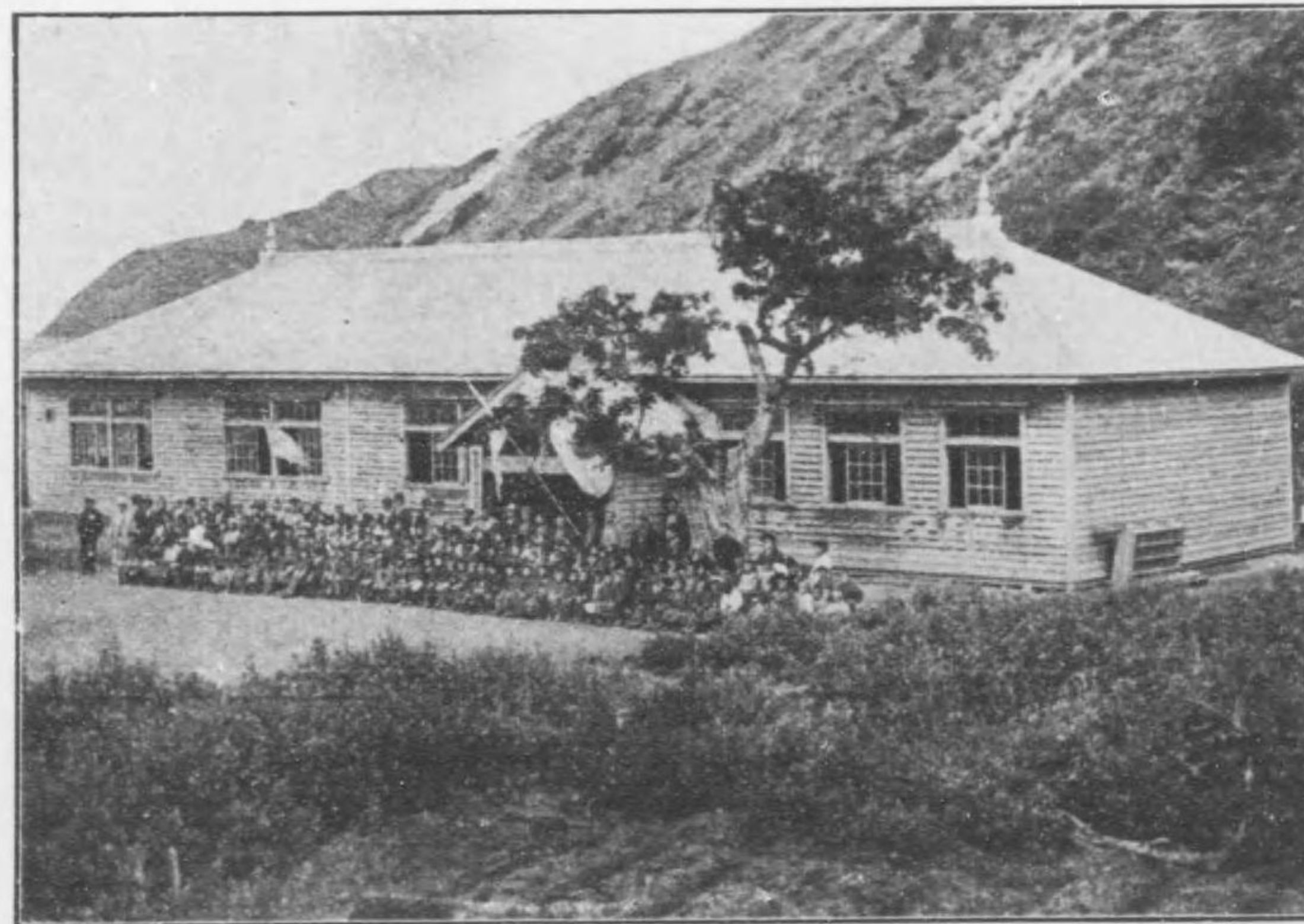
年度別	種別	加入者數		加入者相互間通話		通話所扱通話		合計
		市	外	市	外	市	外	
四十年	年	一五五	二八八、七四〇	一四、四一〇	一八一	五三七	三〇三、八六八	四〇六、九二二
四十一年	年	二二〇	四七七、六七七	二八、五〇三	八九	五四〇	五〇六、八〇九	三七八、五四七
四十二年	年	一九五	七五八、九四七	二八、七五〇	三七	七八〇	七八八、五一四	四一七、二八五
四十三年	年	三三七	一、二五九、九七五	三〇、九四一	四〇	五三〇	七八一、四八六	五三八、七四〇
四十四年	年	三五三	一、五〇五、六四五	五八、九三四	三〇	一、二五四	一、五六五、八六三	七七九、一七六
大正元	年	三八八	一、七九七、五七六	五九、三二〇	三五	一、五八四	一、八五八、五一五	八二四、四二七

電信發着比較表

年度別	種別	發着		信着		信		合計
		發	信	着	信	中	繼	
四十年	年	一四〇、五七二	一二四、一五一	一二四、一五一	一四二、二三九	一四二、二三九	四〇六、九二二	四〇六、九二二
四十一年	年	一三八、七四〇	一二三、七二九	一二三、七二九	一六〇、〇七八	一六〇、〇七八	三七八、五四七	三七八、五四七
四十二年	年	一四六、八五七	一三四、一五二	一三四、一五二	一三六、二七六	一三六、二七六	四一七、二八五	四一七、二八五
四十三年	年	一八一、九一〇	一六三、三九五	一六三、三九五	一九三、四三五	一九三、四三五	五三八、七四〇	五三八、七四〇
四十四年	年	二二八、七八七	二一〇、六一二	二一〇、六一二	三三九、七七七	三三九、七七七	七七九、一七六	七七九、一七六
大正元	年	二五一、九〇六	二三五、〇九九	二三五、〇九九	三三七、四二二	三三七、四二二	八二四、四二七	八二四、四二七



校學小等高常尋泊大立廳



校學小常尋居泊立私

第十章 教育

第一節 總說

露領時代ニ於ケル本島ノ教育事業ハ、其ノ施設經費ノ上ニ多少力ヲ盡シタルモノ、如シ。西曆千八百九十九年(明治三十二年)ノ調査ニ係ル露國ノ統計ニ依レハ、當時本島各州ニ於ケル小學校及學齡兒童ノ數ハ左ノ如シ。

州名	學校數	學齡兒童數	就學兒童數
アレキサンドル	一〇	六三二 _人	二九四 _人
ツイモフ	九	一、五四二	二七三
コルサコフ	八	四三二	一六三
計	二七	二、六〇六	七三〇

又西曆千九百一年(明治三十四年)露國ノ調査ニ係ル全島小學校及就學兒童ノ統計ニ依レハ左ノ如ク増加シタリ。

學校數	學齡兒童數	就學兒童數
三六	二、〇四五 _人	九五九 _人

小學校ノ施設ニ關シテハ、當初露國政府ハ、之カ經費トシテ毎年四千留ヲ支出シタリ、サレト斯カ
 ル少額(一校僅百十一留餘)ノ經費ヲ以テ經營スル事、固ヨリ至難ノ業ニシテ、總テノ點ニ於テ不完全ナルヲ免レ
 ス。即チ其ノ教員ノ如キモ、資格アル者ハ僅ニ三名ニ過キスシテ、他ハ皆流刑移民中、多少文筆ノ素
 養アルモノヲ以テ、之ニ充テタルノ有様ナリキ。此ノ如ク其ノ經費ハ少額ニシテ、教員モ亦殆ト無資
 格者ノミナルニ拘ハラス、之カ監督ノ方法モ、別ニ備ハラサリシ状態ナレハ、教育ノ效果極メテ不良ナ
 リシハ、素ヨリ怪シムニ足ラサル所ナリトス。是ニ於テ同年後半期ニ至リ、新ニ視學官ヲ置キ、且ツ
 十校ヲ拔キテ、同國文部省ノ直轄ト爲シ、爾後之レカ經費トシテ、毎年一萬留ヲ支出シ、優良ナル教
 員ヲ任用シ、又之レヲ優遇スルトトモニ、尙視學官ヲシテ嚴密ニ監督セシメタリシカハ、校費ニ多少
 ノ餘裕ヲ生セシノミナラス、他校ノ模範トモナリテ、茲ニ始メテ本島ノ教育事業ハ、其ノ面目ヲ改ム
 ルニ至レリ。殊ニ是等小學教育ノ外、露國皇后陛下ノ補助ノ下ニ設立セラレタル流刑人家族保護會所
 屬、サガレン島救兒院内ニ於ケル學校ノ如キ、本島在勤官吏ノ子弟ノ爲ニ設立セラレタル中學豫備學
 校ノ如キハ、何レモ設備頗ル完全ニシテ、成績亦タ良好ナリシト云フ。

明治三十八年本島ノ我カ領有ニ歸スルヤ、移民ノ來島スル者日ニ増シ月ニ加ハリ、コルサコフ(大泊)
 ウラジミロフカ(豊原)及ヒマウカ(真岡)ノ如キハ、忽チニシテ市街ヲ形成シ、從テ教育機關ノ必要ヲ
 モ促シケレハ、三十九年八月以降、此等三市街ニ應立小學校ヲ建設シ、學齡兒童ヲ收容シ國民教育ノ

事業ヲ開始シ、其ノ他ノ部落ニ對シテモ、經費ノ幾分ヲ補助シテ小學校ノ開設ヲ獎勵シ、以テ大ニ教
 育ノ普及ヲ圖レリ、乃チ之カ詳細ニ涉ツテハ、以下節ヲ革メテ叙述セム。

第二節 施設

本島領有後、自由渡航ヲ許可セラル、ヤ、移民日ニ増シ月ニ加ハリ、就中、豊原、大泊、真岡ノ三市街
 ノ如キハ、其ノ増加ノ度、極メテ迅速ニシテ教育上ノ施設一日モ忽セニス可ラサルハ既ニ述ヘタルカ如
 シ。是ニ於テカ、三十九年八月豊原ニ、同年十月大泊真岡ニ、各官費ヲ以テ尋常高等小學校ヲ設置シ、
 内則ヲ設ケテ、茲ニ始メテ其ノ實施ヲ看ルニ至リタルカ、教育上ノ施設ヲ要スルハ營ニ此等市街地ノミ
 ニ止マラス、其ノ他ノ部落ニ於テモ追次之カ必要ヲ認メ、相當補助ノ下ニ私立簡易教育所ヲ設置セシ
 メテ、徐々ニ普通教育ノ普及ヲ圖レリ。斯クテ四十一年四月小學校令及同施行規則ノ一部施行ヲ見ルニ
 至レリ、而シテ三市街以外ノ部落ニ就キテハ、私立小學校補助規則ヲ設ケ、單級小學校ニハ年額四百圓、
 多級小學校ニハ一學級ヲ増ス毎ニ尙二百圓ノ増額ヲ給スルコト、ナシタルヲ以テ教育ノ設備稍其ノ面
 目ヲ改メシカ、是等補助ヲ受クル私立小學校ノ數ハ四十二年末ニ於テ、既ニ三十六ヲ算スルニ至レリ。
 四十三年四月、私立小學校補助規則ヲ改正シ、樺太廳長官ノ指定シタル區域及位置ニ於テ、其ノ部
 落住民共同ニ依リ、私立小學校ヲ設置スルトキハ、教員俸給ノ補助ヲ與ヘ、教員ハ其ノ資格ニヨリ、

單級小學校ニ在リテハ、年額三百圓以内(四十五年三百六十圓ニ改ム)、多級小學校ニ在リテハ、二學級ノ場合ハ、年額四百八十圓以内、三學級ノ場合ハ、年額八百四十圓以内、以上一學級ヲ増ス毎ニ、年額二百四十圓以内ヲ加フルコト、シ、尙從來設立者ニ於テ管理シ來レル私立小學校ハ、爾後部落總代ヲシテ之カ管理ノ任ニ當ラシムル等、徐々ニ斯業ノ基礎ヲ固クシ、益々施設ノ改善ヲ計リシカ、移住民ノ増加ト、地方部落ノ發達トニ伴ヒ、次第ニ小學校ノ増設ヲ促カシ、大正元年度末ニ於テハ、各部落ニ於ケル私立小學校ノ數、總計六十八ニ達セリ。

中等教育ニ關シテハ、明治四十五年五月始メテ大泊ニ廳立中學校ヲ設置シ、之カ普及ヲ圖ルニ至リシカ、大正二年十二月末現在生徒數、百二十七名學級數四、教員數九名ナリ。

第一 廳立小學校學級教員及兒童 (大正二年三月末)

學 校	學 級	教 員		就 業		學 科		兒 童	
		小正尋正	尋准代用	尋 常	科 計	高 等	兒 童	合 計	
豐 原	二	一	一	一	一	一	一	一	一
大 泊	二	一	一	一	一	一	一	一	一
真 岡	二	一	一	一	一	一	一	一	一
計		三	三	三	三	三	三	三	三
明治四十五年三月末		三	三	三	三	三	三	三	三
明治四十四年三月末		三	三	三	三	三	三	三	三

明治四十三年三月末	三	三	三	三	三	三	三	三	三
明治四十一年	三	三	三	三	三	三	三	三	三
明治四十年	三	三	三	三	三	三	三	三	三
明治三十九年	三	三	三	三	三	三	三	三	三

三市街地ニ於ケル小學校ハ、元ト大泊ヲ第一、豐原ヲ第二、真岡ヲ第三尋常高等小學校ト稱シタリシモ、四十一年四月、告示ヲ以テ前掲表記ノ如ク改稱セラレ、次テ増築ヲナセシモ、學齡兒童ノ全部ヲ收容スルコト能ハスシテ、各校、二部教授ヲ行フノ止ムナキ有様ナリシカ、四十四年三月再ヒ増築或ハ改築ヲナシ、同年四月ヨリ全部二部教授ヲ廢止シタリ。其ノ後兒童ノ増加ニ從テ大正二年八月更ニ増築ヲナセリ。

第二 私立小學校學級教員及兒童 (大正二年三月末)

支 廳	直 轄 所 轄	學 校	學 級	教 員		就 業		學 科		兒 童	
				小 正 尋 准	無 資 格	尋 常	科 計	高 等	兒 童	合 計	
豐 直	大 唐 橋 精 華 澤	大 唐 橋 精 華 澤	一 一 一 一 一	一	一	一	一	一	一	一	一
軍 並 中 唐 橋 精 華 澤	川 川 樺 松 華 澤	川 川 樺 松 華 澤	一 一 一 一 一	一	一	一	一	一	一	一	一
計											
明治四十五年三月末											
明治四十四年三月末											

眞										泊									
木		轄		直						計	富内	濱 長							
本	遠	阿	麻内	海馬	海馬	藻	富内	大	苦	廣	宇	本	蘭	富	禮	奥	長	荒	遠
斗	節	幸	場	島	本校	帆	岸	種	舞	地	泊	丹	泊	内	別	鉢	濱	栗	淵
三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三	一	一	一	一	一
一	一	一	一											六					
														一					
一														二					
	一													二〇	一				
一														三					
二	一	一	一											一八	一				
一														四					
三	一	一	一											三	一				
七	六	七	六	八	三	〇	二	八	三	三	三	二	三	三六	三	七	五	四	七
五	八	六	六	六	三	八	四	九	二	三	三	三	三	三〇	九	二	三	三	七
二	四	三	三	三	三	八	五	七	八	五	八	九	一〇	六二	一	六	七	一	九

大						原					
加多留		轄		直		計	濱	榮	谷	大	轄
雨	多	平	小	留	加	小	雄	貝	千	一	船
龍	内	野	原	加	井	田	吠	塚	歳	澤	町
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
六	三	九	三	六	一	六	九	四	七	三	九
五	五	三	九	一	八	二	二	二	六	六	六
二	三	四	三	三	三	〇	三	一	五	九	九

名	香			岡									
	計	元泊	轄直	計	内	春	久	居	泊	寒	田	野	斗
北名好	四	泊	江路	六	志	菱	毛	寄	居	手	霜	寒	岸
	五	二	一	八	一	二	一	二	四	一	二	三	一
	二	一	一	六									
				二									
	一	二		四									
				三									
				三									
				一									
				二									
	一	一		四									
				七									
	一	五	二	七									
				三									
	一	五	二	五									
	一〇	七	四	六	六	八	七	二	一〇	五	三	三	一
	六	七	三	九	一	九	六	五	三	七	二	三	一
	一六	一三	七	二七	四	二	一	一	六	一	二	三	一

好	合					
	計	城	圓	度	城	度
明治四十年	五					
明治四十一年	二〇					
明治四十二年	三					
明治四十三年	五					
明治四十四年	五					
明治四十五年	六					
合計	三					

備考 △ハ専科正教員ナリ。

本島在學兒童ノ本籍ハ、北海道ヲ始メ、東北、北陸地方、其ノ多數ヲ占ムルモ、亦爾餘ノ府縣ニモ涉レルカ故ニ、各、言語、風俗、習慣ヲ異ニシ、且ツ其ノ入學、退學頻繁ナルヲ以テ、教授訓練ノ統一上、困難ヲ感スルコト尠カラズト雖、斯ノ如キハ、殖民地開發當初ノ免レ難キ現象ニシテ、畢竟教育實務者ノ刻苦精勵ニ俟ツノ外ナシ。

教育實務者ニ就テハ、學校施設草創ノ際ニ於テ、其ノ選任ト配置トニ多少ノ困難ヲ感シタリシモ、漸次希望者ヲ増加シ、大正二年三月末ニハ、應立小學校教員三十五名、私立小學校教員百〇一名ニ達シ、授業上何等ノ支障ヲモ見サルニ至レリ。而シテ應立ノ小學校教員ニハ、本俸ノ外就レモ十分ノ八ノ加

俸ヲ給セリ。

第三 應立小學校經費 (大正元年度)

學校名	常		費		臨時費	合計
	俸給及 船費	修繕費	旅費	雜給及 費		
豐原高等小學校	五,二六一	八五七	二七	三三	四九六	六,六一四
大泊高等小學校	六,五五八	一,〇五五	—	八七	八五四	八,五四四
真岡高等小學校	五,五五七	六八八	三〇	四九	八八四	六,八四四
計	一七,三七六	二,七〇〇	五七	一八四	一,三〇三	二一,〇五九
明治四十三年度	一六,〇七七	二,三三三	三七	一〇一	一,八四九	二一,〇六六
明治四十三年度	一四,〇八九	三,一〇〇	六一	二〇七	一,〇一三	二〇,一〇七
明治四十二年度	三,一〇五	三,三三九	一,五三六	一五	二,五六八	四〇,八三三
明治四十一年度	八,六九九	二,九四七	二六二	一九九	二,三三三	四六,四三九

四十三年十一月、樺太應立小學校授業規定ヲ設ケ、尋常科ハ金二十錢、高等科ハ金四十錢ヲ納付スルコト、ナシ、支廳長ハ、尋常小學校ニ就學スル兒童、二名以上ヲ有スル保護者ニシテ、其ノ負擔ニ堪エスト認メタルトキハ、半額以内ノ程度ニ減額スルコトヲ得ヘク、又貧困者ニ對シテハ、其ノ全部又ハ一部ヲ免除スルコトヲ得トナシ、四十四年四月一日ヨリ之ヲ施行セリ。

第四 私立小學校經費ノ一 (收入) (大正元年度)

支所 出投所	學校名	金					計
		繰越金	補助金	贈出金	授業料	雜收入	
支直所結	大澤尋常小學校	—	二,四八四	—	二,九二一	四,四〇五	
	精華尋常小學校	—	—	—	二,二七二	二,二七二	
	唐松尋常小學校	—	—	—	一,〇〇九	一,〇〇九	
	中樺尋常小學校	—	—	—	一,二五七	一,二五七	
	並川尋常小學校	—	—	—	八〇五	八〇五	
	軍川尋常小學校	—	—	—	一,七六二	一,七六二	
	草野尋常小學校	—	—	—	一,五〇〇	一,五〇〇	
	鈴谷尋常小學校	—	—	—	一,四九一	一,四九一	
	川上尋常小學校	—	—	—	一,四三六	一,四三六	
	小沼尋常小學校	—	—	—	一,四〇〇	一,四〇〇	
	富岡尋常小學校	—	—	—	一,三六二	一,三六二	
深雪尋常小學校	—	—	—	一,三〇〇	一,三〇〇		
大谷尋常小學校	—	—	—	一,三二九	一,三二九		
圓山尋常小學校	—	—	—	一,一〇三	一,一〇三		
榮演尋常小學校	—	—	—	一,〇〇〇	一,〇〇〇		
落合尋常小學校	—	—	—	一,四二四	一,四二四		
計	—	—	—	二,三三九	二,三三九		
原	船見町尋常小學校	—	—	—	一,八四〇	一,八四〇	
直	一ノ澤尋常小學校	—	—	—	一,四一〇	一,四一〇	
大	千歳尋常小學校	—	—	—	一,三三二	一,三三二	
支直所結	貝塚尋常小學校	—	—	—	一,四八〇	一,四八〇	
計	—	—	—	五,一八九	五,一八九		
計	—	—	—	七,八七三	七,八七三		
計	—	—	—	一,四〇六	一,四〇六		
計	—	—	—	一,四〇六	一,四〇六		
計	—	—	—	一,四〇六	一,四〇六		
計	—	—	—	一,四〇六	一,四〇六		
計	—	—	—	一,四〇六	一,四〇六		
計	—	—	—	一,四〇六	一,四〇六		
計	—	—	—	一,四〇六	一,四〇六		
計	—	—	—	一,四〇六	一,四〇六		

第十章 教育

數	岡																	
	計	久春內	居泊	寒田野	斗	本	轄											
直	數香尋常小學校	留久志尋常小學校	牛毛尋常小學校	久春內尋常小學校	名寄尋常小學校	泊居尋常小學校	追手尋常小學校	野田尋常小學校	飛岸尋常小學校	南名好尋常小學校	氣主尋常小學校	吐鯉保澤尋常小學校	木斗尋常小學校	遠節尋常小學校	阿幸尋常小學校	麻內尋常小學校	麻內尋常小學校	海馬島尋常小學校
數	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
員	10,379	1,900	3,300	5,479	3,500	9,000	3,300	7,000	3,000	2,500	2,500	2,500	2,500	3,000	7,000	2,800	4,000	4,000
費	8,422	1,900	3,300	7,400	3,500	9,000	3,300	7,000	3,000	2,500	2,500	2,500	2,500	3,000	7,000	2,800	4,000	4,000
地	1,103	300	900	1,800	1,200	2,400	1,200	1,700	1,500	1,000	1,000	1,000	1,000	1,200	1,500	1,500	1,500	1,500
積	93	75	200	90	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
積	3,398	500	850	1,499	567	1,622	3,700	1,268	4,000	300	300	300	300	300	300	300	300	300
積	699	100	200	300	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

數	泊					真																
	計	富內	濱長	加多留	轄	直																
直	數香尋常小學校	富內尋常小學校	禮文別尋常小學校	奧鉢尋常小學校	長濱尋常小學校	荒栗尋常小學校	遠淵尋常小學校	多關內尋常小學校	平野尋常小學校	小原尋常小學校	留多加尋常小學校	雄吹泊尋常小學校	小田井尋常小學校	關泊尋常小學校	本古丹尋常小學校	宇遠泊尋常小學校	廣地尋常小學校	苦舞尋常小學校	大穗泊尋常小學校	富內岸澤尋常小學校	深白帆尋常小學校	
數	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
員	2,760	2,800	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000
費	1,965	2,400	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700
地	899	600	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300
積	48	400	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
積	8,600	4,800	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400

留	大	直轄	原																		
			計				榮			谷			轄								
小原尋常小學校	留多加尋常小學校	小田井尋常小學校	雄吹泊尋常小學校	貝塚尋常小學校	千歲尋常小學校	一ノ澤尋常小學校	船見町尋常小學校	計	落合尋常小學校	榮濱尋常小學校	圓山尋常小學校	大谷尋常小學校	深雪尋常小學校	富岡尋常小學校	小沼尋常小學校	川上尋常小學校	鈴谷尋常小學校	草野尋常小學校	軍川尋常小學校	並川尋常小學校	中樺尋常小學校
三五	四三	三三	三四	二四〇	二八二	五〇〇	一、〇四四	二八八	三三四	二五三	二四二	三二九	三三三	二二二	五五五	二九八	三〇〇	二九五	三八五	八五三	五七三

第五 私立小學校經費ノ二 (支出) (大正元年度)

豐直	支廳出張所轄	學	校	教員俸給	雜給	旅費	備品消費	營繕費	雜費	計	香				合計	名		好																	
											元泊	轄	直轄	計		城	鵜																		
唐松尋常小學校	精華尋常小學校	大澤尋常小學校	唐松尋常小學校	三〇							三	一	三	三	三	三	三	三	三																
四、七三六	一、一四六	五、五五三	四、七三六	一、四四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六	一、一四六						
一、九二七	二〇、五五八	三〇、五五八	一、九二七	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八	三〇、五五八					

香 敦		岡				
元泊	轄 直	計	內 春 久	居 泊	寒 田 野	斗
元泊尋常小學校	散江路尋常小學校 內路尋常小學校 敷香尋常小學校		留久志尋常小學校 新菱尋常小學校 牛毛尋常小學校 久春內尋常小學校	名寄尋常小學校 泊居尋常小學校 追手尋常小學校	小霜尋常小學校 野田寒尋常小學校 飛岸尋常小學校	氣主尋常小學校 南名好尋常小學校 吐銀保澤尋常小學校 木斗尋常小學校
五三三	三四五 二七〇 三三三	一四、二五	三三三 三三三 三三三 一、九〇	四九六 一、七二七	五七七 九七七 四一〇	二五 三四八 一四七 八八〇 五六
		三二四			五	三 六 一五
五五	〇 〇	五〇	二〇 三〇 三〇	二〇 四〇	七 三〇 一	一〇 一四 一五 二
三九五	二二二 四〇 二六二	四、三三	一〇六 一〇六 一〇六 一七五	三 二七 五	一六 一五〇 三	一 二五 八二 三三 二五 八
一九	三四 二 一	六六	一〇 一〇 一〇 三八	六 二五 二	八 二 一	一 一八 一九 二五 八六 一
七	六五 一 二	四六〇	三三 三三 三三 三七	一 四 六	〇 二五 四	一 四 三 一 三 二
一、〇八	五七七 三三〇 六〇〇	一〇、四九五	五三三 七三四 四四一	五八六 一、六八八	七九九 一、二六二	三三 五五九 四四三 一、七六六 二九五 四六四

眞			泊		
本	轄	直	富內	濱 長	加 多
麻內尋常小學校分教場	海馬島尋常小學校分教場 海馬島尋常小學校 藻白帆尋常小學校 宮內岸澤尋常小學校 大穗泊尋常小學校 苦舞尋常小學校 廣地尋常小學校 宇遠泊尋常小學校 木古丹尋常小學校 關泊尋常小學校	蘭泊尋常小學校 本古丹尋常小學校 宇遠泊尋常小學校 廣地尋常小學校 苦舞尋常小學校 大穗泊尋常小學校 宮內岸澤尋常小學校 藻白帆尋常小學校 海馬島尋常小學校 麻內尋常小學校	計	禮文別尋常小學校 奧鉢尋常小學校 長濱尋常小學校 荒栗尋常小學校 遠洲尋常小學校	多 兩龍尋常小學校 多 多蘭內尋常小學校 平野尋常小學校
七五	七二 四九六 三四五 四〇〇 六〇六 六九〇 六九〇 五六五 九七五	六、三三三	二九七	二七四 三〇〇 五六〇 二五〇 三七五	一七〇 二五〇 四九
二	二〇八 一 三 七 三				
二五 一〇	三 九 五 四 二 三 三 二 二 九	二九	一〇	一五 一五 一六 三〇	二〇 四 一〇
八四 三四	三七〇 三五〇 二七 二四一 一五五 一〇一 二四八 三三 一〇	一、五二六	一八	六六 六八 六六 七〇 一〇九	三 六 八
一	七 七 八 七 五 一〇 二 二 二	三五	三	二〇 一四	一〇 六 六
一 三五	二 八 五 二 四 八 四 二〇 二六 八	四〇四	五	一七 一〇 三六 九 一五	二 三 一〇
一七 七	一、二九 九〇 四九二 七三 八六 九三九 一、〇〇 八八 一、三六	八、〇九九	四八四	四三 三四 七二 三〇 五二九	二六 三八 五八



官幣大神社 樺太神社



同境界ヨリ豊原市街ノ瞰望

計	敷香支廳	久春内支廳	真岡支廳	大泊支廳	豊原支廳	支廳別		陸軍
						將校	下士	
九	一	二	二	四	一	四	陸軍	
四	二	五	三	二	九	一	陸軍	
四〇〇	一八	二四	九	一三	一五七	一	陸軍	
一〇	一	一	一	五	四	一	陸軍	
八三	七	六	三	九	三〇	一	陸軍	
四七二	三〇	三〇	一四八	一〇七	一五七	一	陸軍	
二八二	一六	二〇	二九	二五	二六	一	陸軍	
二五	七	八	三	二	四九	一	陸軍	
							海軍	
三							海軍	
七							海軍	
							海軍	
九	一				四		海軍	
二	三				一		海軍	
							海軍	
三〇	四	三	一	四	八		海軍	
一六	三七	一	三九	一五	二四		海軍	

第十二章 社寺及宗教

第一節 總說

明治三年樺太開拓使ヲ置キテ、諸般ノ施設ヲナスヤ、移住民亦多少土着ノ思想ヲ起スニ至リ、亞庭灣内ボロアントマリ(大泊榮町)其ノ他ニ祠宇ヲ起シテ、神靈ヲ奉祀セシ者アリシカ如クナルモ、本島ノ一タヒ露領ニ歸スルヤ、全ク荒廢ニ歸シ、今日ニ於テハ其ノ跡ヲ尋ヌルニ由ナシ、西海岸眞岡附近ニ於テモ、邦人ノ手ニ依リ社宇ノ經營サレシモノアリシト見エ、社燈及鳥居ノ石片ヲ發掘シタルモノアルモ、其ノ詳細ニ關シテハ記録ノ據ルヘキモノナシ。

本島ノ領有以來、年ヲ逐ウテ、移住民ノ増加スルニ從ヒ、部落民等各地ニ於テ、神社ノ創立ヲ計畫スルモノ相踵クニ至ル、即チ樺太廳ニ於テモ、此ノ人心ノ歸向ニ察シ、敬神ノ精神ヲ振興シ、島民安土ノ思想ヲ鞏固ナラシメンカ爲ニ、明治四十三年以來、樺太神社ノ創立ヲ企畫シタルニ次テ、豊原住民ニ於テハ豊原神社、眞岡住民ニ於テハ眞岡神社、久春内住民ニ於テハ久春内神社ノ創立ヲ見ルニ至レリ。

又一方宗教上ノ施設ニ至テハ、露領時代ニ在リテハ本島ヲ以テ一大監獄トナシ、所謂流刑ノ政策ヲ執リタルカ故ニ、宗教上ニ關シテハ特ニ一層ノ重キヲ置キタルカ如シ。即チコルサコフ(大泊)ベレズ

ニヤキ(富岡)及ガルキノウラスコエ(落合)ノ三箇所ニハ監獄寺院ヲ設ケテ僧官ヲ置キ、其ノ他ノ部落ニモ亦寺院若クハ教會堂ヲ設置シ、其ノ國教タル希臘正教ノ布教ニ努メタルカ如シ。

明治三十八年我領有ニ歸スルヤ、夙ニ各派ノ佛教僧侶續々來島シ、各所ニ布教所ヲ開設スルニ至レリ、此等ノ多クハ本山ノ負擔ヲ以テ之ヲ維持シ、各自其ノ布教ニ盡瘁シツ、アリ。

此等ノ詳細ニ互リテハ以下節ヲ分チ叙說セン。

第二節 神社

一 官幣大社樺太神社

樺太 豊原

當社ハ大國魂命、大己貴命、少彥名命ノ三神ヲ祭り、明治四十三年度ニ於テ其ノ創建ヲ企畫シ、同年度ニ於テハ、本殿、社務所、三ノ鳥居、社守宅(二棟)ヲ建設シ、同四十四年度ニ於テハ拜殿、祝詞屋、神庫、祭器庫、内外玉垣、社守宅(一棟)ノ工其ノ成ヲ告ケ、明治四十三年八月十七日官幣大社ニ列セラレ、同四十四年八月二十二日鎮座アリ、鎮座ニ際シ 聖旨ヲ以テ御太刀一振ヲ賜ハリ、又陸軍省ヨリ知加農砲一門、砲彈五箇、海軍省ヨリハ砲身一門、彈丸八箇、戦利露艦ノウキツク烟突一箇、樺太建網漁業者其ノ他ヨリ石燈籠三基ノ奉獻アリ。又大祭日ハ樺太廳始政記念日タル八月二十三日ニシテ、毎年盛大ナル祭典ヲ行フ。殊ニ大正二年ノ大祭ヨリ御神幸ノ式ヲ舉クルコト、ナレリ。

一 無格社豊原神社

樺太 豊原 西一條

當社ノ御祭神ハ天照皇大神ニシテ、豊原町民全部ヲ以テ其ノ氏子ト爲シ、明治四十三年八月三十一日其ノ創立認可ヲ得、本殿、拜殿、社務所、手水屋形、鳥居ノ設備ヲ有シ、境内坪數四百六十八坪、氏子戸數千三百七十七戸アリ、毎年十月十七日ヲ祭日恆例トス。

一 無格社眞岡神社

樺太 眞岡 山手町

當社ハ天照皇大神ヲ祭り、眞岡町民全部ヲ以テ其ノ氏子ト爲シ、明治四十三年八月三十一日其ノ創立認可ヲ得、本殿及拜殿ヲ有シ、境内坪數九百二十三坪、氏子戸數七百五十六戸アリ、毎年六月十五日、十六日、十七日ヲ祭日恆例トス。

一 無格社久春内神社

樺太 久春内 港町 大通

當社ハ天照皇大神、大己貴命、大國魂命、少彥名命、倉稻魂命ヲ祭り、久春内及隣接部落小茂白、宇蘭住民全部ヲ以テ其ノ氏子ト爲シ、當地方一般ノ守護神ト爲シ、明治四十四年六月二十六日其ノ創立認可セララル。本殿、拜殿ヲ有シ境内坪數千五百坪、氏子戸數百二十四戸アリ、毎年七月五日ヲ以テ祭日恆例トス。

第三節 布教

第一項 神道

二八八

- 一 黒住教 明治四十年七月、講正一名豊原ニ移住シ、開教事務所ヲ設ケテ、神道ノ布教及ヒ監獄囚徒ノ教誨等ニ従事シツ、アレトモ未タ信徒多カラス。
- 一 天理教 明治四十二年八月、訓導一名渡來シ、豊原及ヒ附近ノ部落ニ於ケル布教ニ力メ、次テ四十三年九月大講義一名渡來シ、樺太宣教所ヲ豊原ニ設ケテ教義ノ擴張ニ従事セリ。尙ホ四十五年五月泊居ニ、大正二年三月眞岡ニ、同年七月大泊ニ、各教師一名來島シ布教ニ従事シ居レリ。
- 一 神宮教 明治四十年十二月、神道本局所管ノ布教師一名大泊ニ渡來シ神宮遙拜所ヲ設立シ、略曆頒布、其ノ布教ニ従事シ居レリ。

一 金光教

大正二年八月、同教ノ教師一名大泊ニ渡來シ、開教旁々教會ヲ設ケ布教ニ従事シ居レリ。

一 基督教

一 希臘正教

露領時代ニ於テハ露國ノ國教タル希臘正教ハ、本島唯一ノ宗教ニシテ、其ノ教會堂ヲ各地ニ設置シ、僧官傳道師等來島シテ布教ニ従事シタルコト既ニ前述シタルカ如シ。而シテ本島ノ我カ領有ニ歸スルヤ、露國官憲ノ撤退ト同時ニ、僧官等モ亦全部退島シタルヲ以テ、殘留スル露國人ノ如キハ一時宗教上ノ指導ヲ失フニ至レリ。斯クテ四十四年九月ニ至リ、東京ニ於ケル希臘正教會ニコライ大主教ハ、特ニ所屬ノ宣教師ヲ特派シ、殘留露國人ニ對シ宗教上ノ指導ヲ與フルコト、ナシタ

ルヲ以テ、我カ樺太廳ニ於テモ、從前教會堂タリシ家屋ヲ還付シ、散逸セル寺鐘ヲ取集シテ、交付スル等種々ノ援助ヲ與ヘタリ。

一 聖公會

明治四十年七月、本邦人等ノ基督教ヲ信スル者相集マリ、樺太基督教會ナルモノヲ組成シ、翌四十一年牧師一名ヲ聘シテ布教傳道ニ従事セシカ、四十四年之ヲ日本聖公會ノ所屬トナシ、新ニ教會ヲ設置シテ以テ益々布教ニ力ヲ用フルニ至レリ。

一 天主教

大正二年五月宮城縣仙臺市天主教教會所屬ノ宣教師獨逸人二名豊原ニ渡來シ、開教ニ従事シ居ルモ未タ信徒多カラス。

第二項 佛教

一 眞宗本派本願寺

ハ明治三十八年本島ニ出征セシ獨立第十三師團附從軍布教使トシテ、五名ノ僧侶ヲ派遣シタリ。是レ實ニ佛教ヲ本島ニ布キタル始メナリトス。而シテ同年九月大泊ニ樺太開教總監部ヲ設置シ、總監タル連枝以下僧侶ヲ派遣シ、軍隊ニ對スル慰問、渡航民ニ對スル布教ニ努メ、兼テ大泊、豊原、眞岡ニ於ケル假本堂ノ建築工事ニ着手シ、翌三十九年五月ニ至リ、大泊ノ假本堂落成シタルヲ以テ、遷佛式ヲ施行セリ。尋テ同年七月、法主大谷光瑞等來島シ、大泊、豊原、落合ニ於テ、軍隊及移住民ヲ犒ヒ、更ニ内路、海豹島ヲ視察シテ歸山シタリ。同九月更ニ樺太開教總監部ヲ北海道開教總監部ニ合併シ、北海道開教總監代理トシテ連枝一人大泊ニ駐在シ、役僧數名之ニ附隨シテ、大

泊、豊原、真岡等樞要ノ地ニ出張所ヲ設ケ、四十一年六月ニ至リ、久春内ニモ之ヲ設置シ、各布教師一名ヲ置キテ、爾來専ラ布教ニ盡力シツ、アリ。尙ホ四十一年十月大泊ニ布教所ヲ進メテ別院ト爲セリ。爾來各地ニ布教所ヲ設立シ信徒最モ多シ。

二 眞宗大谷派本願寺 ハ三十八年九月布教使ヲ大泊ニ派遣シ、本島ニ於ケル同派ノ教務ヲ擔當セシメ、三十九年六月、更ニ布教使ヲ真岡ニ派遣シ、同年七月説教所ヲ新設シテ、同地方ノ布教ニ從事セシム。其ノ後同派ノ布教師續々來島各地ニ布教所ヲ設ケ、布教ニ從事シ居レリ。

三 曹洞宗 ハ北海道十勝國帶廣町曹洞宗永祥寺住職、三十八年九月來島シテ視察スル所アリシカ、三十九年五月ニ至リ、更ニ本山ヨリ視察員ヲ派遣シ、同年六月大泊ニ、同年十月真岡ニ、又四十年八月豊原ニ、孰レモ開教事務所ヲ設ケ、又四十一年五月泊居ニ布教場ヲ設置シ、布教師一名宛ヲ置キ各布教ニ從事セリ。其ノ後本斗、野田寒、久春内、蘭泊、榮濱、小田井等ニ布教所ヲ設置シ、信徒亦尠ナカラス。真岡、大泊、豊原布教所ハ大正元年八月、本斗布教所ハ同年十二月、野田寒布教所ハ大正二年八月寺號公稱認可寺院トナセリ。

四 淨土宗 同宗ノ管長ハ三十八年九月、樺太駐屯軍隊ニ布教使ヲ派遣シ、専ラ駐屯軍隊ニ對スル布教及慰問ニ從事セシメシカ、三十九年七月、移住民ノ最モ多キ追分ニ於テ布教所ヲ開設シ、布教ニ從事セシカ、後四十一年十二月ニ至リ、之ヲ豊原ニ移セリ。其後大泊、真岡、泊居等ニ同宗ノ布教所ヲ

設ケテ布教ニ從事シツ、アリ。

五 日蓮宗 同宗ノ布教使ハ、所屬管長ノ命ニ依リテ、三十九年四月初メテ來島シ、爾來諸般ノ視察計畫ニ從事セシカ、同年十一月大泊ニ寺院敷地ノ貸付ヲ受ケ、直ニ假堂宇ノ建築ニ着手シ、同年十二月工事落成シ、本尊奉安式ヲ舉行シ、引續キ布教ニ從事セリ。豊原ニモ堂宇及説教所ヲ設ケテ布教師ヲ置ケリ。四十四年久春内、真岡、野田寒等ニ同宗ノ布教所ヲ設立スルニ至レリ。

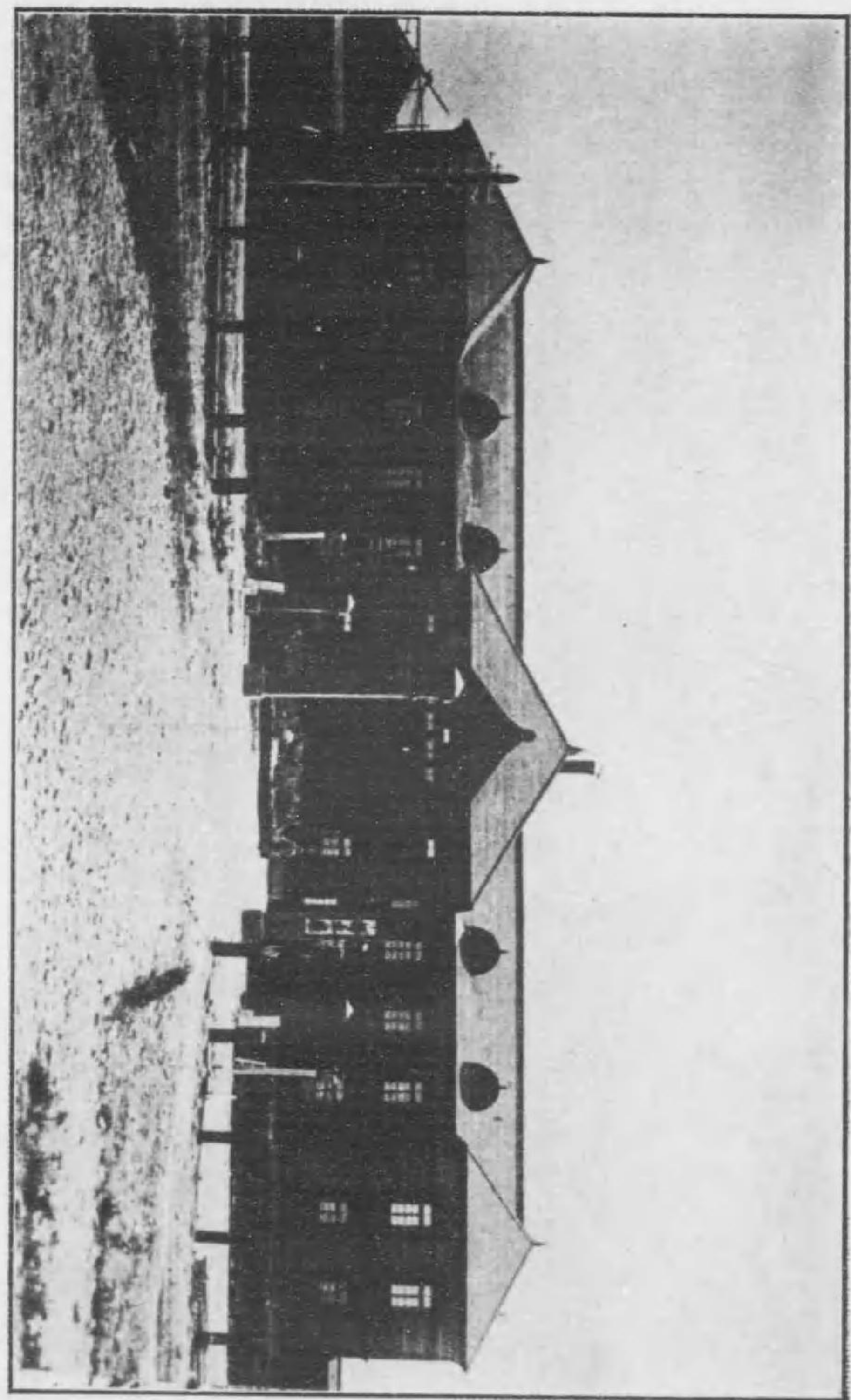
今大正二年末ノ調査ニ係ル、社寺及ヒ教會堂、各宗布教師及ヒ信徒ノ數ヲ舉クレハ左ノ如シ。

社寺教會布教所

支廳別	神社		佛		耶		計
	神	教	眞宗	淨土宗	公	計	
豊原支廳	二	一	四	一	一	一	二
大泊支廳	一	一	六	一	一	一	五
真岡支廳	一	一	六	一	一	一	五
久春内支廳	一	一	六	一	一	一	五
數香支廳	一	一	二	一	一	一	四
計	四	一	二二	六	三	四八	三一

備考 本表ハ公認ノモノ、ミヲ掲ク私祭スル神社布教所ハ本表以外トス。

各宗布教師及信徒



樺太廳

合 計	佛 教				神 教			支 派		支 廳 別
	淨土宗	真言宗	日蓮宗	曹洞宗	神宮教	金光教	天理教	黑住教	教 別	
二五、四八三	一	一	一	二	一	二	二	二	師教布	豐原支廳
一三、三五	一	一	一	一	一	一	一	一	人內地	
四、九〇二	一	一	一	一	一	一	一	一	人鮮朝	大泊支廳
二、九一九	一	一	一	一	一	一	一	一	人土	
三、三	一	一	一	一	一	一	一	一	人國外	眞岡支廳
二、九二五	一	一	一	一	一	一	一	一	計	
二、〇〇九	一	一	一	一	一	一	一	一	師教布	久春內支廳
一、三	一	一	一	一	一	一	一	一	人內地	
二、二七八	一	一	一	一	一	一	一	一	人鮮朝	教香支廳
三、一〇七	一	一	一	一	一	一	一	一	人土	
一、〇四	一	一	一	一	一	一	一	一	人國外	計
一、〇	一	一	一	一	一	一	一	一	計	
									師教布	
									人內地	
									人鮮朝	
									人土	
									人國外	
									計	

第十三章 行政及財政

第一節 總說

樺太廳設置以前ニ於ケル行政ハ、之ヲ分チテ二期トナスコトヲ得ヘシ。即チ一ハ軍政署時代ニシテ、他ハ民政署時代ナリトス。

一 軍政署時代 明治三十八年七月、樺太南部ノ我獨立第十三師團ニ依テ占領セラル、ヤ、師團長ハ、軍隊ノ安寧ト占領地ノ秩序トヲ保持スルカ爲、コルサコフ(大泊)ニ軍政署ヲ置キ、コルサコフ州ヲ以テ其ノ管轄區域トシ、軍政長官ハ南部占領軍司令官之ヲ兼ネ、州内一般ノ軍政ヲ統轄シ、且ツ軍司令官ノ下ニ軍政委員ヲ置キ、以テ軍政ニ關スル一般ノ事務ニ任セシメ、參謀以下ノ職員若干名ヲ以テ之ニ充テタリ。斯クテ州内ヲ分チテ第一、第二、第三、第四假軍政區ノ四區トシ、各區ニ軍政區署ヲ設ケ、軍政委員長以下ノ職員ヲ置キ、軍政委員長ヲシテ軍政事務ヲ施行セシメタリ。

二 民政署時代 樺太民政署ハ、三十八年五月發布セラレタル、占領地民政署職員ニ關スル勅令第三百五十六號ニ依リ編制セラレ、同年八月始メテ民政ヲコルサコフ、ホロアントマリ、ベルワヤバーチ及其ノ附近ニ布ク、是レ本島ノ民政ヲ管掌セシ創始ノ官廳ナリ。而シテ民政長官ハ、始メ獨立第十三師團長ニ屬シ、後樺太守備隊司令官監督ノ下ニアリテ、本島ノ民政ヲ統轄シ、其ノ安寧秩序ヲ保持シ、

且ツ諸般ノ軍務ヲ補助セリ。

本署ハ三十八年、軍令第一號ヲ以テ始メ之ヲアレキサンドルフスクニ置キ、尋テ同年九月コルサコ
フニ移セリ。而シテ同時ニ、樺太漁業假規則(三十八年八月陸軍省告示第十五號)ニ依リ、鮭鱈及鯨ノ
漁業ヲ許可セシ場所及其ノ附近、并ニ從來ノ軍制施行區域ノ第一、第二、第三、第四假軍政署管内ニ
民政ヲ布ケリ。其ノ施行セシ事項ヲ掲クレハ左ノ如シ。

- 一、出入船舶ノ檢疫ニ關スルコト。
- 二、出入船舶渡航者ノ取締ニ關スルコト。
- 三、人民ノ出願ニ係ル、土地使用、家屋、倉庫等ノ建築并ニ諸營業ノ許否及其ノ取締ニ關スルコト。
- 四、土地使用料、營業免許料、其ノ他ノ公課ヲ定ムルコト及其ノ徵收ニ關スルコト。
- 五、占領地人民ノ保護及救助ニ關スルコト。
- 六、市街豫定地、并ニ其ノ區劃ヲ定ムルコト。
- 七、衛生ニ關スルコト。
- 八、前各項ノ外、行政警察及司法警察ニ關スルコト。
- 九、占領地人民ノ刑事及占領地人民、并ニ在留帝國臣民ノ行政規則違反ニ對スル審判及處罰ニ關ス
ルコト。

一〇、民事審判ニ關スルコト。

一一、樺太島漁業假規則ノ實施ニ關スルコト。

一二、行政ノ目的ヲ以テ發シタル、軍令施行ニ關スルコト。

以上ノ事項中、警察ニ關スル事務ニ就テハ、當時未タ普通警察制度ノ設ケナカリシカハ、行政警察
ト司法警察トヲ間ハス、總テ特別ノ機關タル樺太守備隊憲兵長以下、憲兵隊等之ニ當リ、憲兵本部ヲ
コルサコフニ置キ、且樞要ノ地ニ其ノ分隊又ハ分遣所ヲ設置シ、憲兵長ハ民政長官指揮ノ下ニ其ノ職
務ヲ執行シタリ。

是明治四十年四月、樺太廳設置以前ニ於ケル行政沿革ノ大要ナリ。以下節ヲ改メ現時ノ組織及財政
ニ就テ略述セン。

第二節 行政機關

一 樺太廳

樺太廳ハ明治四十年三月勅令第三十三號ヲ以テ、同年四月一日ヨリ設置セラレタリ、後四十二年六月
勅令第二百八十三號、大正二年六月勅令第二百二十九號及十二月勅令第三百九號ヲ以テ官制ヲ改正セラ
ル、長官ハ內務大臣ノ指揮監督ヲ受ケ、法律命令ヲ執行シ、部内ノ行政事務ヲ管理ス。又郵便、電信、電

話及銀行、關稅ニ關スル事務ニ付テハ、各主務大臣監督ノ下ニ之ヲ行ヒ、其ノ職權若ハ特別ノ委任ニヨリ廳令ヲ發シ、之ニ二箇月以下ノ懲役、禁錮若ハ拘留又ハ七十圓以下ノ罰金若ハ科料ノ罰則ヲ附スルコトヲ得。而シテ本廳ニ長官々房、內務部、拓殖部、警察部ヲ置ク、部長ハ長官ノ命ヲ承ケ、部下ノ官吏ヲ指揮監督シ、其ノ部ノ事務ヲ掌理ス。而シテ事務ノ分掌ハ左ノ如シ。

長官官房

- 一、官吏ノ進退及身分ニ關スル事項。
- 二、文書ノ往復及記錄編纂ニ關スル事項。
- 三、官印、廳印ノ管守ニ關スル事項。
- 四、褒賞ニ關スル事項。
- 五、外國人ニ關スル事項。

內務部

- 一、教育ニ關スル事項。
- 二、商工業ニ關スル事項。
- 三、氣象測候ニ關スル事項。
- 四、土木ニ關スル事項。

五、會計ニ關スル事項。

六、鐵道、郵便、電信、電話ニ關スル事項。

七、他部ノ主掌ニ屬セサル事項。

拓殖部

- 一、土地ノ處分及拓殖ニ關スル事項。
- 二、鑛山、森林、農業、牧畜ニ關スル事項。
- 三、水產漁狩ニ關スル事項。

警察部

- 一、警察ニ關スル事項。
- 二、衛生ニ關スル事項。

右ノ分掌事項ニ基キ、分課規程ヲ設ケ、長官官房ニ秘書係、文書係。內務部ニ庶務課、通信課、土木課、主計課、會計課。拓殖部ニ拓殖課、林務課、鑛務課、水產課。警察部ニ警務課、保安課ヲ置キ以テ事務ノ分掌ヲ定メ、長官官房ニ主事一人、各課ニ課長一人ヲ置キ、課長ハ高等官又ハ判任官ヲ以テ之ニ充ツ。

二 樞太廳支廳

支廳長ハ長官ノ指揮監督ヲ承ケ、法律命令ヲ管内ニ執行シ、部内ノ行政事務ヲ掌理シ、部下ノ官吏ヲ指揮監督ス。而シテ支廳ハ、本廳設置ノ當初ニ在リテハ管内ヲ三區ニ分チ豊原、大泊、真岡ノ三箇所ニ置キタリシカ、後敷香、名好ノ二支廳ヲ増置シ、本年ニ至リ名好支部ヲ久春内支廳ト改稱セリ。其ノ管轄内樞要ノ地ニ、支廳出張所ヲ置ク。各支廳及出張所ノ名稱、位置及管轄區域ハ左表ノ如シ。

支廳及支廳出張所管轄區域

支廳	管轄區域	出張所	管轄區域
豊原支廳	中央中里東海岸富内及西海岸多蘭泊ノ各北端ヲ連繫スル線以北ニ於テ大泊支廳ノ各北端支廳及久春内支廳ニ屬スル部分ヲ除キ北邊古丹川右岸ニ至ル區域	榮濱出張所 元泊出張所	南方留多加山ヨリ圓山及小谷北端ヲ經テ落合山ニ至ル線、落合山ヨリ山脈ヲ沿ヒ鈴谷岳ニ至ル線及富内出張所管轄界ヨリ北方近幌川右岸及西方真岡支廳久春内支廳管轄界ニ至ル一圓
大泊支廳	中央中里東海岸富内及西海岸多蘭泊ノ各北端ヲ連繫スル線以南ニ於テ真岡支廳管轄以東島古丹川右岸以南ノ區域	富内出張所 長濱出張所 留多加出張所	南方中知床岬ヨリ分水嶺ニ沿ヒ北方榮濱出張所管轄界ニ至ル一圓 南方中知床岬ヨリ分水嶺ニ沿ヒ西方北宗谷岬ニ至ル一圓 西方ハ真岡支廳管轄界ヨリ東方鈴谷川ヲ境シ北方豊原支廳管轄界ニ至ル一圓
		本斗出張所	南端西能登呂岬燈臺用地西北端ヨリ白主山南端山雨龍山留多加山野田寒岳ヲ連繫スル分水嶺以西ノ區域ニ於テ北方邊字氣

真岡支廳	久春内支廳	數香支廳
ニ至ル地域及中央中里西海岸多蘭泊ノ各北端ヲ連繫スル線以北ニ於テ其ノ線ト留多加川トノ交又點ヨリ中野南留多加山トチ通スル線以西ノ地域并海馬島一圓	野田寒岳ヨリ釜伏山、寒須取山ヲ連繫シ國境ニ至ル線以西ニ於テ真岡支廳管轄ニ屬スル部分ヲ除キタル區域	北邊古丹川左岸以北ニ於テ豊原支廳及久春内支廳ノ管轄ニ屬スル部分ヲ除キタル區域及海釣島
野田寒出張所 鶴城出張所	泊居出張所	散江出張所
南方小能登呂岬海岸三角標ヨリ小野能登呂岬兩岬兩地境界ヲ經テ列丹川流域ト羽舞川流域トノ分水嶺通ヨリ北方邊字氣ニ至ル一圓	南方真岡支廳管轄界ヨリ北方和良北端ニ至ル一圓	西方野頃川及東北山脈、北方國境ニ至ル一圓

三 樺太廳醫院

樺太廳醫院ハ、四十年三月、勅令第三十四號ヲ以テ設置セラレ、樺太廳長官ノ管理ニ屬シ、診療及醫藥ニ關スルコトヲ掌ル、醫院長ハ長官ノ命ヲ受ケ、院務ヲ管理シ、所屬職員ヲ指揮監督ス。而シテ樞要ノ地ニ醫院分院ヲ設ケ、樺太廳醫院内ニ、看護婦、産婆養成所ヲ置ク。

現在ニ於ケル醫院及分院ノ所在地、職員數并ニ名稱位置、四十四年及大正元年ニ於ケル患者數等左ノ如シ。

名 稱	所在地	職 員		患 者			
		醫師藥劑師 其他職員 看護婦	計	入 院	外 來	施 療	計
樺太廳醫院	豐原	五	二〇	延一〇、六四八	一七、七六二	五、一〇二	三三、五一二
同大泊分院	大泊	一	二	延四、九四五	三二、三五九	一、九六四	二九、三一四
同真岡分院	真岡	四	一三	延三、二六〇	二〇、四一三	六、〇四一	二九、七〇五
計		一三	四五	延一八、八九〇	六〇、五三四	一三、一〇七	九二、五三一
四十四年		一二	四一	延一一、六二一	六八、一〇八	一六、四三八	九六、二三九

四 樺太廳郵便局

樺太廳郵便局ハ、四十年三月勅令第三十五號ヲ以テ設置セラレ、後四十二年五月勅令第四百十八號ヲ以テ官制改正セラレタリ、同局ハ樺太廳長官ノ管理ニ屬シ、郵便、郵便爲替、郵便貯金及電信電話ニ關スル事務ヲ掌理ス。而シテ普通局及特定局ノ位置、名稱及其ノ事務ハ、第九章第四節通信ニ於テ表示シタルカ如シ。

五 樺太廳鐵道事務所

樺太廳鐵道事務所ハ、四十一年九月設置セラレ、四十四年五月規程ヲ改正シ、鐵道ノ運輸、車輛ノ

運轉、線路及機器ノ修理保存ニ關スル事務ヲ掌ル。

六 樺太廳測候所

樺太廳測候所ハ、四十一年九月設置セラレ、左ノ事務ヲ掌ル。

- 一、氣象ノ調査及報告。
- 二、地方暴風警報。
- 三、地方天氣豫報。
- 四、氣象通報。
- 五、氣象器械比較檢定。
- 六、氣象地震等ノ觀測。

七 樺太廳農事試驗場

樺太廳農事試驗場ハ、四十一年九月設置セラレ左ノ事務ヲ掌ル。

- 一、農産ノ増殖改良ノ試験ニ關スル事項。
- 二、農事調査ニ關スル事項。
- 三、種苗ノ配付ニ關スル事項。
- 四、農事ノ指導及講話ニ關スル事項。

八 樺太廳種畜場

樺太廳種畜場ハ、四十一年九月設置セラレ左ノ業務ヲ掌ル。

- 一、家畜ノ蕃殖及改良ニ關ル事項。
- 二、畜産ノ調査ニ關スル事項。
- 三、畜産製造試験ニ關スル事項。
- 四、畜産ニ關スル指導及調査事項。

九 樺太廳水産試験場

樺太廳水産試験場ハ、四十一年九月設置セラレ左ノ業務ヲ掌ル。

- 一、漁撈ニ關スル調査及試験。
- 二、水産試験ニ關スル調査及試験。
- 三、養殖ニ關スル調査及試験。
- 四、魚苗介苗ノ配付。
- 五、水産製造品ノ分析及鑑定。

十 樺太廳工業調査所

樺太廳工業調査所ハ、元ト樺太廳臨時工業調査所ト稱シ、四十三年六月設置セラレ、大正二年八月

改稱、工藝ノ試験及調査ニ關スル事項ヲ掌ル。

十一 樺太廳豊原乾餾工場

樺太廳豊原乾餾工場ハ、四十四年六月設置セラレ、木材ノ乾餾工業即チ木精、醋酸石灰及「タール」ノ製造并其ノ殘骸ヲ木炭トナス等ノ作業ヲ掌ル。

第三節 財政

一 豫算

民政署時代ハ、其ノ廳費ハ臨時軍事費特別會計ヨリ支出セラレ、別ニ軍令ノ下ニ於ケル雜收入ニ屬スル歳入ニ依リテ支辨セラレタル一ノ地方費ナルモノアリテ、事業費ニ充當セラレタリ。之ニ仍リテ本島財政ノ獨立ニ對シ、將來ニ於ケル立法上ノ基礎ヲ構成セリ。而シテ此ノ特別會計ハ三十九年度ニ於テ終了ヲ告ケ、四十年三月軍政撤去樺太廳設置ト共ニ、樺太廳特別會計ヲ編制セラル。其ノ歳出入ハ内務省ノ所管ニ定メラレシモ、後四十三年六月官制改正ト共ニ、之ヲ大藏省所管ニ移シ、大正二年六月ニ於テ再ヒ内務省所管トナレリ。

今明治四十年度以後ニ於ケル歳入歳出ノ決算ヲ表示スレハ、

樺太廳歳入明細

計	臨 部		常 部		經 部		樺太神社費						
	費	業	合	豫	廳 太 樺								
					諸	機		現	雜	旅	修	廳	俸
輕便鐵道費	拓殖費	營業費	事務費	計	計	支	密	業	給	雜	繕	給	費
一、〇九六、〇七三	五三三、〇八七	四八七、七四九	八五、二三七	九六、六〇三	九七三、六〇三	二〇〇、九二二	一五、〇〇〇	三三八、七〇〇	二五六、〇〇九	四七、一五一	二二、〇四七	七、三二二	二〇六、三三〇
九九七、三三四	三〇四、四〇六	五八九、七四三	一〇三、一八四	九〇七、八九七	九〇二、八五三	一九、五六四	一五、〇〇〇	二七九、三五三	二四三、九六六	四七、〇〇一	二二、〇四二	七、四一六	二〇一、四四三
一、〇二五、三四三	三五二、八九八	五六一、二〇〇	一一、三四四	八七二、二二二	八七一、九四〇	二〇、三〇五	一五、〇〇〇	一九八、五四一	二九八、四四一	四四、七七一	四〇、二五二	六、四七七	一九六、三三二
七五九、四四五	二七二、〇七六	四八七、三六九	—	八一九、四二二	八一九、四二二	一〇、三八七	一五、〇〇〇	一五一、二八一	二九二、三二〇	五四、〇一五	四五、八三二	七、八、三五八	一七二、三三〇
九二五、九一〇	二二四、四二六	一八九、二二三	—	六二九、六七〇	六二九、六七〇	九、七七七	一五、〇〇〇	二八二、〇二七	二八二、〇二七	五五、三〇九	二五、五五七	七、八、二六三	一六三、七九七
六五六、六〇三	二二〇、六七七	一七九、九五〇	—	五三九、一一〇	五三九、一一〇	六、〇三二	一五、〇〇〇	二四六、九一〇	二四六、九一〇	三九、〇九八	一五、〇〇〇	七、四、九七九	一四二、〇八二

樺太廳歲出明細

歲 入 合 計	部 時 臨		部 常 經		科 目
	合	計	入	歲	
二、二六、七五九	八、九、七、七三	七、四、五、四九二	二、〇、七、七、八一	一、三、三、一、六八八	大正元年度
二、〇、七、七、八一	七、四、五、四九二	一、三、七、四、七八	一、三、七、四、七八	一、三、三、一、六八八	四十四年度
二、〇、三、四、九四三	八、六、七、九一	二、六、〇、五、二四	二、〇、三、四、九四三	一、一、〇、八、一、五二	四十三年度
一、八、三、九、三八二	八、〇、一、一、五九	二、七、七、九、五七	一、八、三、九、三八二	一、〇、三、八、二、三二	四十二年度
一、八、四、七、四二二	一、〇、八、三、八七〇	四、五、四、四、六四	一、八、四、七、四二二	七、三、三、五、四三	四十一年度
一、六、六、四、五二	六、九、四、四六	—	一、六、六、四、五二	一、〇、三、七、〇、四六	四十年度

時	部				合	歲
	樺太神社鎮祭費	移應費	傳染病豫防費	災害費		
三〇六	一、九九				一、〇九六、〇七三	二、〇七、六七七
					九九、三三四	一、九七、三三二
					一、〇二五、三四三	一、八九七、四六五
					七五九、四五	一、五六、八七
					九九、七八五	一、五六九、四五五
					六七二、八七六	一、三二、九六六
		七、一九二				
		九、〇八二				
		一三、八七五				

二 租 稅

本島行政機關ノ收入ハ、樺太廳ニ於テ殆ト全般ヲ網羅セル結果トシテ、唯司法機關ノ收入ニ屬スル罰金及沒收金ト、監獄ノ收入ナル囚人工賃及製作收入トヲ除ケハ、他ハ何レモ樺太廳特別會計歳入ニ編入セラル、租稅ハ明治四十年三月ヨリ課稅種類中ノ二三ヲ除キ、他ハ何レモ課稅ノ地域ヲ物資ノ集散地ナル大泊、豊原及眞岡ノ三市街ニ限定セラレタレトモ、逐年ノ發展ト民力ノ程度トニ鑑ミ、移民ノ保護上二三ノ例外ヲ認ムル外、四十四年度ヨリ之ヲ全島ニ施行スルコト、ナシタリ。其ノ稅法簡シテ、戸數割、營業稅、雜種稅及酒類出港稅ノ四種ニ限ラレ、且他ニ何等ノ附加稅ナキナリ。今其ノ課稅方法并ニ其ノ性質ノ大要ヲ叙センニ、戸數割ハ府縣ニ於ケル戸數割ニ該當スト雖、其ノ課稅方法ハ、府縣ノ如ク、一戸ノ平均負擔額ヲ定メ、戸數ニ應シ、其ノ總額ヲ町村ニ配付スルモノト

異リ、主トシテ收入又ハ所得ヲ基礎トシ、定メタル等級ノ下ニ定額ヲ賦課ス、所得稅又ハ收益稅ノ性質ヲ加味ス。營業稅ハ國稅營業稅并ニ府縣營業稅ノ内容ヲ有ス、其ノ課稅方法ハ、多クハ營業收益又ハ資本ヲ標準トシテ定メタル等級ノ下ニ定額ヲ賦課ス、收益稅ノ性質上轉嫁ヲ豫期セサルト雖、就中酒類及醬油釀造業ニ對スルモノニ在リテハ、間接稅ノ如ク消費者ノ負擔ニ歸ス。然レトモ擔稅力ニ比シテ尙稅率低キヲ以テ、本島產業ヲ障礙スルノ虞ナシ。

雜種稅ハ、其ノ種類中ニ國稅ノ鑛業砂鑛採取狩獵ノ諸稅ヲ包含スルモ、他ノ多クハ警察取締ニ屬スルモノニ對スル公課ニ過キス。其ノ實質府縣稅ト相同シキヲ以テ、新來ノ住民ト雖之レカ爲何等苦痛ヲ訴フルモノナキ狀態ナリ。

酒類出港稅ハ大正元年九月一日ヨリ實施シ、以テ本島酒類ノ移出ノ途ヲ啓キタリ。近クハ大泊ニ於テ、本島ノ麥類ヲ以テ酒精ノ製造ニ着手セル企アリ、之カ出港スルノ時期ニ至ラハ、相當ノ課稅アルニ至ラン。

左ニ租稅ノ賦課額ヲ示サン。

科 目	年 別
租 稅 割	大正元年
	四十四年
	四十三年
	四十二年
	四十一年
	四十年
	戶 數

計	營業種稅		計
	酒類出港稅	雜稅	
六九、五九四	二、九七五	三二、二五〇	三〇八
七二、八九八	二六、二四	三〇、六八八	
三四、二六	一三、三七二	一四、九六三	
二八、七〇三	八、〇三	一四、一四五	
三三、三四一	二六、〇八二	二六、〇八二	
二九、三七七	二四、八三三	二四、八三三	

三 稅外收入

稅外收入ハ、樺太廳特別會計歲入ノ内租稅ヲ除キタル全般ノ歲入ヲ網羅セラル。而シテ此ノ稅外收入ハ、實ニ獨立財政ノ基礎ニシテ、之カ消長ハ殖民行政ノ全般ヲ支配シ、歲計調理ノ骨子ナリトス。左ニ其ノ賦課額ノ大要ヲ列記セン。

科目	年度別	
	元年度	四十四年度
官業及官有財產收入	五〇、四九四	四〇、一五七
諸免許及手數料	六五、五三二	七三、〇四二
印紙收入	二六、六三六	一一、七五四
雜收入	一一、一三八	二二、〇四三
官有物拂下代	七、八八七	三五、七〇〇
返納金	六、〇〇三	一、一〇八
合計	一、四七二、六八五	一、二九七、二八四

四 補充金

本島ノ財源ハ、普通行政費ヲ償フニ足レリト雖、本島ノ拓殖經營ニ就テハ、交通ニ運輸ニ移民ニ殖産ニ、幾多ノ施設計畫ヲ要スルコト勿論ナリ。故ニ四十四年度以後、年々約五萬圓ノ補給ヲ國庫ヨリ仰キツ、アリト雖、尙將來ニ於テモ、之カ補助ヲ俟ツニアラサレハ、其ノ拓殖經營ノ途自ラ遅々タルヲ免レサルヘシ。殊ニ本島ニ於テ最モ豊富ナル鑛產物採掘ノ如キ、林產物化學加工ノ如キ、今尙試驗時代ニ屬シ、未タ以テ財源トスルニ足ラスト雖、今後之ニ對スル充分ノ放資ト、適當ノ施設トヲ得ハ、恐クハ將來ニ於ケル有力ナル財源タルヲ失ハサルヘク、其ノ曉ニハ國庫ノ補給ヲ仰クノ必要ナキニ至ルヘキヤ然セリ。



所判裁區原豐及所判裁方地太樺



監分太樺獄監幌札

第十四章 司法

第一節 民政署時代ノ司法

本島占領以降、明治四十年四月、官制改正以前ニ於ケル司法及監獄ノ概況ハ左ノ如シ。

(第一) 樺太民政署司法委員

(甲) 構成及權限 樺太民政署司法委員ハ、三十八年十月、樺太守備隊司令官軍令第二十三號ヲ以テ設ケラレ、民事刑事(臨時軍法會議ノ所管ヲ除ク)ノ審判ヲ掌ル機關ニシテ、民政署職員中ニ就キ民政長官之ヲ命ス、其ノ職務ヲ行フ所ヲ民政法院ト稱ス。而シテ其ノ審判ハ合議一審ノ制ナルモ、民政長官ニ於テ必要ト認ムルトキハ、單獨制ヲ以テ之ヲ行ハシムルコトヲ得、又刑ノ言渡ニ錯誤アリタルコトヲ發見シタルトキハ、民政長官ハ、更ニ其ノ再審ヲ命スルコトヲ得。其ノ權限ノ大要左ノ如シ。

(イ) 刑事

一、外國人ノ刑事及帝國臣民又ハ外國人ノ行政ノ目的ヲ以テ發シタル軍令及其ノ他ノ諸規則違反ニ對スル處罰ヲ掌ルコト、但シ軍令裁判所ノ權限ニ屬スルモノハ此ノ限ニ在ラス。安寧秩序ヲ害シ、又ハ生命、身體、自由、名譽、財産ニ害ヲ加フルノ所爲アルトキハ、地方ノ法

規、慣例、陸軍刑法、海軍刑法及日本帝國刑法其ノ他附屬法律ヲ參照シテ、之ヲ處分スルコト。

二、犯罪ニ係ル事實審査ノ爲、證人ヲ喚問シ、鑑定ヲ命ジ、臨檢ヲ爲シ、家宅ヲ搜索シ、物件ヲ押收スルコト。

三、職務執行ノ爲、憲兵ヲ指揮スルコト。

(ロ) 民事

帝國臣民及外國人ニ關スル一切ノ民事々件ヲ審判スルコト。

(ハ) 正式審判

樺太民政署支署長ノ即決言渡ニ服セサル者ヨリ、正式審判ノ請求アリタル場合ニ、之カ審判ヲ爲スコト。

又樺太民政署支署長ハ、或ル範圍内ニ於テ、司法委員ト同一ノ權限ヲ有シ、民事、刑事ノ即決ヲ爲スコトヲ得、其ノ權限ノ大要左ノ如シ。

(イ) 刑事

一、行政ノ目的ヲ以テ發シタル軍令其ノ他ノ諸規則違反者ニシテ、禁錮一箇月、罰金百圓以内、若ハ物件沒收ヲ言渡スヲ適當ト認ムルトキハ、即決ヲ以テ之ヲ言渡スコト。

二、禁錮若ハ拘留ノ言渡ヲ爲シタルトキハ、之ヲ留置スルコト。

(ロ) 民事

一、勸解ヲ爲スコト。

二、二百圓以内ノ金額又ハ價格二百圓ヲ超過セサルモノ、請求ニ係ルトキハ、即決ヲ以テ之ヲ審判スルコト。

(乙)

審判ノ執行ハ、總テ憲兵ヲシテ之ヲ行ハシム。即チ民事審判及成立シタル勸解ノ強制執行ヲ爲サントスル者ハ、樺太守備隊憲兵長ニ之ヲ申請スヘク、憲兵長ハ、必要ニ應ジ、憲兵ヲシテ強制手段ヲ施サシムルコトヲ得、又刑事審判ノ執行ニハ、樺太民政署拘禁所ノ設ケアリ、左ニ之ヲ概説セム。

樺太民政署拘禁所ハ、三十九年一月、軍令第三十一號ヲ以テ、之ヲコルサコフ(大泊)ニ設ケ、又其ノ支所ヲウラジミロフカ(豊原)及マウカ(真岡)ニ設ケ、而シテ其ノ職員ハ、憲兵ヲ以テ之ニ充テ、樺太守備隊憲兵長ノ管理ニ屬シ、司法委員ノ管掌ニ係ル未決、既決ノ囚人ヲ拘禁スル所トス、又其ノ支所ハ、憲兵分隊長若ハ憲兵分遣所長、之カ管理ニ任シ、樺太民政署支署長ノ即決權限ニ屬スル未決既決ノ囚人ヲ拘禁スル所タリ。而シテ其ノ警戒及看守等ハ、憲兵長ノ命ヲ承ケ、憲兵準士官及下士、上等兵等之ニ服シ、尙ホ憲兵長ハ、拘禁ノ目的ヲ達スルニ必要ナル處理ヲ爲スモノトス。

(第二) 樺太守備隊臨時軍法會議

(甲) 構成及權限 樺太守備隊臨時軍法會議ハ、三十八年、法律ニ代ハルヘキ勅令第九十二號ニ依リ、三十七、八年戰役ノ際設ケラレタルモノニシテ、其ノ構成ハ、陸軍治罪法ノ規定ニ基キ、判士長(佐官)、判士(尉官)、理事及録事等ヲ以テ成リ、其ノ權限ハ、前記勅令第九十二號及陸軍治罪法、戒嚴令、其ノ他特別ノ規程ニ依リ、民事及刑事々件ニシテ、樺太民政署司法委員ノ權限外ニ屬スル事件ヲ管掌ス。

(乙) 治罪手續ハ、陸軍治罪法及關係法規ニ依ルノ外、樺太守備隊司令官ノ定メタル治罪特例ニ依リ、令狀ノ執行、廷内ノ警戒、被告人ノ看守及護送ハ、憲兵若ハ衛兵ヲシテ之ヲ行ハシム。而シテ、軍法會議ニ於テ掌ル未決及既決ノ囚人ハ、守備隊囚禁所ニ之ヲ囚禁シ、其ノ看守及警戒ハ、憲兵之ニ當リ、監獄長ノ職務ハ、憲兵長之ヲ行フ。

第二節 裁判所

明治四十年三月、法律第二十八號ヲ以テ、本島ウラジミロフカ(豊原)ニ樺太地方裁判所及ウラジミロフカ區裁判所、マウカ(真岡)ニマウカ區裁判所ヲ設置セラレ、同年四月一日ヨリ開廳セラレタリ、同時ニ勅令第九十四號ヲ以テ、法例、裁判所構成法、民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法、

不動産登記法、辯護士法、家資分散法等ヲ首メトシテ續テ今日ニ至ル迄主要ナル法律八十餘、皆之ヲ本島ニ施行セラレタルヲ以テ、裁判所ノ組織權限ハ、一般内地ト異ナル所ナキモ、左ノ事項ニ限り、特別ノ規定ヲ存ス。

- 一、本島ニ於ケル、土人ノ外ニ關係者ナキ民事ニ關スル事項及土人ノミニ對スル刑事ニ關スル事項ハ從來ノ慣例ニ依ル。
- 二、前項ニ關スル訴訟手續ハ、裁判所ノ便宜ニ從フ。
- 三、民法又ハ商法ニ規定スル登記ヲ爲スヘキ期間ハ之ヲ二倍ス。
- 四、民事訴訟法第六十七條第一項及刑事訴訟法第十六條第一項ノ場合ニ於テ、海陸四里毎ニ一日ヲ延長ス。

五、裁判所又ハ裁判長カ職權ヲ以テ、辯護士ヲ訴訟承繼人、訴訟代理人又ハ辯護人ニ選定シ、若ハ選任スヘキ場合ニ於テハ、辯護士ニ非サル者ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得。

而シテ、四十年九月、司法省令第三十號ヲ以テ、ウラジミロフカ區裁判所コルサコフ出張所ヲ大泊ニ設置シ、同年十一月一日ヨリ登記事務ヲ開始ス、明治四十四年三月二十四日法律第三十三號ヲ以テウラジミロフカ區裁判所ヲ豊原區裁判所、マウカ區裁判所ヲ真岡區裁判所ニ改稱シ、同年司法省令第四號ヲ以テウラジミロフカ區裁判所コルサコフ出張所ヲ大泊出張所ト改稱シタリ、以上裁判所ノ管轄

區域左ノ如シ。

地方	裁判所	出張所	管轄區域
樺太	豊原	大泊	<p>樺太ノ内 西能登呂岬燈臺用地西北端ヨリ白主山稻穂山雨龍山留多加山ヲ連繫スル山脈ヲ趁ヒ多蘭泊ト中里トノ各北端ヲ連繫スル線ニ至リ其交叉點ヨリ同線ヲ東ニ留多加川ニ至リ其交叉點ヨリ河流ヲ過リテ中野南方合流點ニ至リ同合流點ヨリ一直線ニ留多加山ニ至リ同山ヨリ野田寒岳釜伏山惠須取山ヲ連繫スル山脈ヲ趁ヒ國境ニ至ル各線ヲ境界トシ其東 海豹島</p>
樺太	眞岡		<p>樺太ノ内 西能登呂岬燈臺用地西北端ヨリ白主山稻穂山雨龍山留多加山ヲ連繫スル山脈ヲ趁ヒ多蘭泊ト中里トノ各北端ヲ連繫スル線ニ至リ其交叉點ヨリ同線ヲ東ニ留多加川ニ至リ其交叉點ヨリ河流ヲ過リテ中野南方合流點ニ至リ同合流點ヨリ一直線ニ留多加山ニ至リ同山ヨリ野田寒岳釜伏山惠須取山ヲ連繫スル山脈ヲ趁ヒ國境ニ至ル各線ヲ境界トシ其西 海馬島</p>

第三節 監獄

一、沿革 明治四十年四月一日、始メテ札幌監獄樺太分監ヲ設置セラル、ヤ、樺太民政署所屬拘禁所及樺太守備隊所屬囚禁所ヨリ在監人并ニ書類ノ引繼ヲ受ケ、當時樺太守備隊所屬ノコルサコフ囚禁所

ヲ以テ直ニ假分監ニ代用シ、監獄事務ヲ開始シ、同月更ニ假事務所ヲウラジミロフカニ移シ、一時憲兵分遣所内ナル囚禁所ヲ以テ監房ニ充テタレト、同年九月豊原殖民地南四線東二號地ヲ監獄用地ト定メ、翌年九月ニ至リ、新築工事ヲ竣ヘ、直ニ移轉開廳シ、以テ今日ニ及ヘリ。

眞岡出張所ハ、當初諸般ノ事務ヲ樺太眞岡支廳ニ委囑シタリシカ、明治四十年八月眞岡中ノ町ニ地所ヲ選定シ監獄用地ト定メ、工事中一時其ノ事務ヲ開始シ、同十二月ニ之ヲ落成シ、本年ニ及ヒタレト、本年五月終ニ之ヲ廢止セリ。

以下四十四年及大正元年ニ於ケル犯罪ニ關スル統計ヲ掲ク。

刑事被告人出入累年比較

年次	越人員	入	監出	監現	在	拘禁延人員	一日平均人員
四十四年	男 八 女 一	二七五	二六五	一八	七、七八八	二、三三二	〇、九三二
大正元年	男 一八 女 一	二六七	二七一	一四	五、七八二	一、五七四	〇、五七四

受刑者ノ出入累年比較

年次	越人員	入	監出	監現	在	拘禁延人員	一日平均人員
四十四年	男 一三四 女 一	二二〇	二二一	一四三	四一、〇二八	一、二四〇	四、六四〇